

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 254

馬屋長田遺跡  
馬屋出水遺跡  
馬屋森向遺跡

県道岡山吉井線改良工事に伴う発掘調査2

2021

岡山県教育委員会



# 序

県道岡山吉井線は、岡山市街地とその近郊住宅地の赤磐市を結ぶだけでなく、国道374号と接続して中国山地を縦走する中国自動車道、さらには国道53号と接続して山陰地方を走る国道9号とを繋ぐ、岡山県東部の重要な交通路です。

この県道岡山吉井線について、近年の交通量増加に伴う渋滞緩和を図るために4車線化が計画されたことから、赤磐市馬屋の計画路線内に所在する埋蔵文化財を把握することを目的として、昭和63（1988）年に試掘調査を実施しました。この調査で新たに確認された馬屋長田遺跡、馬屋出水遺跡、馬屋森向遺跡については、現状での保存が困難であることから記録保存の措置を講じることになり、翌年に実施した発掘調査によって馬屋長田遺跡では備前国分寺の中軸線に沿って南に延びる古代の道路、馬屋出水遺跡では古代の掘立柱建物や溝、また馬屋森向遺跡では古代～近世の整地層を検出しました。備前国分寺・国分尼寺や古代山陽道の高月駅家周辺の様子を知る上で重要な手がかりになるものと思われます。

本書がこの地域の歴史研究の資料として活用されることを期待いたします。

発掘調査に当たりましては、関係機関や地元住民の皆様から御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 小見山 晃



# 例 言

- 1 本書は、県道岡山吉井線改良工事に伴い、岡山県教育委員会が岡山県土木部から委託を受け岡山県古代吉備文化財センターが実施した、馬屋長田遺跡・馬屋出水遺跡・馬屋森向遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 馬屋長田遺跡・馬屋出水遺跡・馬屋森向遺跡は、岡山県赤磐市馬屋に所在する。
- 3 本書の調査は、昭和63年11月24日～12月27日に文化財センター職員 宇垣匡雅が担当して試掘調査（250㎡）を、平成元年5月8日～7月15日に文化財センター職員 椿真治が担当して試掘調査（20㎡）と馬屋長田遺跡（22㎡）・馬屋出水遺跡（220㎡）・馬屋森向遺跡（280㎡）の本発掘調査を実施した。
- 4 本書の作成は、令和2年度に文化財センター職員 亀山行雄が行った。
- 5 本書の本文は、昭和63年度に宇垣が作成した『県道岡山吉井線改良工事に伴う確認調査実績報告書』及び「山陽町馬屋地区確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19、平成元年度に椿が作成した『県道岡山吉井線改良工事に伴う発掘調査実績報告書』及び「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20の一部を転載したほか、これらを参照して亀山が執筆した。
- 6 本書の編集は亀山が行った。
- 7 本書の遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影にあたっては江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 8 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山県岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本書に用いた高度は海拔高である。
- 2 本書に用いた北方位は磁北である。
- 3 本書に収載した遺物図の縮尺は、土器・陶磁器・瓦を1/4、石製品を1/3、土製品・金属製品を1/2に統一している。
- 4 本書に収載した遺物図には、瓦にR、石製品にS、土製品にC、金属製品にMの記号を番号の前に付した。
- 5 遺物観察表に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。
- 6 本書に収載した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行1/25,000「金川」・「万富」・「岡山北部」・「備前瀬戸」を複製して使用した。



# 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 序 説	1
第1節 遺跡を取り巻く環境	1
第2節 調査の経緯と経過	4
第2章 調査の概要	7
第1節 試掘調査	7
第2節 馬屋長田遺跡の調査	22
第3節 馬屋出水遺跡の調査	24
第4節 馬屋森向遺跡の調査	29
第3章 総 括	43
第1節 調査の成果	43
第2節 岡山県の山陽道諸駅	45
遺物観察表	46
報告書抄録	50
図 版	

# 目 次

第1図	遺跡位置図 (1/1,500,000) ……	1	第18図	馬屋出水遺跡掘立柱建物1～3 (1/80)・溝 (1/40) ……	26
第2図	周辺遺跡分布図 (1/40,000) ……	2	第19図	馬屋出水遺跡出土遺物 (1/4) ……	27
第3図	調査位置図 (1/10,000) ……	4	第20図	馬屋森向遺跡調査区位置図 (1/1,000) ……	29
第4図	試掘調査トレンチ平・断面図1 (1/50) ……	8	第21図	馬屋森向遺跡調査区全体図 (1/200)・土層断面図 (1/80) ……	30
第5図	試掘調査トレンチ配置図 (1/2,000) ……	9・10	第22図	馬屋森向遺跡出土遺物1 (1/4) ……	31
第6図	試掘調査トレンチ平・断面図2 (1/50) ……	11	第23図	馬屋森向遺跡出土遺物2 (1/2・1/3・1/4) ……	32
第7図	試掘調査トレンチ平・断面図3 (1/50) ……	12	第24図	馬屋森向遺跡出土遺物3 (1/4) ……	33
第8図	試掘調査トレンチ平・断面図4 (1/50) ……	13	第25図	馬屋森向遺跡出土遺物4 (1/4) ……	34
第9図	試掘調査トレンチ平・断面図5 (1/50) ……	14	第26図	馬屋森向遺跡出土遺物5 (1/4) ……	35
第10図	試掘調査出土遺物1 (1/2・1/4) ……	16	第27図	馬屋森向遺跡出土遺物6 (1/4) ……	36
第11図	試掘調査出土遺物2 (1/4) ……	17	第28図	馬屋森向遺跡出土遺物7 (1/4) ……	37
第12図	試掘調査出土遺物3 (1/4) ……	18	第29図	馬屋森向遺跡出土遺物8 (1/4) ……	38
第13図	試掘調査出土遺物4 (1/4) ……	19	第30図	馬屋森向遺跡出土遺物9 (1/4) ……	39
第14図	馬屋長田遺跡調査区位置図 (1/1,000) ……	22	第31図	馬屋森向遺跡出土遺物10 (1/4) ……	40
第15図	馬屋長田遺跡調査区全体図 (1/100)・土層断面図 (1/50)・出土遺物 (1/4) ……	23	第32図	馬屋森向遺跡出土遺物11 (1/4) ……	41
第16図	馬屋出水遺跡調査区位置図 (1/1,000) ……	24	第33図	馬屋森向遺跡出土遺物12 (1/4) ……	42
第17図	馬屋出水遺跡調査区全体図 (1/200)・土層断面図 (1/80) ……	25	第34図	馬屋森向遺跡出土遺物13 (1/2) ……	42
			第35図	馬屋遺跡と馬屋長田遺跡の古道 (1/4,000) ……	43
			第36図	馬屋遺跡の建物群 (1/400) ……	44

# 図版目次

## 図版1

- 1 試掘トレンチ4 (西から)
- 2 試掘トレンチ5 (北から)
- 3 試掘トレンチ12 (北西から)
- 4 試掘トレンチ16 (北西から)
- 5 試掘トレンチ21 (西から)
- 6 試掘トレンチ26 (北西から)

## 図版2

- 1 馬屋長田遺跡溝2 (北から)
- 2 馬屋長田遺跡南壁土層断面 (北から)

## 図版3

- 1 馬屋出水遺跡遺構全景 (南西から)
- 2 馬屋森向遺跡下部礫層全景 (南西から)

## 図版4

- 1 馬屋森向遺跡基盤層全景 (南西から)
- 2 馬屋森向遺跡南西壁土層断面 (北東から)

## 図版5

- 1 試掘調査出土遺物

## 図版6

- 1 馬屋出水遺跡出土遺物
- 2 馬屋森向遺跡出土遺物1

## 図版7

- 1 馬屋森向遺跡出土遺物2

## 図版8

- 1 馬屋森向遺跡出土遺物3

# 第1章 序 説

## 第1節 遺跡を取り巻く環境

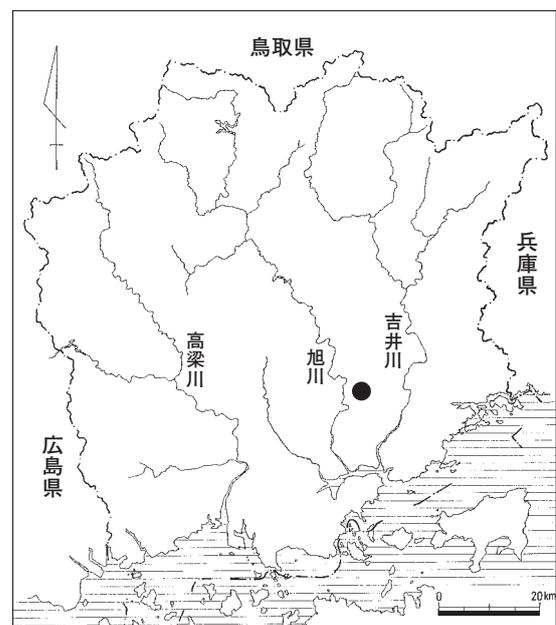
岡山県の南東部に位置する赤磐市は、平成17（2005）年に赤磐郡を構成する山陽町・熊山町・赤坂町・吉井町の4町が合併して誕生した。約42,000人の人口は県内自治体中第8位、209km<sup>2</sup>の面積は第13位を占める。赤磐市の南東部にあたる旧山陽町域には、東側に中生代に貫入した花崗岩、西側に古生代の砂岩・泥岩からなる標高200～300mの起伏の乏しい山地が分布する。その間を南流して児島湾にそそぐ砂川の流域には東西5kmにわたって礫がちの堆積物が広がり、東岸には日古木丘陵、西岸には東高月丘陵を形成する。こうした丘陵地ではモモやブドウなどの果樹が栽培されるほか、山陽団地やネオポリスなどの開発が行われ、岡山市近郊の住宅地として発展している。また、花崗岩山地から運ばれた土砂が堆積する沖積地には耕地が開かれ、東窪田～河本や穂崎では現在も条里地割が認められる。しかし、水持ちの悪い土壌のためか、山地や丘陵の谷部に数多くの溜池が築かれ、耕地の水源として利用されている。

ところで、瀬戸内海に面した備前南部地域では北東から南西に走る構造線谷が発達しており、古くから交通路として利用されてきた。北の竜王山山塊と南の東瀬戸山塊に挟まれ、砂川と旭川を結ぶような谷地形をなす今回の調査地もその一つと考えられる。

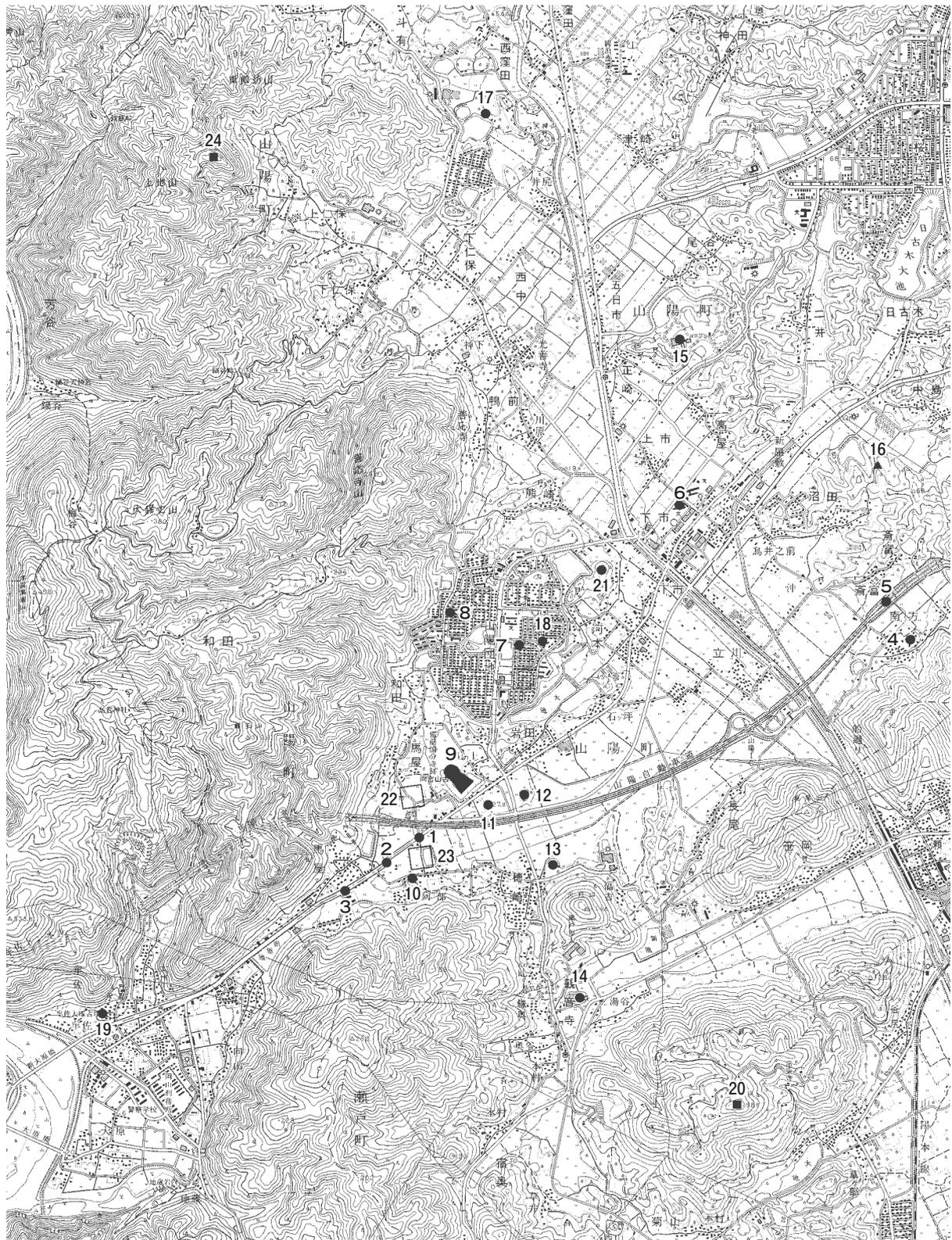
縄文時代の人びとの足跡は、備前国分寺跡から発掘された草創期の尖頭器のほか、正免遺跡（中期末）や斎富遺跡（後期前葉）の縄文土器など、山裾に発達した扇状地や沖積地で点々見つかっている。とりわけ斎富遺跡の南に接する南方前池遺跡では、堅果類を貯蔵した晩期後葉の土坑10基が発掘されて注目された。

弥生時代前期は、南方前池遺跡や山陽小学校遺跡で土器が出土しているものの、その様相は明らかでない。中期に入ると遺跡が増加し、丘陵部に集落や墳墓が営まれる。山陽団地の開発に伴って発掘調査が行われた用木山遺跡は、東高月丘陵の南東斜面を利用して営まれた中期中葉～後期初頭の集落で、多量の石製武器や分銅形土製品が出土したことで知られる。また、四辻遺跡で発見された中期後葉の区画墓は、集団墓から特定集団（首長）墓が析出されていく過程を示すものと評価されている。

古墳時代前期には、網浜茶臼山古墳や湊茶臼山古墳、金蔵山古墳といった大規模な前方後円墳が築かれた旭川下流域に比べ、砂川流域では用木3号墳（墳長30m）のように小規模な前方後円墳が見られるに



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

- |            |            |            |           |           |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1 馬屋長田遺跡   | 2 馬屋出水遺跡   | 3 馬屋森向遺跡   | 4 南方前池遺跡  | 5 斎富遺跡    |
| 6 山陽小学校遺跡  | 7 用木山遺跡    | 8 四辻遺跡     | 9 両宮山古墳   | 10 朱千駄古墳  |
| 11 森山古墳    | 12 廻り山古墳   | 13 小山古墳    | 14 玉井丸山古墳 | 15 正崎2号墳  |
| 16 別所窯跡    | 17 鳥取上高塚古墳 | 18 岩田14号墳  | 19 牟佐大塚古墳 | 20 大廻小廻山城 |
| 21 門前池東方遺跡 | 22 備前国分寺跡  | 23 備前国分尼寺跡 | 24 葛木城跡   |           |

すぎない。ところが中期後半になると、東高月丘陵の南西麓に二重周濠をめぐらす両宮山古墳（墳長206m）が築かれる。その規模は同時期に築かれた総社平野の宿寺山古墳（墳長108m）を凌駕し、中国・四国・九州では最も大きい。その後、首長墓の系譜は朱千駄古墳（墳長85m）、小山古墳（墳長58m）へと続き、後期前半の廻り山古墳（墳長47m）までたどることができる。このころの集落である斎富遺跡や門前池東方遺跡では、朝鮮半島系土器がまとまって出土しており、渡来系氏族との関わりが推定される。後期には砂川西岸に全長約15mの横穴式石室を持つ鳥取上高塚古墳（墳長65m）が築かれる一方、東高月丘陵にも複数の環頭大刀や優秀な馬具を出土した岩田14号墳（墳長20m）をはじめとする古墳群が形成される。さらに、旭川の河岸段丘上には全長18mの横穴式石室に浪形石の家形石棺を納める牟佐大塚古墳（墳長30m）が築かれる。また、日古木丘陵の南に位置する別所窯跡では後期前半に須恵器の生産が行われている。

令制下の赤坂郡に属するこの地域には、古代山陽道が東西に走り、両宮山古墳の西に備前国分寺・国分尼寺が建立された。地鎮遺構を伴う建物群が確認された馬屋遺跡は、その地名から高月駅家との関係が推定されている。また、門前池東方遺跡や斎富遺跡では、丹塗り土師器や緑釉陶器、陶硯などを伴う掘立柱建物群が検出されているものの、その性格は明らかでない。平安時代末に開かれた鳥取荘は、備前守護赤松氏や守護代浦上氏らに蚕食されながらも皇室領として永く維持された。ここでは開発領主を自称する葛木氏や山口を本拠とする松田氏庶流、西中を在所とする遠藤氏といった国衆の活躍が伝えられる。浦上氏の麾下から台頭した宇喜多氏は、金川城の松田氏や天神山城の浦上氏を追って備前の支配を固め、豊臣政権下では五大老の一人として重きをなした。慶長5（1600）年、関ヶ原合戦に敗れた宇喜多氏に代わって小早川氏が岡山城に入るもののわずか3年で断絶し、慶長8年に池田氏が封じられた。江戸時代の馬屋村は、享保6（1721）年の「備陽記」によると村高572石、家数66、人数442を数え、赤坂郡の本村94か村の中でも上位に位置する。

明治22（1889）年に馬屋、牟佐、和田、穂崎、岩田の5村が合併して西高月村となり、大正15（1925）年には高月村と改称する。そして、昭和28（1953）年に高陽、西山の2村と合併して山陽町となる。この地域では明治の終わり頃からモモの栽培が盛んとなり、昭和40年代にはブドウの温室栽培も行われるようになった。さらに、昭和44年に山陽団地、昭和46年に岡山東ネオポリスの開発がはじまり、平成5年には山陽自動車道の山陽インターチェンジが建設されるなど道路網も整備されて、平成17年の合併時点で県内町村の中で最多となる26,000人ももの人口を擁していた。現在では、市役所や中央図書館などが置かれ、赤磐市の中核としての役割を果たしている。（亀山）

#### 参考文献

- ・「土地分類基本調査」和気・播州赤穂 岡山県、1981
- ・「山陽町史」山陽町、1986
- ・「備前国分寺跡」『赤磐市文化財調査報告』第3集 赤磐市教育委員会、2009
- ・「岡山県中世城館跡総合調査報告書」第1冊 岡山県教育委員会、2020

## 第2節 調査の経緯と経過

### 1 調査の経緯と経過

県道岡山吉井線は、岡山市街地とその近郊住宅地の赤磐市を結ぶだけでなく、国道374号と接続して中国自動車道、さらには国道53号と接続して国道9号とを繋ぐ、岡山県東部の幹線道路である。この県道岡山吉井線について、近年の交通量増加に伴う渋滞緩和を図るために4車線化が計画されたことから、岡山県教育委員会では赤磐市馬屋の計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地を把握することを目的として事前に試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、昭和63（1988）年11月24日～12月27日にかけて、工事範囲のうち延長1,100mを対象に、32か所トレンチ41本を設定して掘り下げを行った。その結果、トレンチ6E（字長田）、トレンチ12・13（字出水）、トレンチ24W（字森向）の3か所において遺構が確認された。このため岡山県備前県民局から遺跡発見通知を提出し、これらについて本発掘調査を行うこととした。

本発掘調査は、平成元（1989）年5月8日～7月15日にかけて、長田・出水・森向の3地点を対象に実施した。また、前年度に試掘調査が実施できなかった湯田についてもトレンチ2本を設定して掘り下げを行った。調査の結果、長田では古道の側溝と思われる溝2条、出水では古代の掘立柱建物3棟と溝1条、森向では古代から近世にわたる整地層を確認した。しかし、湯田の試掘調査では遺構・遺物とも検出できなかった。



第3図 調査位置図 (1/10,000)

## 2 整理の経過

令和元（2019）年度から、長らく未刊行のままとなっている発掘調査報告書の作成を進めることとなり、昭和63年度・平成元年度に発掘調査を実施した馬屋遺跡群についても令和2年度に取り組んだ。出土遺物の整理作業は平成20年度に調査担当者が一部行っていたが、全体像を把握するために改めて全遺物の点検を行った。これにあわせて調査記録の整理を進めたが、30年もの年月は図面や写真の照合を困難にし作業は大いに難航したものの、10月末に概ね完了できた。（亀山）

## 3 調査と整理の体制

### 昭和63年度（試掘調査）

#### 岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

#### 岡山県教育庁

教育次長 石井 雄信・前 亮治

#### 文化課

課長 吉尾 啓介

課長代理 河野 衛

参事 浅野間朗雄

課長補佐（埋蔵文化財係長）

伊藤 晃

主査 藤川 洋二

文化財保護主事 宇垣 匡雅

#### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 水田 稔

#### 〈総務課〉

課長 佐々木 清

総務主幹 藤本 信康

主任 花本 静夫・岡田 祥司

片山 淳司

#### 〈調査第一課〉

課長 河本 清

課長補佐（第一係長）

井上 弘

文化財保護主幹 下澤 公明

文化財保護主任 江見 正己・内藤 善史

文化財保護主事 平井 泰男・島崎 東

宇垣 匡雅（調査担当）

### 平成元年度（試掘調査・本発掘調査）

#### 岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

#### 岡山県教育庁

教育次長 石井 雄信・竹本 博明

#### 文化課

課長 吉尾 啓介

課長代理 河野 衛

参事 浅野間朗雄

課長補佐（埋蔵文化財係長）

伊藤 晃

主査 藤川 洋二

文化財保護主事 宇垣 匡雅

#### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬日出明

次長（調査第一課長事務取扱）

河本 清

#### 〈総務課〉

課長 竹原 成信

課長補佐（総務係長）

藤本 信康

主任 岡田 祥司・平松 郁男

片山 淳司

#### 〈調査第一課〉

課長補佐（第一係長）

柳瀬 昭彦

文化財保護主査 平井 勝・藤田 耕平

文化財保護主任 内藤 善史

文化財保護主事 宇垣 匡雅

主事 椿 真治（調査担当）

### 令和2年度（報告書作成）

#### 岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

#### 岡山県教育庁

教育次長 高見 英樹

第1章 序 説

文化財課

課 長 小林 伸明

参事（文化財保存・活用担当）

大橋 雅也

総括参事（埋蔵文化財班長）

柴田 英樹

主 幹 河合 忍

主 事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 小見山 晃

次長（総務課長事務取扱）

佐々木雅之（～10月14日）

参事（文化財保護担当）

亀山 行雄（整理担当）

〈総務課〉

課 長 甲元 秀和（10月15日～）

総括副参事（総務班長）

甲元 秀和（～10月14日）

総括主任（総務班長）

多賀 克仁（10月15日～）

主 任 多賀 克仁（～10月14日）

井上 裕子

4 日誌抄

昭和63年

11月24日（木） 資材搬入、試掘調査開始

12月2日（金） トレンチ6Eで溝を検出

12月3日（土） T12で柱穴・土坑を検出

12月6日（火） T13で柱穴を検出

12月13日（火） T24・25で古代の瓦出土

12月27日（火） 資材撤収、調査完了

平成元年

5月8日（月） 森向遺跡の調査着手、調査開始

6月15日（木） 森向遺跡の調査終了

6月19日（月） 出水遺跡の調査着手

7月6日（木） 長田遺跡の調査着手

7月10日（月） 長田遺跡の調査終了

7月17日（月） 出水遺跡の調査終了、本発掘調査完了

令和2年

4月1日（水） 整理開始、遺物実測着手

5月8日（金） 遺物実測終了

6月8日（月） 遺構図面整理着手

6月26日（金） 遺構図面整理終了

6月29日（月） 遺構・遺物図トレース着手

7月13日（月） 遺物写真撮影着手

7月31日（金） 遺物写真撮影終了

8月31日（月） 遺構・遺物図トレース終了

9月1日（火） 原稿執筆着手

10月30日（金） 原稿執筆終了、整理終了

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

遺跡発見の通知（法第57条の6）

番号	文書番号 日付	遺跡の種類	所在地	発見 年月日	発見の 事情	発見者	出土遺物	処理の 内容・理由
1	教文理 第386号 H1.4.15	集落跡・官衙跡	赤磐郡山陽町 馬屋森向、出水、 長田	S63.11.24～ 12.27	試掘調査	岡山県知事	須恵器、土師器、瓦片	工実施前に 発掘調査を実施

埋蔵文化財発掘調査の通知（法第98条の2）

番号	文書番号 日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	目的	主体者	担当者	期 間
1	教文理 第763号 H1.5.2	集落跡・官衙跡 馬屋森向遺跡・馬屋出水遺跡・ 馬屋長田遺跡	赤磐郡山陽町 馬屋	1,600	県道改良 工事に伴う 発掘調査	岡山県教育委員会教育長	桑原真治	H1.5.8～7.10

埋蔵文化財発見の通知（法第100条の2）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理 第2800号 H1.8.4	瓦45箱、須恵器・土師器・中世 土器他4箱、古銭3点	赤磐郡山陽町 馬屋森向229-1他	S63.11.24～ H1.7.15	岡山県教育委員会教育長	岡山県知事	岡山県古代吉備 文化財センター

## 第2章 調査の概要

### 第1節 試掘調査

#### 概要（第5図）

県道馬屋瀬戸線の起点となる旧山陽町農業協同組合馬屋支所前の交差点から西側640m、東側460mの計1100mについて、現県道南側の拡幅用地（幅約10m）を対象に試掘調査を実施した。調査は34か所にトレンチ41本を設定して掘り下げを行い、土層の堆積状況や遺構・遺物の有無を確認した。

#### トレンチ1～5（第4・5図、図版1）

水田層下には中世末ないし近世の土層と考えられる褐灰色粘質土、黄灰色礫質土があり、地表下40cmで基盤層に達する。基盤層が大きく削平された後にそれらが堆積しているようであり、トレンチ4において基盤層上面で検出した不整形な浅い溝とトレンチ5で検出した江戸時代末の水田石垣以外に遺構は認められなかった。

#### トレンチ6E（第5・6図）

備前国分寺の中軸線を通して南に伸びる農道の西側に設定したトレンチである。地表下80cmで幅80cm、深さ20cmを測る溝を検出した。幅1mの狭いトレンチ内であるため確実ではないが、農道に平行して南北に伸びる可能性が強い。埋土中から須恵器片が出土しており、奈良時代の溝と考えられる。そうであるとすれば、この農道は国分寺と国分尼寺を結ぶ道が両寺の廃絶後も遺存したものであり、この溝はその側溝である可能性が考えられる。

#### トレンチ6W～9（第5・6図）

水田層、水田床土の下は灰色礫質土となり、トレンチ6Wで地表下60cm、トレンチ7で地表下75cmで基盤層（礫混じり黄色粘質土）となる。灰色礫質土中には奈良時代の瓦片が少量含まれている。トレンチ9では灰黒色粘質土中から須恵器、土師器の小破片が出土した。

#### トレンチ10E（第5・6図）

基本的な土層はトレンチ6W～9と同様であるが、灰色礫質土の下は砂質の礫層となる。湧水が著しいため表土下95cmで掘り下げを終了した。大きな谷がこの部分に位置していたと考えられ、その支流と見られる小さな谷もトレンチ11Eにおいて検出している。この谷は東流して国分寺と国分尼寺の間に流れ込み、その部分に低位部を作るようである。

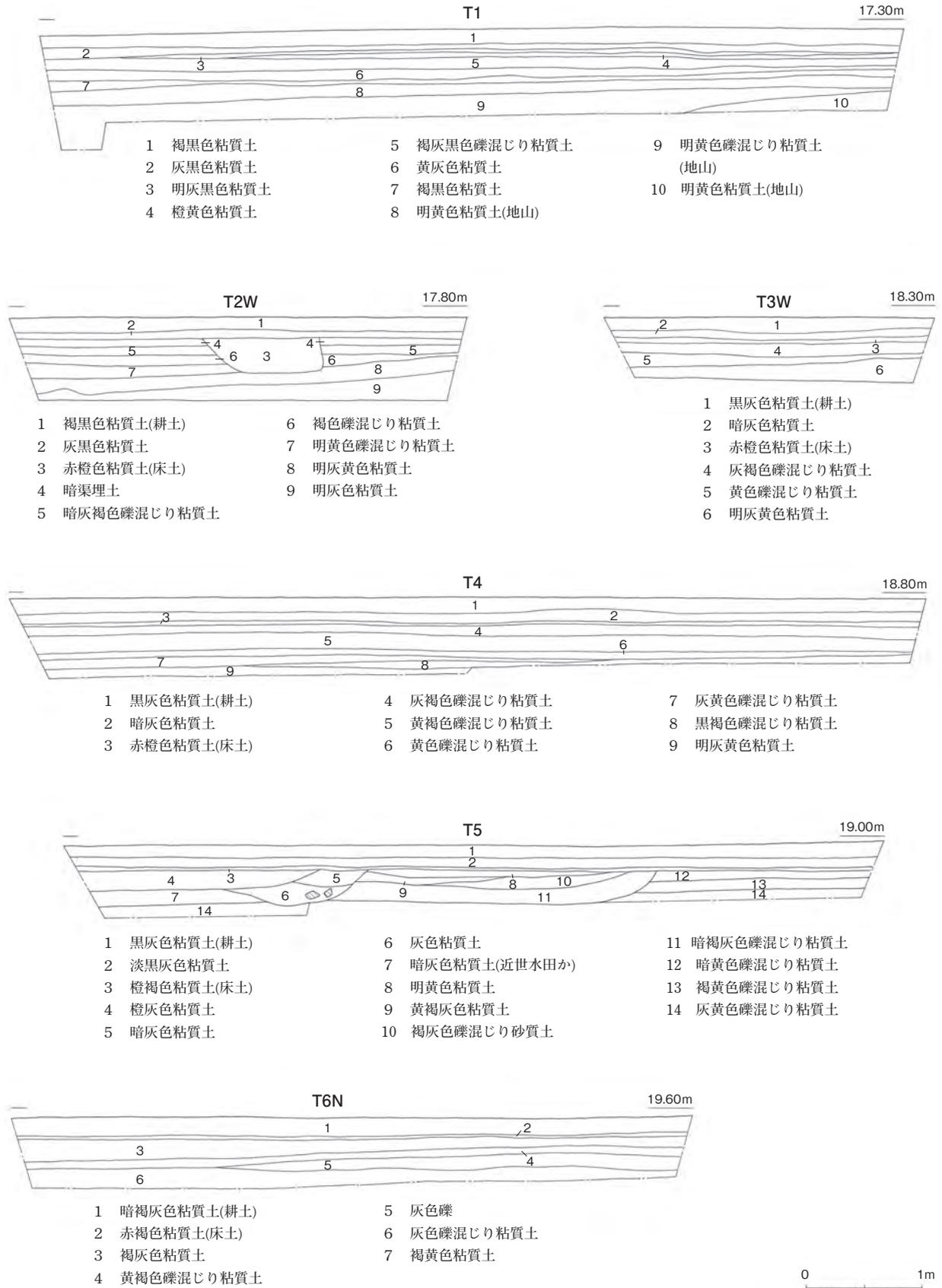
#### トレンチ10・11・14（第5～7図）

基本土層はトレンチ6W～9と同様である。基盤層面には遺構は認められない。

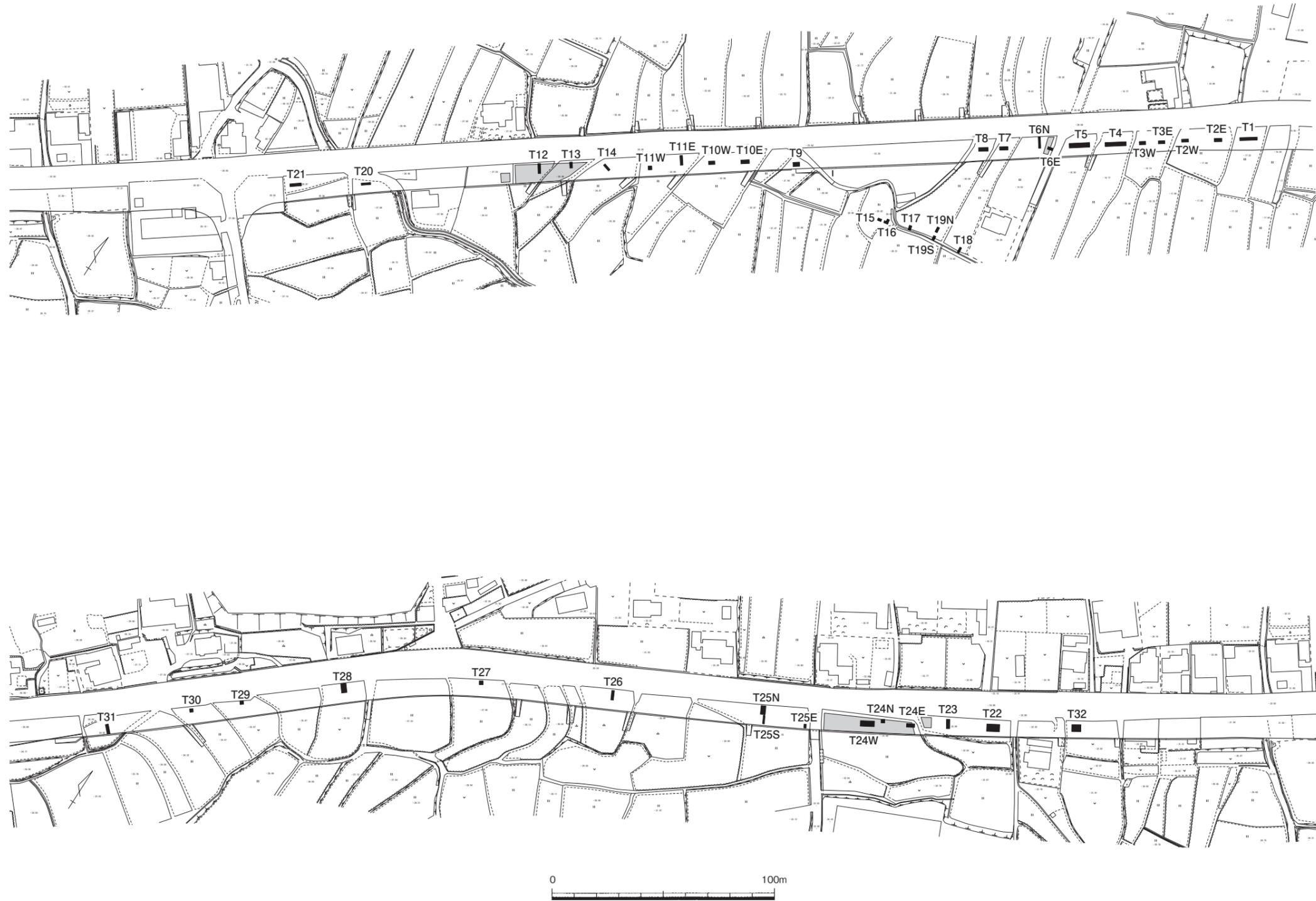
#### トレンチ12・13（第5・7図、図版1）

水田耕土・床土層下には厚さ20cmの灰色礫質土層（中世末ないし近世）があり、その下が基盤層となるが、トレンチ13では基盤層上に部分的に奈良時代包含層が認められる。両トレンチにおいて基盤層上面で柱穴、土坑ないし溝を検出した。いずれも奈良時代の須恵器、土師器片を含んでおり、その時期の遺構がこの部分に広がっていると判断できる。東側はトレンチ14で遺構が認められないことか

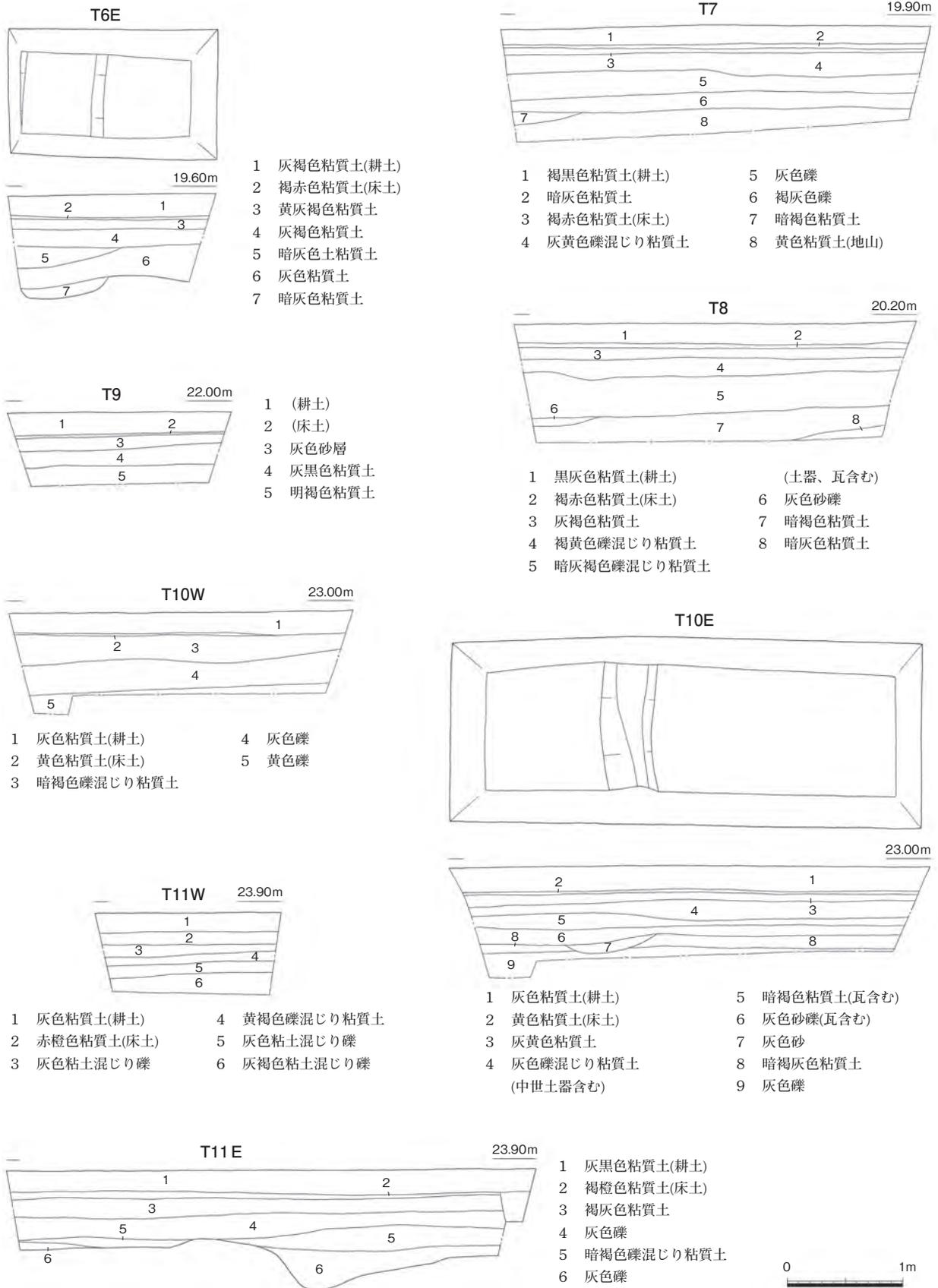
第2章 調査の概要



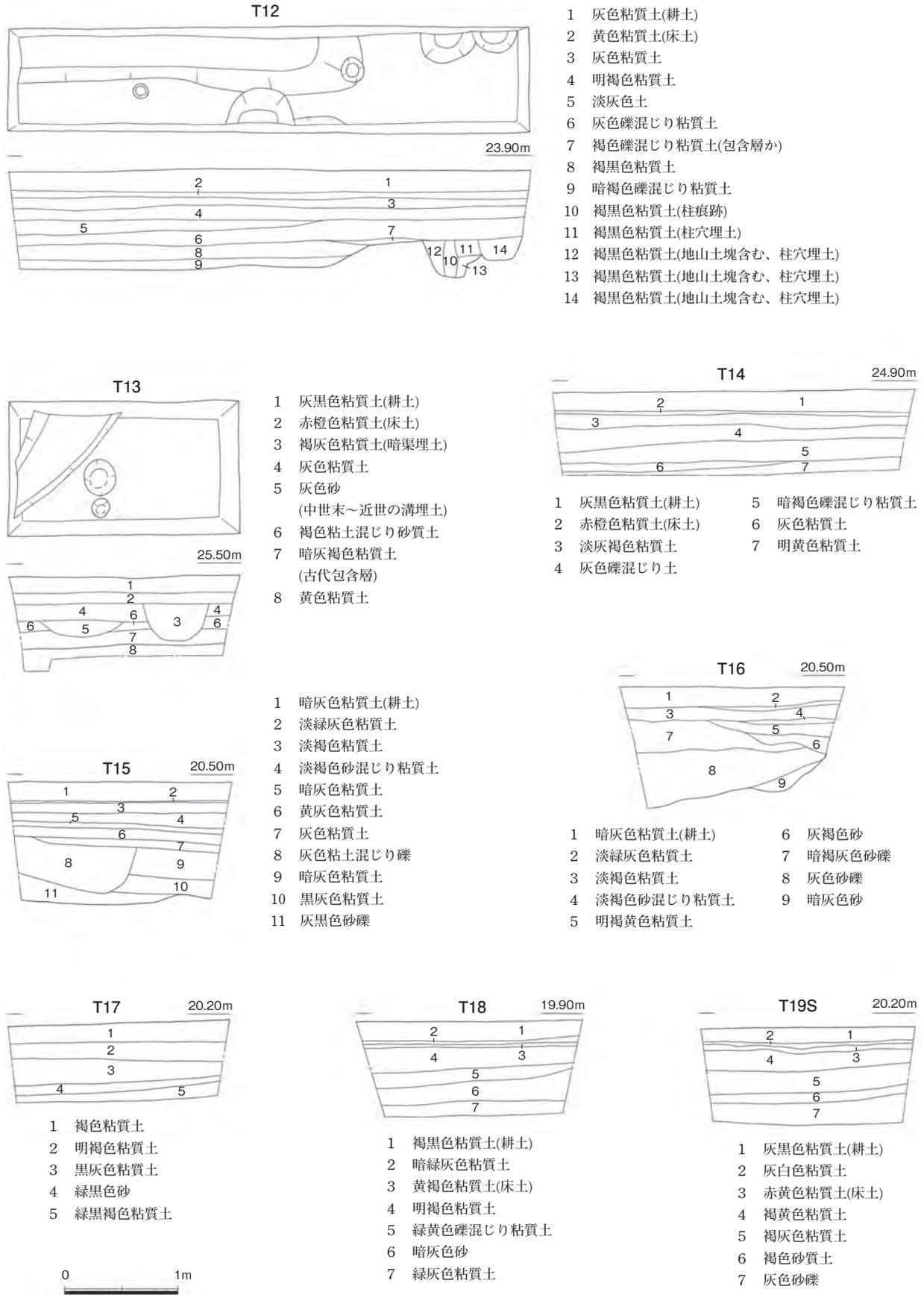
第4図 試掘調査トレンチ平・断面図1 (1/50)



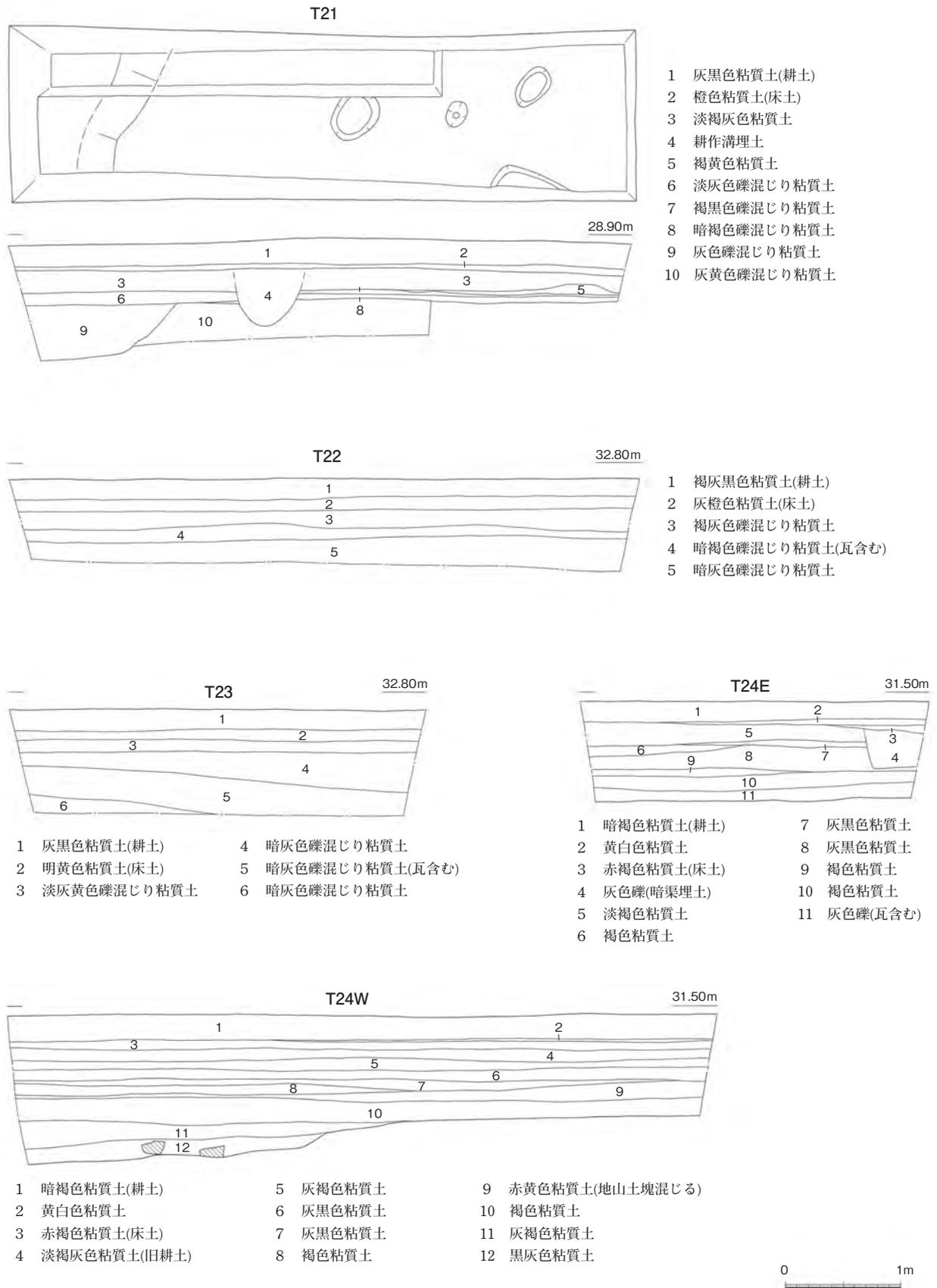
第5図 試掘調査トレンチ配置図 (1/2,000)



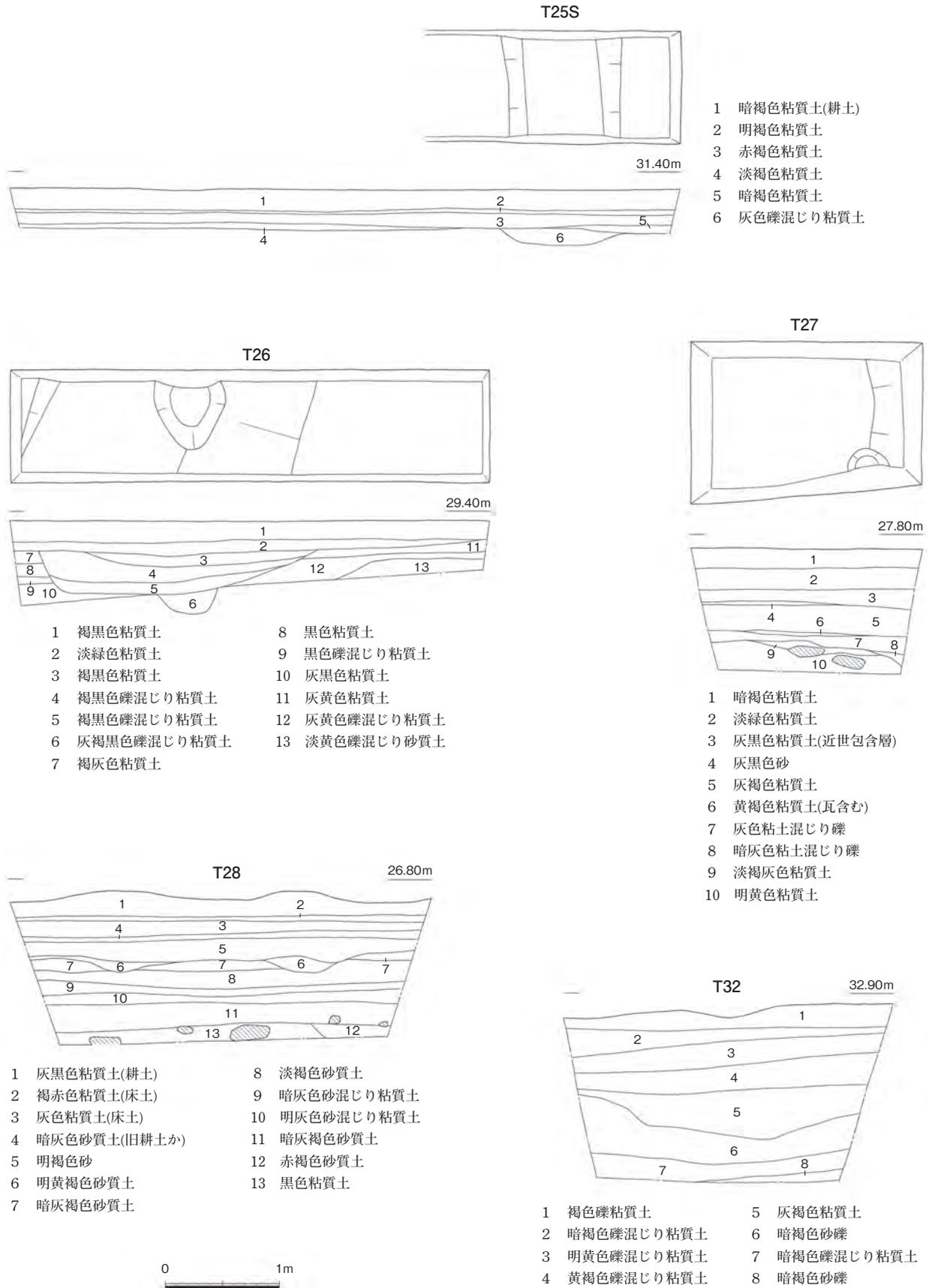
第6図 試掘調査トレンチ平・断面図2 (1/50)



第7図 試掘調査トレンチ平・断面図3 (1/50)



第8図 試掘調査トレンチ平・断面図4 (1/50)



第9図 試掘調査トレンチ平・断面図5 (1/50)

らみて、トレンチ13の所在する畑の東端付近までが範囲となると推定できる。西側は建物敷地として造成されていたためトレンチを入れておらず、西方の谷川までが範囲となるのかそれよりも東で収まるのか不明である。トレンチ12で検出した柱穴は円～不整円形をなし、大きいもので径約60cm、深さ20cmを測る。

#### トレンチ15～19（第5・7図、図版1）

県道工事に伴って農道および水路付け替え工事が実施されるため、その部分についても調査を実施した。この部分は備前国分尼寺推定寺域の北西部にあたり、これに関わる遺構の存在が予想された。

トレンチ16では急角度で下がる基盤層の裾部分に浅い溝があり、その先はさらに北へ向かって下がっていく状況が認められた。その西側のトレンチ15では地表下1mで平坦な基盤層面に達する。堆積土下部で中世末ごろと推定できる北東－南西方向の溝および杭列が認められた。トレンチ17～19Sにおいては地表下70～80cmで平坦な基盤層面に達するのに対し、トレンチ19Nでは地表下140cmでも基盤層が検出できず、谷川の堆積となる。また、トレンチ15、16を中心に多量の瓦片が出土した。

これらのことからトレンチ16で検出された基盤層の下がりや寺域北辺を区切る地形と考えられ、トレンチ15の南側付近が国分尼寺推定寺域の北西隅になると推定できる。

#### トレンチ20・21（第5・8図、図版1）

現在の谷川の西側部分に設定したトレンチである。トレンチ21の西半部は埋没した谷川となり、トレンチ20も基盤層は深く、遺構、遺物は認められない。

#### トレンチ22・23（第5・8図）

トレンチ22では基盤層が高く、地表下50cmで基盤層に達するが遺構、遺物は認められない。その西側のトレンチ23では地表下90cmと基盤層が深くなるが、やはり遺構は認められない。基盤層上には灰色礫層が堆積しているが、その中には奈良時代の瓦片が含まれている。

#### トレンチ24（第5・8図）

水田耕土・床土の下は深さ40cmまでが旧水田層、灰色礫質土であり、その下に大別して2層の包含層が認められる。地表下90cmで基盤層に達し、そこでは谷川（自然河道）が認められた。包含層のうち上層は明褐色粘質土で、土層自体は古い水田層と考えられるが奈良時代の瓦片、中世・近世土器など多量の遺物を含んでいる。下層は暗褐色の粘質土で、奈良時代の瓦片と中世の遺物を多量に含んでいる。両層とも形成の時期は奈良時代よりも新しいが、遺物の量は奈良時代のものが多く、それらは中世、近世に北側から谷地形部分に流入したものと考えられる。

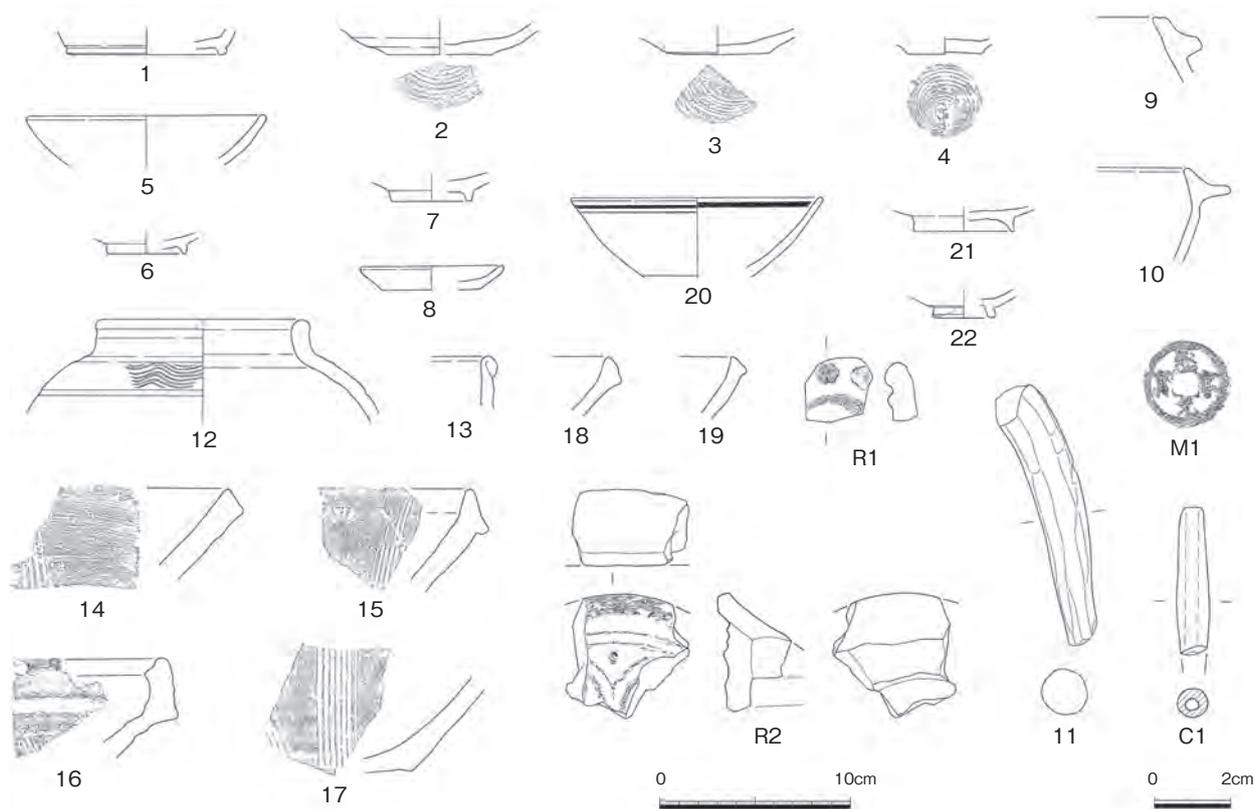
このトレンチを設定した水田の北側一帯は、水田よりも一段高く、広くゆるやかな斜面となっている。奈良時代瓦の本来の散布位置はこの部分であったと考えられ、現在の地名から判断して、「延喜式」兵部省に記載されている古代山陽道の備前国高月駅家がその部分に位置していた可能性が考えられる。

#### トレンチ25（第5・9図）

現在の水田面はトレンチ24の水田よりも若干低いが、基盤層は逆に高く、表土下35cmで基盤層となる。本来は舌状に北から張り出す丘陵の先端部であったものが削平されているようであり、遺構は認められない。堆積土中には瓦片を少量含んでいる。

#### トレンチ26～31（第5・9図、図版1）

いずれのトレンチも谷地形部分にあたり、トレンチによってはかなり深い堆積が認められる。トレ



第10図 試掘調査出土遺物 (1/2・1/4)

ンチ26は地表下から35～75cmで基盤層になるが、それより西で徐々に深くなり、トレンチ28では地表下140cmで基盤層となる。堆積層のかなり下の方まで備前焼片や奈良時代の瓦片が入っており、水田化されたのはかなり新しい時期であったと考えられる。

トレンチ32 (第5・9図)

幅3m、長さ4mの比較的広いトレンチであるが、トレンチ全体が幅の広い谷川の埋積部の中に入っている。确实ではないが東側に流れる谷のようである。地表下160cmまで掘り下げたが基盤層に達しなかった。 (宇垣)

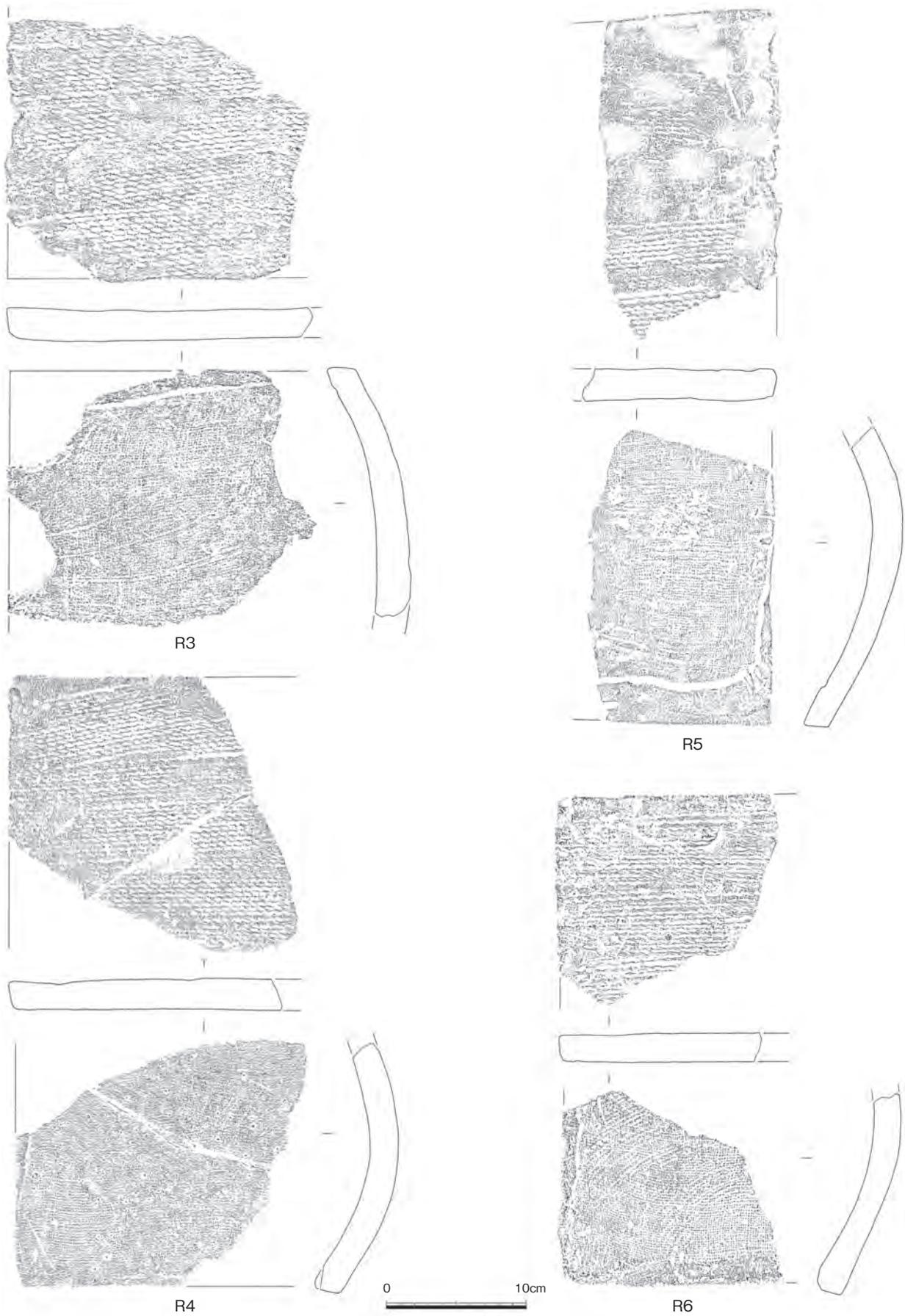
トレンチ33・34 (第5図)

山陽町農業協同組合馬屋支所の跡地に4×4mのトレンチ32、2×2mのトレンチ33を設定して重機により掘り下げ、遺構の有無を確認した。その結果、旧耕作土の下は褐色系の粘土層と礫層が交互に堆積しており、近世～近代の落ち込みと考えられるもの以外は検出できなかった。 (椿)

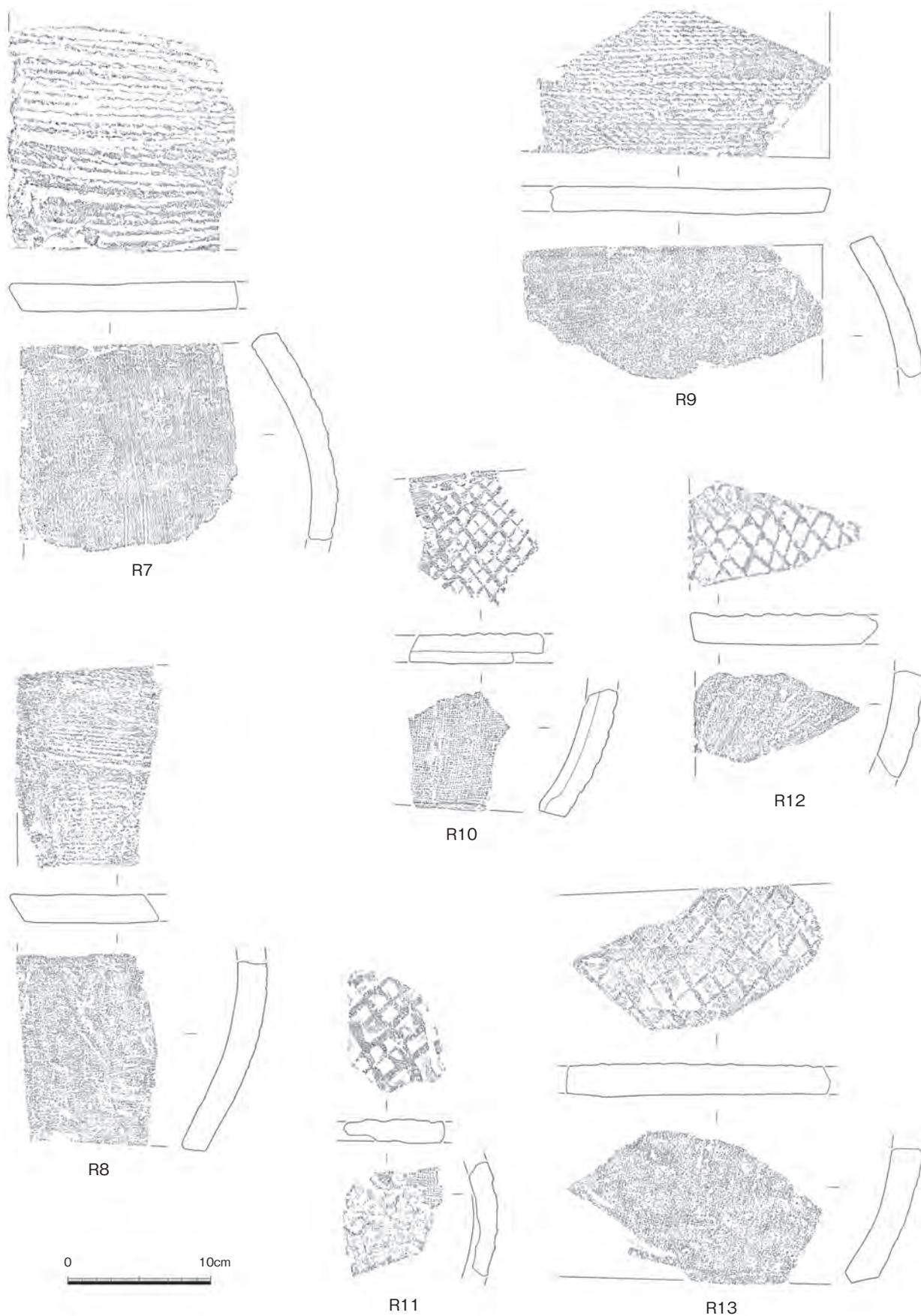
出土遺物 (第10～13図、表2、図版5)

試掘調査の出土遺物のうち、トレンチ6Eのものは馬屋長田遺跡、トレンチ12・13のものは馬屋出水遺跡、トレンチ24Wのものは馬屋森向遺跡で扱うこととし、ここではそれ以外のトレンチのものについて述べる。

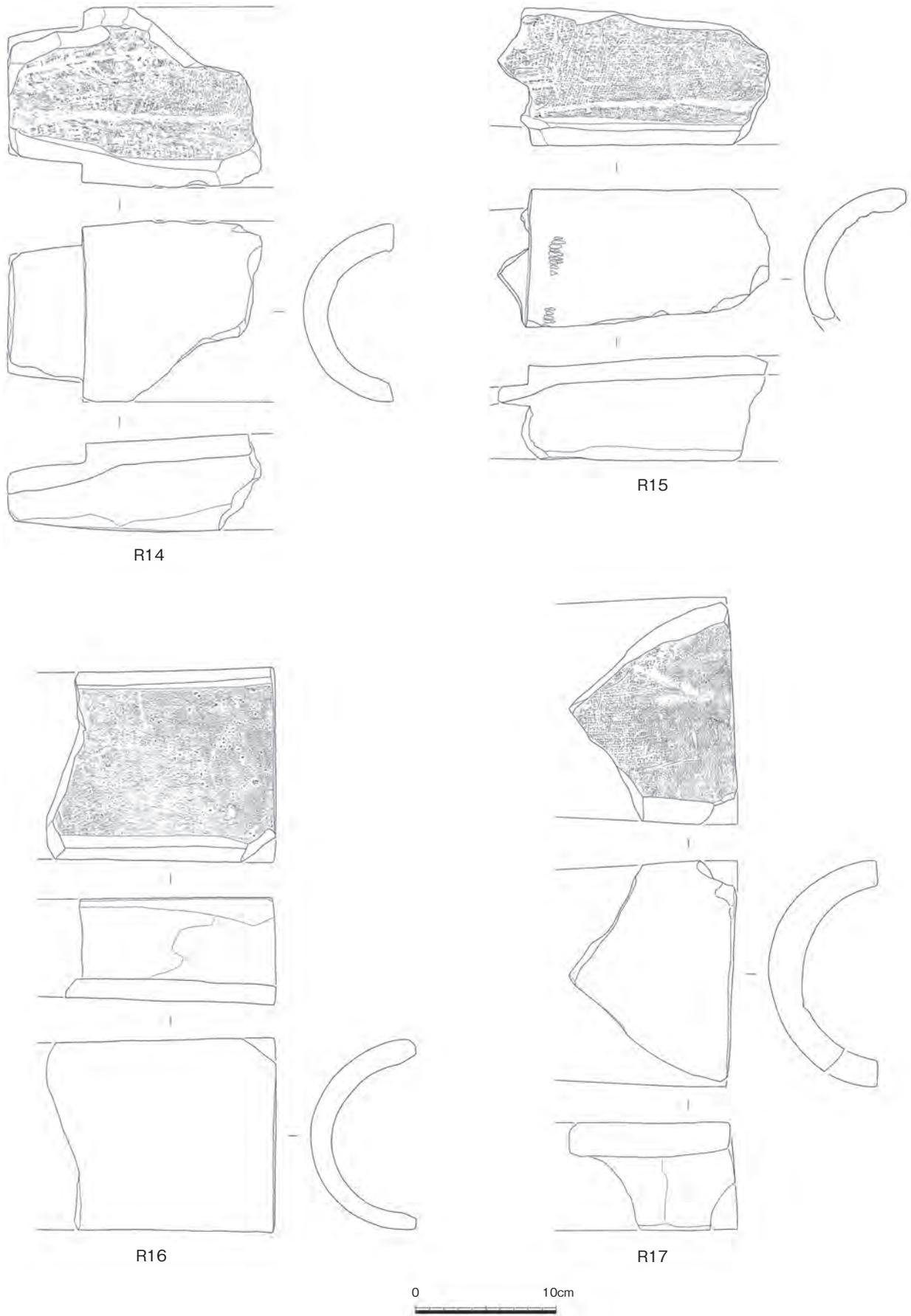
トレンチ1では床土から底部を糸切りする須恵質の小皿4が出土した。トレンチ3の遺物には、水田層から出土した底部をヘラ切りする土師器の小皿8、凸面に格子叩きを施す平瓦R10がある。底部に断面矩形の高台を貼り付ける須恵器の杯1、断面三角形の高台を持つ土師器の椀6、棒状に作られた瓦質鍋の脚11、須恵質に焼成された東播系陶器の鉢18、備前陶器の播鉢15・17、北宋銭の熙寧元宝M1はトレンチ4から出土した。トレンチ5では、銅緑釉を施した肥前内野山窯の陶器椀21、左巻き



第11図 試掘調査出土遺物2 (1/4)



第12図 試掘調査出土遺物3 (1/4)



第13図 試掘調査出土遺物4 (1/4)

第2章 調査の概要

の巴文を飾る軒丸瓦 R 1 が耕土層から出土した。トレンチ6では、底部に糸切りの痕を残す備前陶器の椀3、備前国分寺1式の軒丸瓦 R 2 が出土している。備前陶器の播鉢14はトレンチ10の黒色土層から出土した。トレンチ15～17・19から出土した瓦には、縄叩きを施した平瓦 R 3～9、格子叩きを施した平瓦 R 11・13、玉縁式の丸瓦 R 14・15・17がある。このうち R 5は凸面に凹みを残した粗雑な作りを示す。また、R 7の凹面には「二」をヘラ描きする。玉縁口縁を持つ備前陶器の壺13はトレンチ25から出土した。トレンチ27の遺物には、口縁部直下に鋸状の突帯をめぐらす瓦質の釜10、上方に拡張した口縁部を持つ備前陶器の播鉢16がある。 (亀山)

表2 試掘調査出土遺物一覧表

地区	トレンチ	層位	土師器			須恵器			中・近世土器						瓦		時期	重量(kg)										
			杯	壺	甕	蓋	杯	壺	甕	椀	皿	鉢	壺・瓶	甕	鍋・釜	丸				平								
長田	1	床土層																近世	0.02	0.03								
		黄色粘質土層	○																中世		0.01							
	2W	灰色粘質土層																	中世	0.02	0.22							
		黄色粘質土層	○			○										○			古代	0.04								
		—				○													中世	0.16								
	2N	灰色粘質土層				○													近世	0.06								
	3W	黄色粘質土層						○								○		○	中世	0.08	0.78							
		灰～黄色粘質土層																	中世	0.70								
	3E	—																○	中世	0.35								
	4	1・2層				○													近世	0.30	2.99							
		灰黄色粘質土層						○										○	○	中世		1.57						
		黄色粘質土層	○					○										○	○	中世		0.50						
		排土	○					○										○	○	中世		0.62						
	5	1～3層																		近世	0.40	1.58						
		石列																		近世	0.01							
		灰色粘質砂層																	○	○	近世		0.17					
		黄色粘質土層								○									○	○	中世		1.00					
	6N	耕土層																		中世	0.03	0.79						
		灰褐色砂層								○									○	○	中世		0.32					
		灰色砂礫層																		○	○		中世	0.27				
		排土																	○	○	中世		0.17					
	6E	灰色礫層	○																	古代	0.01	0.62						
		—	○																○	○	○		中世	0.61				
	7	5層	○							○										○	○	古代	0.99	2.01				
		灰色礫層																		○	○	古代	0.38					
		—	○																	○	○	古代	0.20					
		排土	○																	○	○	古代	0.44					
	8	—																	○	○	古代	0.65						
	18	耕土～褐色砂層																		○	○	近世	0.69	4.19				
		褐色砂層																		○	○	古代	3.50					
	19N	5層																		○	○	古代	1.92	2.02				
		12層上面																			○	○	古代		0.10			
	19S	7層								○										○	○	○	古代	2.05				
	17	暗灰色砂層	○																	○	○	中世	0.10	2.75				
		灰色礫層上面																			○	○	中世		0.23			
		黒灰色礫層																			○	○	古代		2.42			
	16	耕土層																					近世	0.01	15.04			
		灰色礫層																			○	○	古代	15.03				
	15	黄色粘質土層																					近世	0.01	7.09			
		灰褐色粘質土層																					中世	0.09				
灰色粘質土層																					○	○	中世	2.28				
黒灰色粘質土層																					○	○	古代	4.56				
	排土																					○	0.15					
9	黒色土層	○							○													古代	0.04					
10E	褐色礫層				○	○			○													早・陶	備前	○	○	近世	0.36	
11E	灰色礫層								○														備前	○	○	古代	1.10	1.11
	—	○																					陶器			近代	0.01	
11W	暗渠																						備前			中世	0.08	0.30
	褐色粘質土層																						陶器			近世	0.02	
	灰色礫層									○														○		古代	0.20	

第1節 試掘調査

地区	トレンチ	層位	土師器				須恵器			中・近世土器						瓦		時期	重量(kg)	
			杯	壺	甕	蓋	杯	壺	甕	碗	皿	鉢	壺・瓶	甕	鍋・釜	丸	平			
出水	14	褐色礫層			○				○	早島	備前		備前						近世	0.12
	13	—	○				○			早島					○			中世	0.07	
	12	灰色礫層			○				○	早・伊					備前			近世	0.43	
		溝上面	○		○		○								○			中世	0.07	
		溝	○		○			○										古代	0.11	
		ピット1			○			○										古代	0.03	
ピット2	○		○		○		○									古代	0.04			
—									○					○			中世	0.01		
湯田	20																			
	21	耕土層										備前	備前			○		近世	0.12	
	33																			
	34																			
柳本	32	耕土層								伊・瀬								近世	0.01	
	褐色礫質土層											備前						中世	0.01	
森向	22	—										備前		備前	○			中世	0.68	
	23	耕土・黄色粘質土層								伊万里						○		近世	0.18	
		褐色土層								伊万里							○	近世	0.54	
	24	耕土層								瀬戸		備前						近世	0.02	
		暗褐色粘質土層								早島	備前					○	○	中近世	4.63	
		暗灰色砂質土層								早島		備前	備前	備前	瓦質	○	○	中世	6.51	
		10層															○	○	古代	0.25
	排土								○							○	○		0.49	
	24W	耕土								伊万里									近世	0.04
		黄色粘質土層					○	○	陶器				備前		○	○		近世	0.92	
		暗灰色粘質土層										備前		瓦質	○	○		中世	4.03	
		灰黒色粘質土層	○						備前	備前		備前	○	○	○			中世	9.72	
		褐色粘質土層													○	○			2.08	
		褐色粘質土層							○						○	○		中世	0.34	
		褐色粘質土層	○		○			○	早島						○	○			16.22	
		黒灰色粘質土層															○	○	2.58	
		—	○				○									○	○		3.87	
		溝西							○								○	○	古代	0.32
	溝															○	○	古代	3.01	
	排土	○		○		○		伊万里		備前		備前	○	○	○			13.50		
	24E	灰黒色礫質土層											備前		○	○		中世	2.51	
		黒灰色粘質土層											備前		○	○		中世	0.34	
		暗褐色粘質土層													○	○		2.96		
		排土									備前				○	○		0.71		
25	耕土層							伊万里									近世	0.02		
	黄色粘質土層							陶器									近世	0.01		
	褐色粘質土層							青磁		備前					○	○	近世	0.14		
25E	灰色礫層							唐津						○	○		近世	0.73		
25S	耕土層							○	備前								近世	0.02		
	赤褐色粘質土層							伊万里									近世	0.02		
	灰黒色粘質土層								○					○	○		中世	0.15		
26	灰黒色砂層											備前	釜	○	○		中世	1.37		
	灰色礫層											備前			○		中世	0.35		
	大溝	○													○		古代	0.06		
	ピット							早島									中世	0.01		
	排土	○						○	○		備前	備前			○		0.38			
27	黒色砂層			○						備前		備前	瓦質		○		中世	0.35		
	褐色粘質土層					○	○	○						○			古代	0.35		
前原	耕土層							唐津		陶器							近世	0.03		
	明褐色砂層				○		○			備前					○	○	中世	0.26		
	暗灰色粘質土層							○				備前		○	○		中世	0.33		
	灰黒色粘質砂層							○						○	○		中世	0.10		
30	明褐色砂質土層	?											?	?			0.07			
31	黄色土層							伊万里									近世	0.01		
	—													?			0.01			

早島は中世土師器、備前は備前陶器、東播は東播陶器、唐津は肥前陶器、伊万里は肥前磁器、瀬戸は尾張磁器を表す。

## 第2節 馬屋長田遺跡の調査

### 概要 (第14図)

県道馬屋瀬戸線の起点となる交差点から東へ370mほど離れた位置にあたる。幅10~15mの短冊形をした水田が30~50cmの段差をもちながら東へ階段状に連なっており、調査地点の標高は19.5mを測る。備前国分寺跡から南に延びる農道が県道と交差する地点の南西側水田に設定した試掘調査のトレンチ6Eにおいて、厚さ約40cmの灰色粘質土~砂礫層の上下に重なる溝2条を検出したことから、この箇所には長さ9m、幅2.5mの調査区を設定し掘り下げを行った。2条の溝は農道に沿うように南北に延びており、出土遺物から上層の溝1は鎌倉時代、下層の溝2は奈良時代にさかのぼるものと思われる。

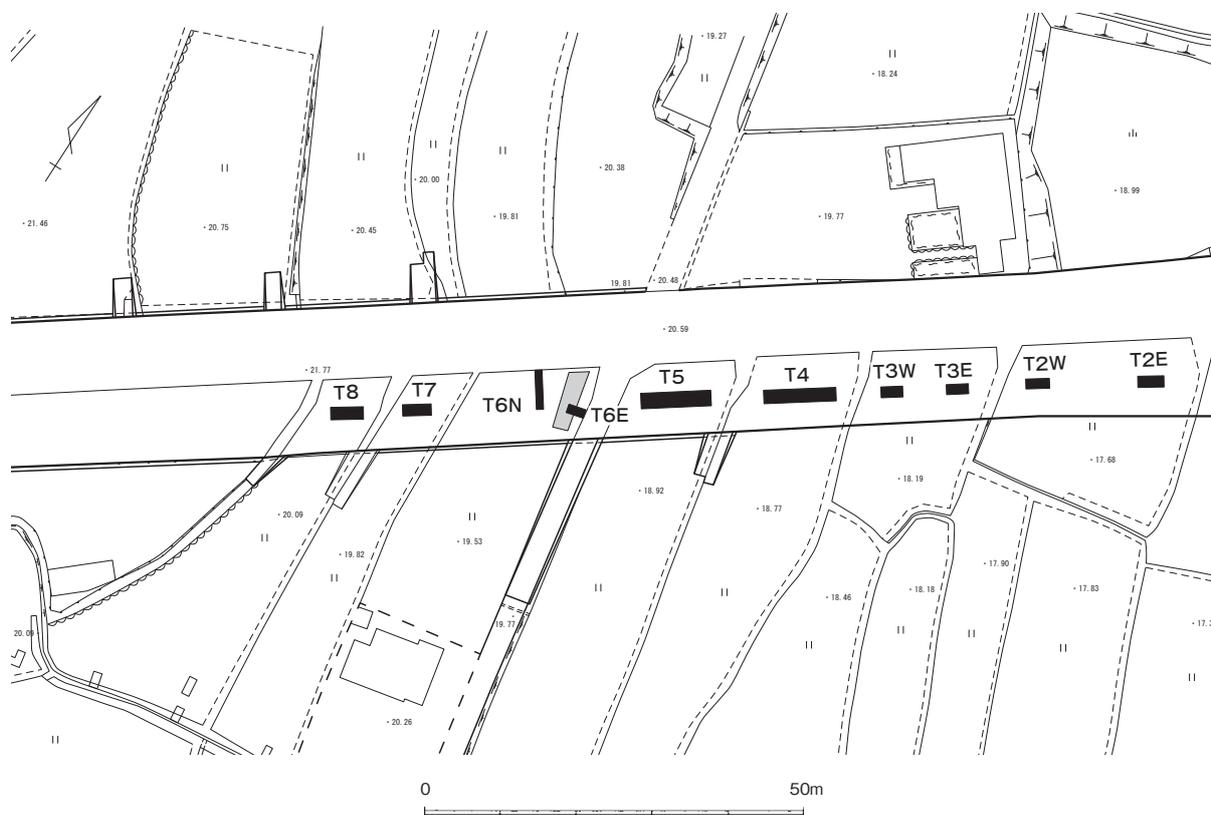
### 溝1・2 (第15図、図版2)

溝1は灰色粘質土~砂礫層の上面から掘りこまれた南北に延びる溝で、幅105cm、深さ12cmを測る。埋土から土師器の杯・甕、備前陶器の甕、凸面に縄叩きを施した平瓦R20、丸瓦が出土した。

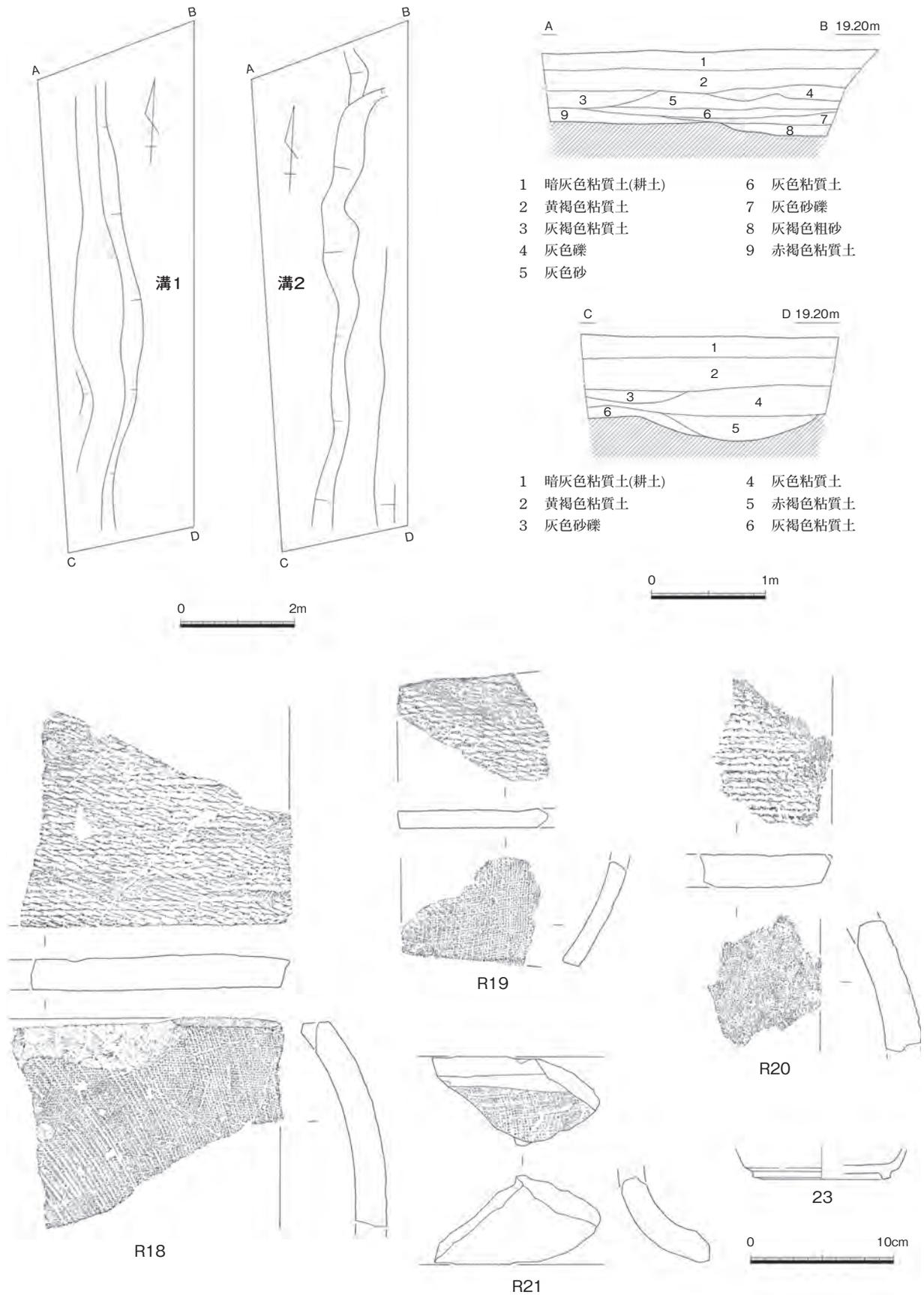
溝2は標高18.6mの基盤層上面で検出した。N-0.5°-Eに延びる溝で、幅150cm、深さ23cmを測る。出土遺物は少なく、底部に矩形の高台を貼り付けた須恵器の杯23のみである。

### 遺構に伴わない遺物 (第15図)

耕土層から須恵器の甕と縄叩きを施した平瓦、丸瓦が出土した。また、溝1を覆う灰色粘質土層(A-B断面第4~6層、C-D断面第4層)から、須恵器の杯・甕、土師器の杯、縄叩きの平瓦R18・19、格子叩きの平瓦、丸瓦R21が出土している。(亀山)



第14図 馬屋長田遺跡調査区位置図 (1/1,000)



第15図 馬屋長田遺跡調査区全体図 (1/100)・土層断面図 (1/50)・出土遺物 (1/4)

### 第3節 馬屋出水遺跡の調査

#### 概要 (第16図)

県道馬屋瀬戸線が分岐する交差点から東へ150mの位置にあり、馬屋長田遺跡とは約210m東に離れている。東に向かって約1mほどの段差をもちながら階段状に下る不整形な水田の標高は26.6～25.4mで、馬屋長田遺跡より1mほど高位にある。

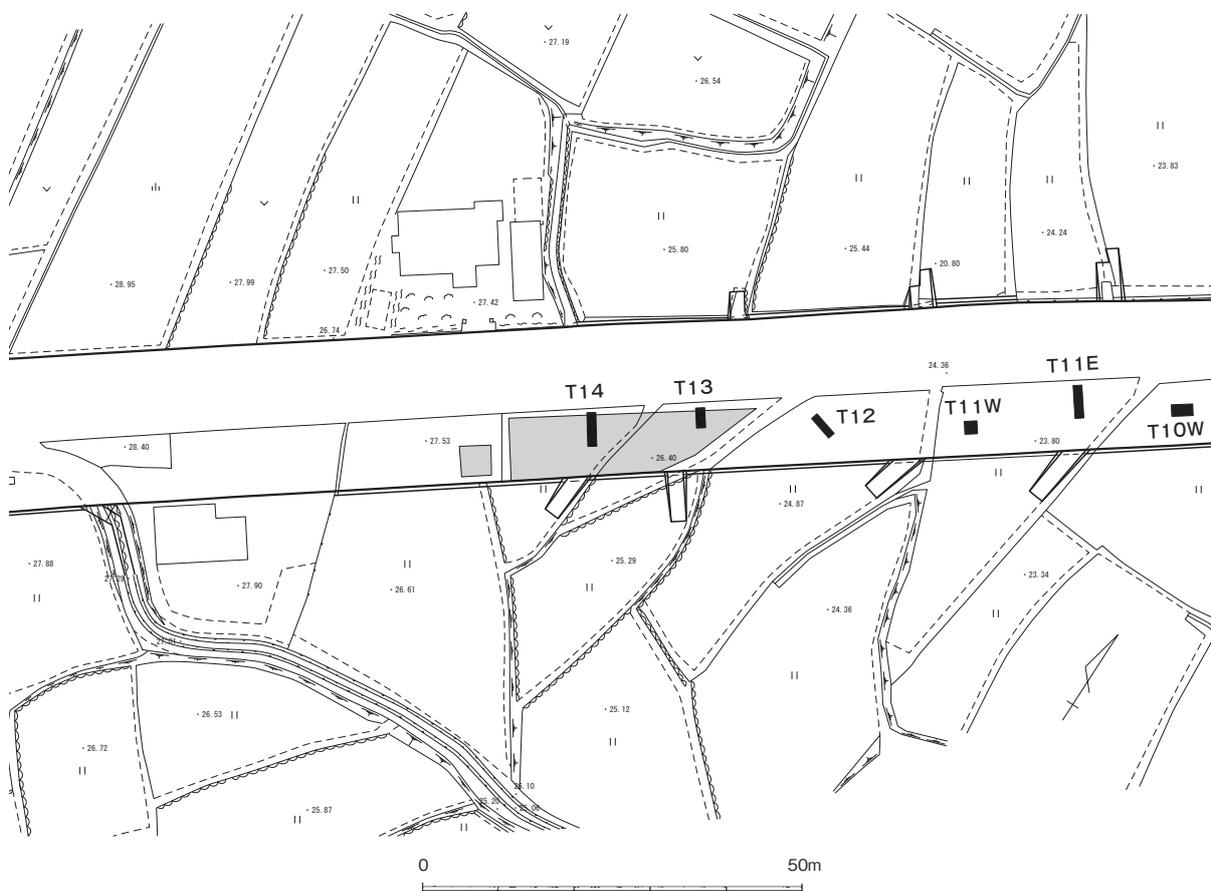
試掘調査のトレンチ12・13において柱穴や溝を検出したことから、両トレンチを繋ぐように設定した32m×9mの調査区(東区)と西側の宅地跡に設定した4×3.5mの調査区(西区)について発掘調査を実施した。

東区では、第7層まで重機により除去した後、人力で掘り下げを行った。基盤層の上面で検出した遺構には掘立柱建物3棟、溝1条のほか多数の柱穴がある。建物としてまとまらない柱穴の径は20cmと小さく、埋土に土師器碗を含むものがあることから鎌倉時代まで下るものと思われる。これらの遺構は基盤の高い北側に集中しており、それより20～30cmほど低くなる南側の遺構は保存不良であった。

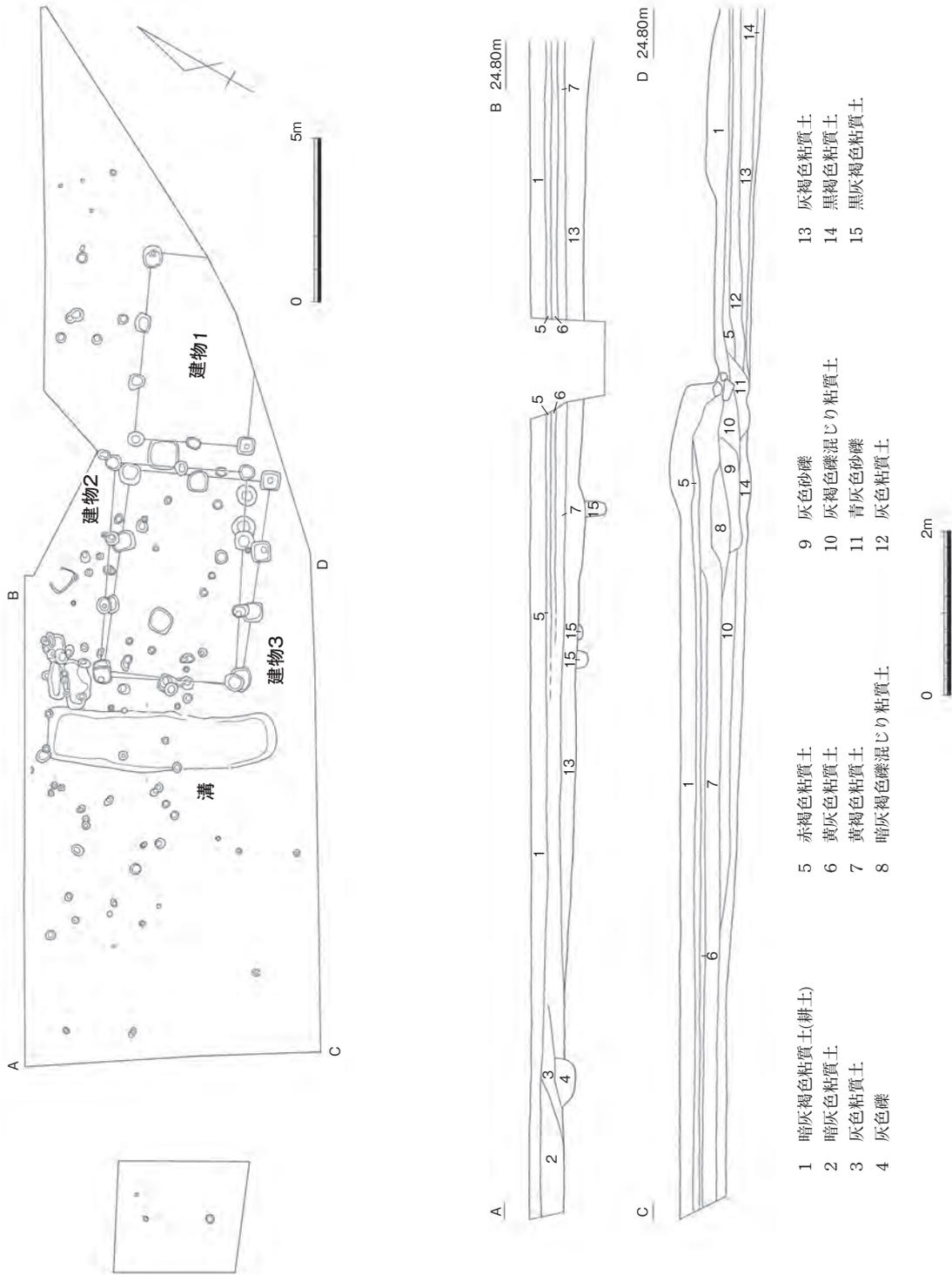
西区についても重機により第7層まで除去して調査を行った。ここでも基盤層の上面で柱穴状のピット3本を検出したが、いずれも深さは5cm前後と浅く、大幅な削平を受けたものと思われる。

#### 掘立柱建物1 (第17・18図)

調査区の南東端にかかって検出した側柱建物で、北西辺3間、南西辺2間を確認したにすぎない。



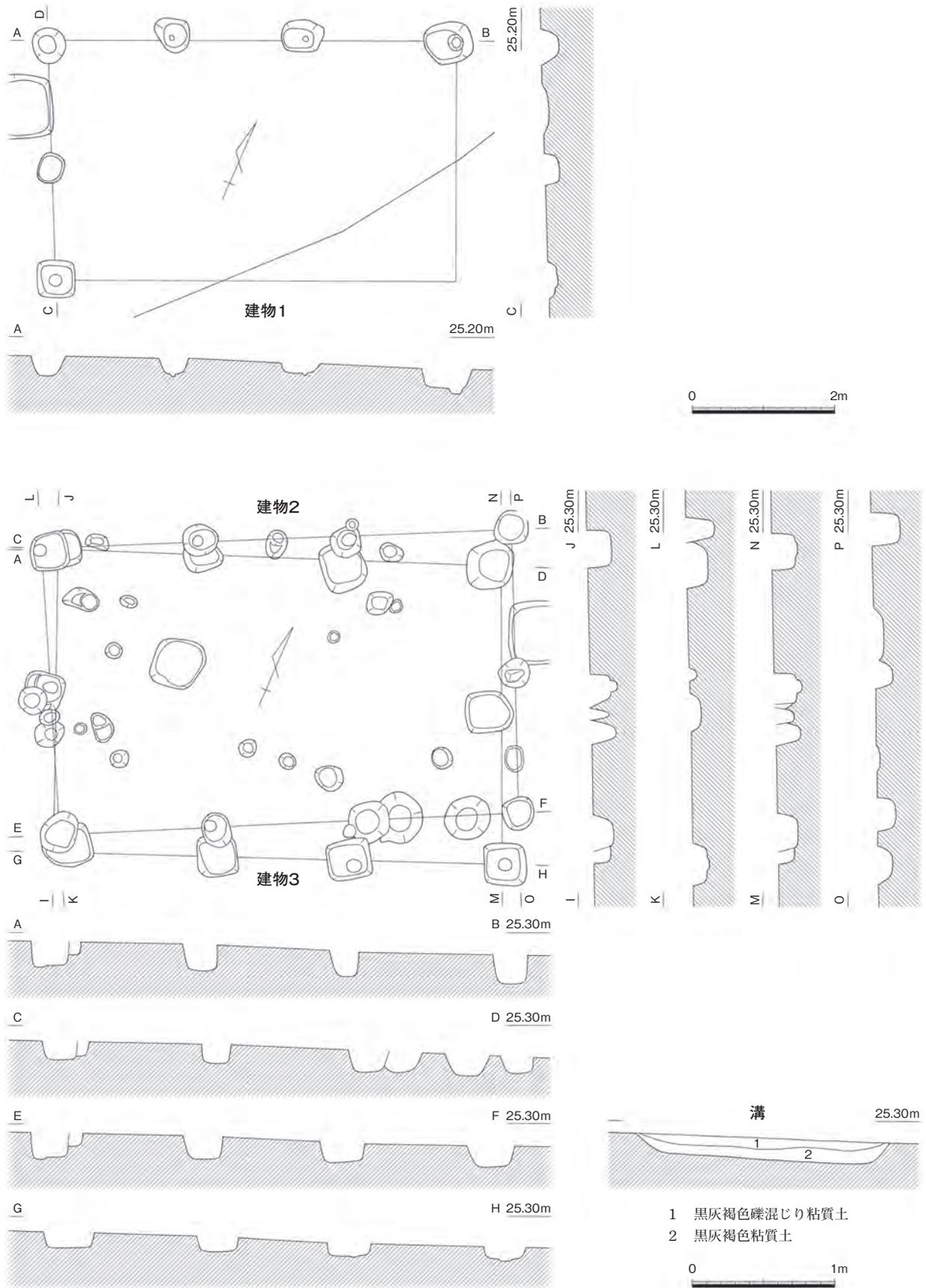
第16図 馬屋出水遺跡調査区位置図 (1/1,000)



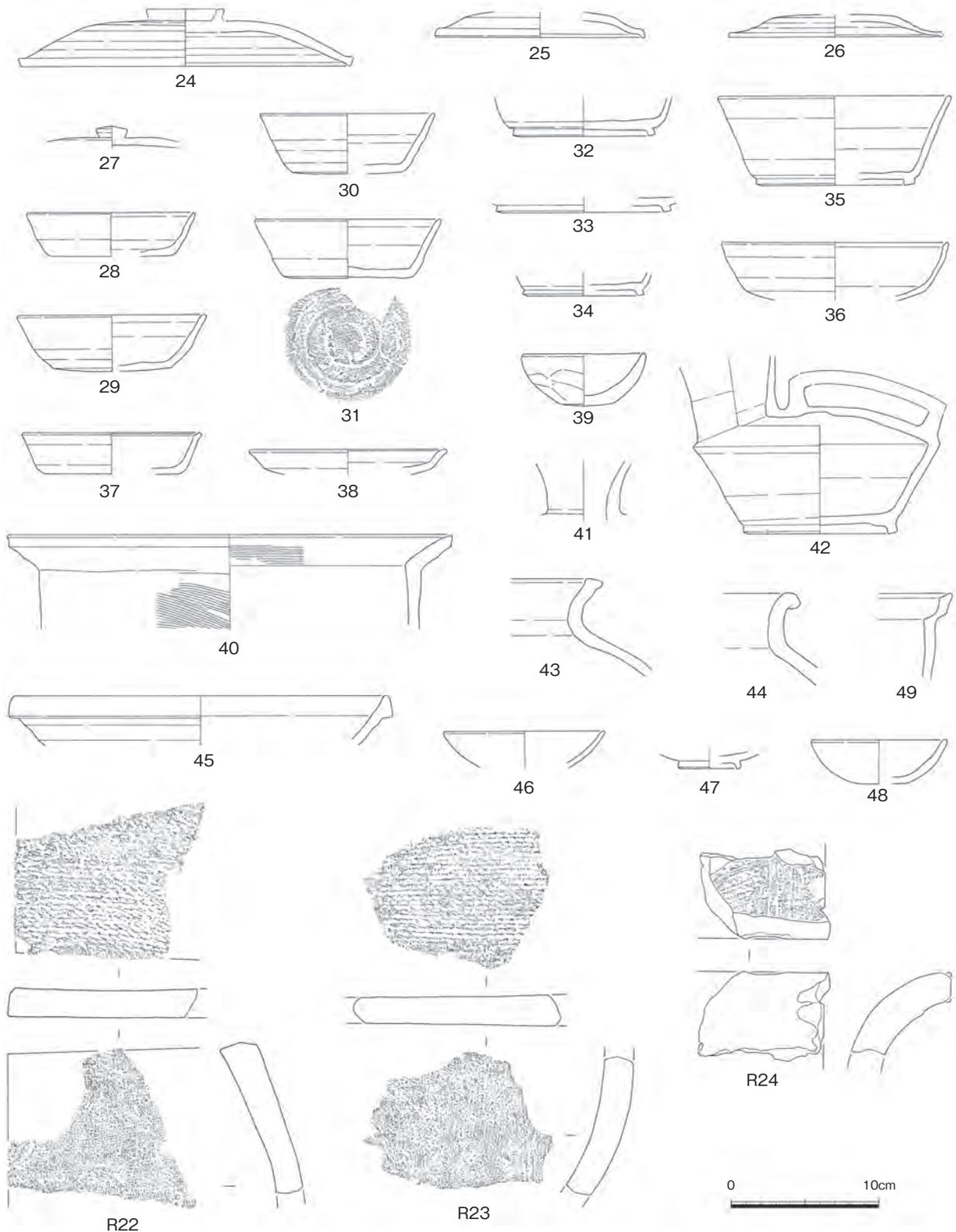
第17図 馬屋出水遺跡調査区全体図 (1/200)・土層断面図 (1/80)

しかし、その棟方向はN-67°-Wと掘立柱建物2に近似するうえ、長径44~67cm、深さ13~28cmを測る不整円形の柱穴も似かよっていることから、南東に位置をずらして建替えた可能性が考えられる。3×2間とした場合の規模は桁行574cm、梁間342cmを測り、床面積は19.6㎡になる。柱間距離は桁行が173~213cm、梁間が159~183cmを測り、一部で径18~23cmの柱痕跡が認められる。

第2章 調査の概要



第18図 馬屋出水遺跡掘立柱建物1～3 (1/80)・溝 (1/40)



第19図 馬屋出水遺跡出土遺物 (1/4)

掘立柱建物2 (第17・18図、図版3)

掘立柱建物1の南西0.7mで検出した桁行3間、梁間2間の側柱建物で、掘立柱建物3と重複する。桁行646~654cm、梁間402~408cm、床面積26.3㎡を測り、平面はN-66°-Eに棟方向を置く長方形をなす。柱間距離は、桁行で213~217cm、梁間で197~209cmを測る。長径44~56cm、深さ25~41cmを

測る柱穴は不整円形を呈し、径15～20cmの柱痕跡が認められる。掘立柱建物3の柱穴を壊して掘りこまれていることから、その建替えと考えられる。

### 掘立柱建物3 (第17・18図)

掘立柱建物2と重複して検出した桁行3間、梁間2間の側柱建物で、桁行624～632cm、梁行422～430cmを測り、床面積は26.7㎡ある。平面はN-64°-Eに棟方向を置く長方形をなすが、桁と梁の柱筋はわずかに斜交する。柱間距離は、桁行で192～231cm、梁間で197～209cmを測る。柱穴は一辺52～69cmの隅丸方形を呈し、深さは18～35cmと掘立柱建物2より浅い。

### 溝 (第17・18図、図版3)

掘立柱建物2・3の南西1mで検出した溝で、長さ691cm、幅182cmの長方形を呈し、深さは15cmを測る。ほぼ直線をなす東辺は掘立柱建物2・3の西辺と平行し、同時に存在した可能性が高い。埋土から須恵器の蓋25・27、杯30～32、平瓶41のほか、土師器の杯・甕、凸面に縄叩きを施した平瓦片などが出土しており、8世紀後半に属するものと思われる。

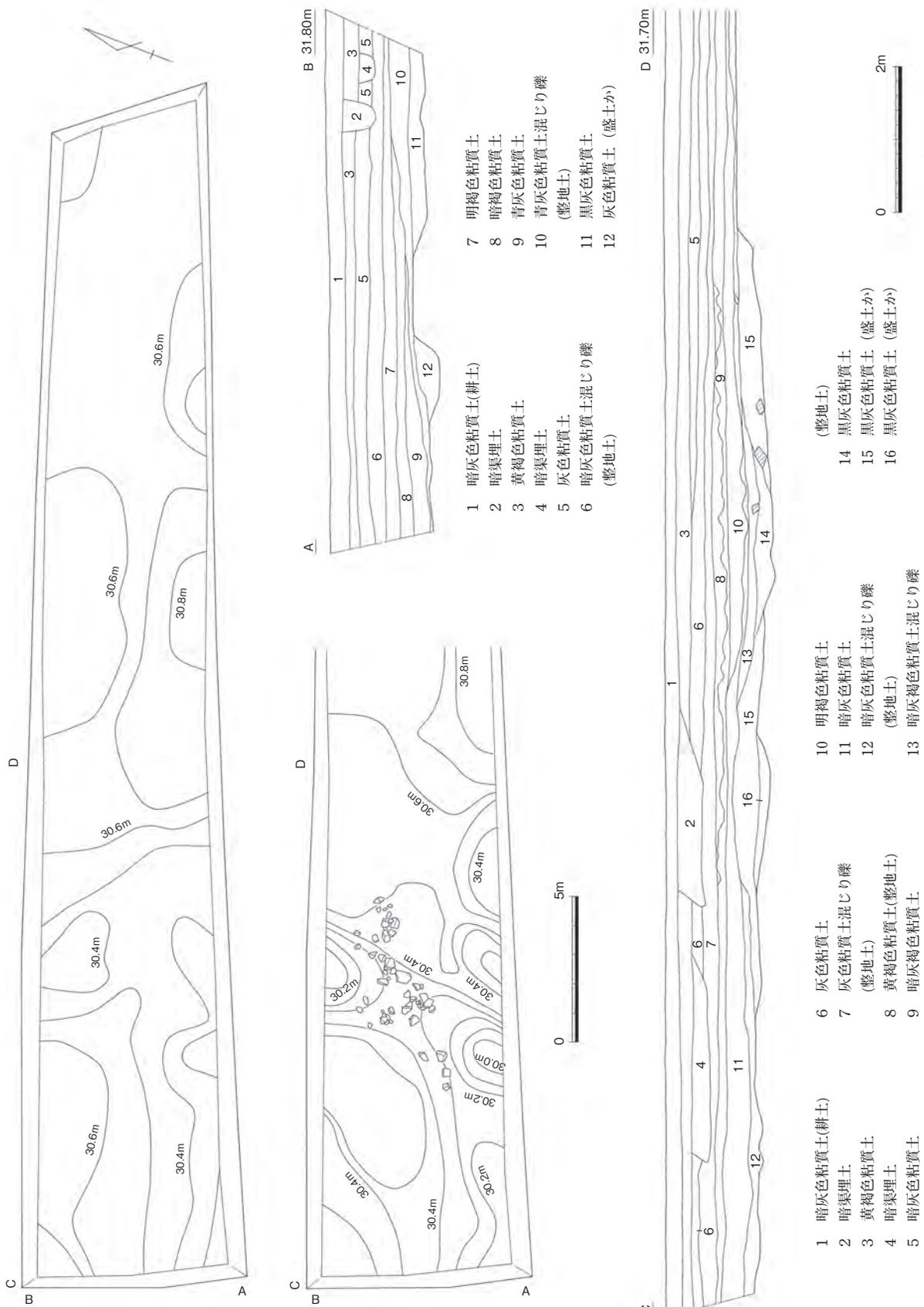
### その他の遺物 (第19図、図版6)

柱穴や基盤層上に堆積する暗褐色～黒褐色粘質土層から出土した遺物は、古代と中世に大別される。

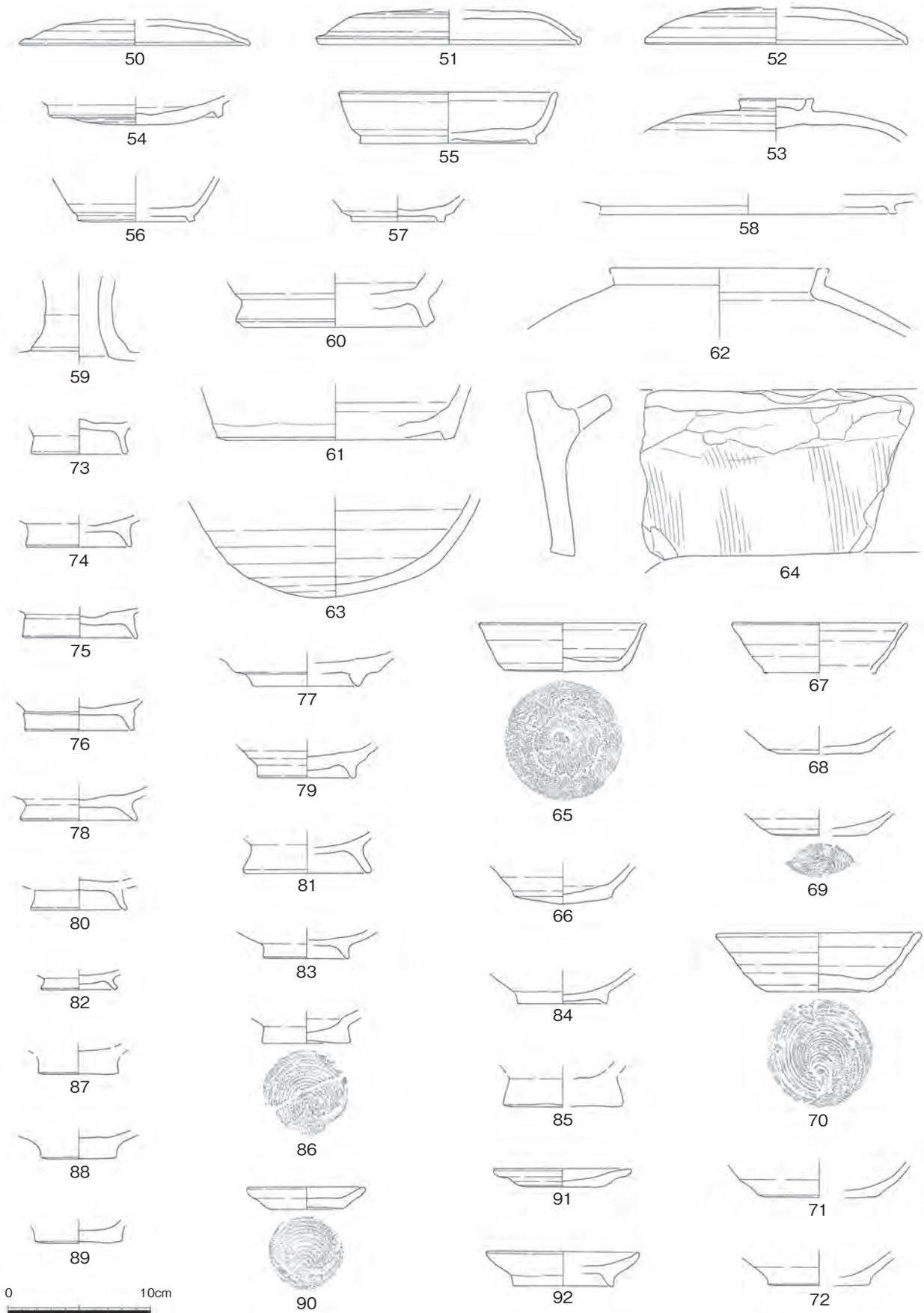
古代の遺物には、須恵器の蓋24・26、杯28・29・33～35、平瓶42、甕43、土師器の杯36・37、皿38、甕40、平瓦R22・23、丸瓦R24などがあり、8世紀後半～9世紀初頭に位置づけられる。中世の遺物には、土師器の椀46～48、東播系陶器の鉢45、瓦質土器の鍋49などがあり、14世紀前半に比定される。

(亀山)

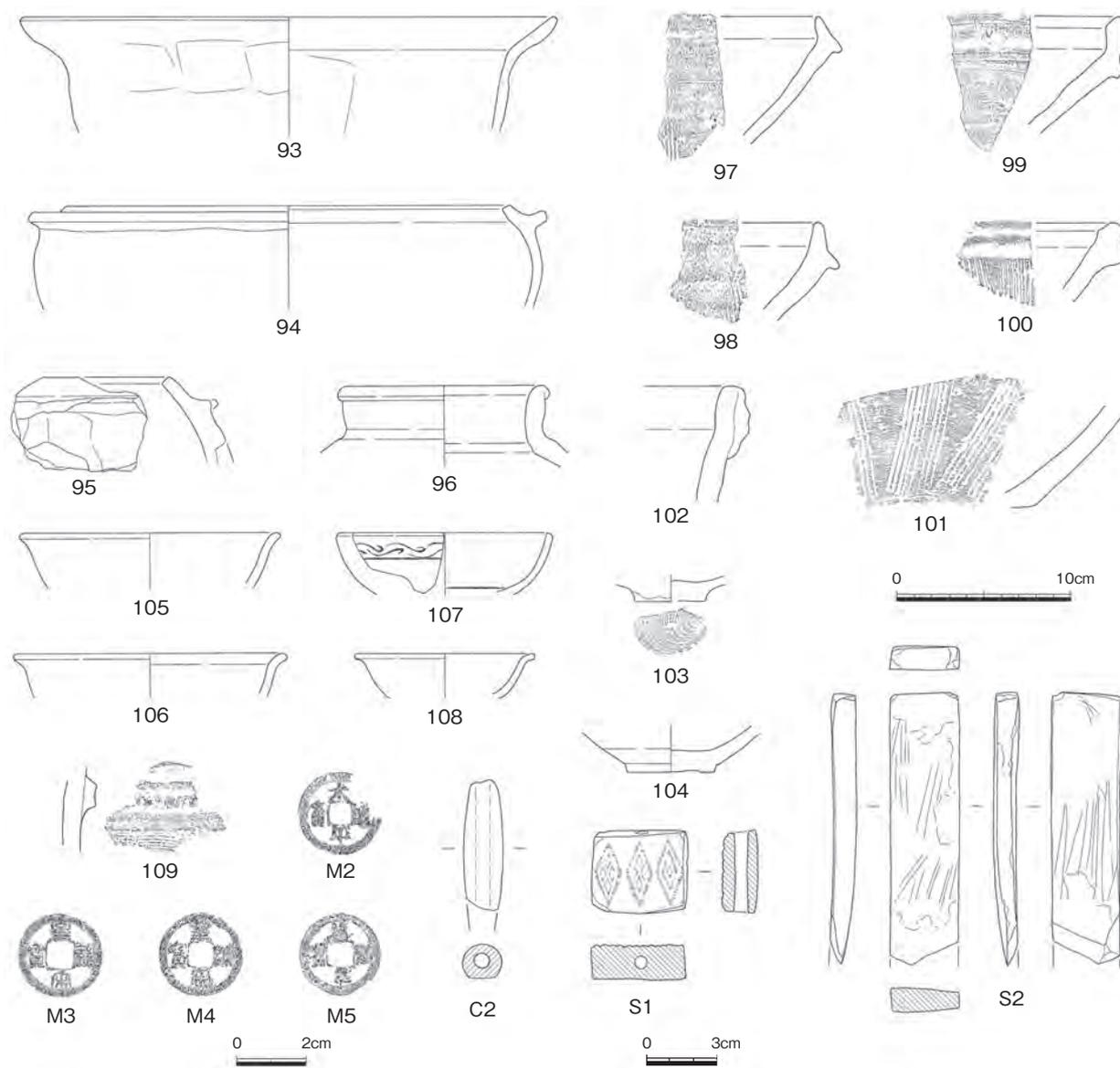




第21図 馬屋森向遺跡調査区全体図 (1/200)・土層断面図 (1/80)



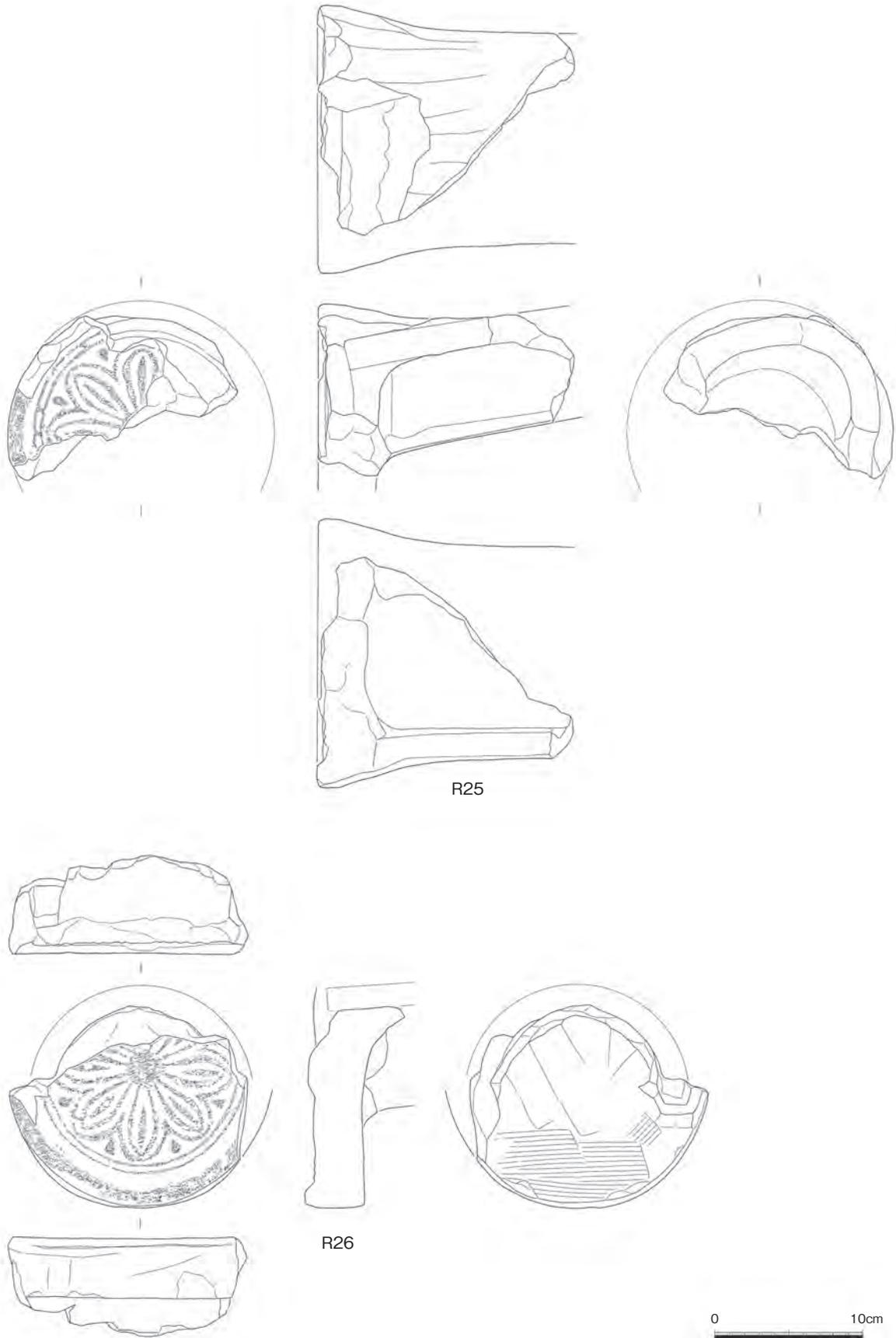
第22図 馬屋森向遺跡出土遺物 1 (1/4)



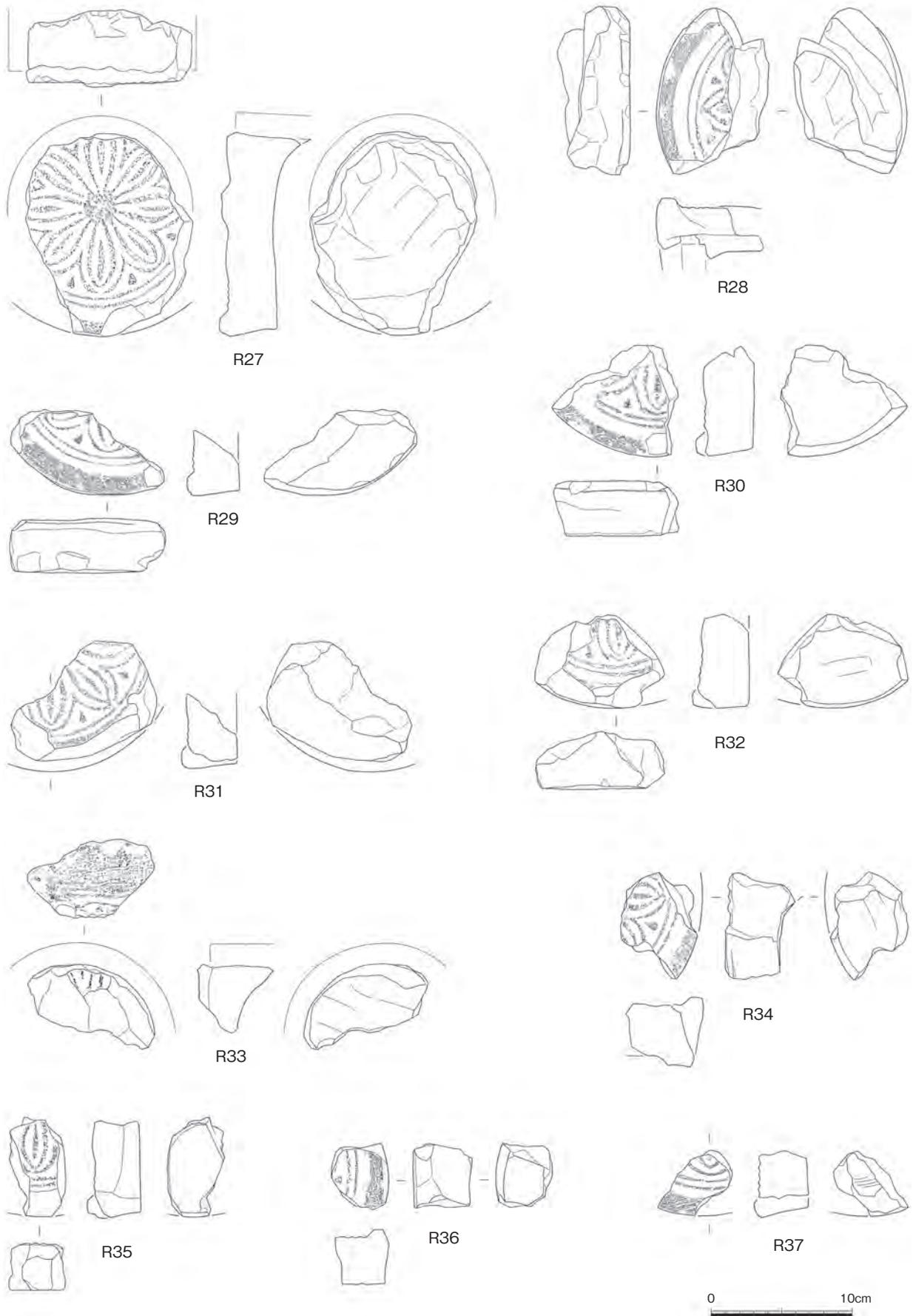
第23図 馬屋森向遺跡出土遺物2 (1/2・1/3・1/4)

瀬戸美濃陶器が含まれる点を考慮すると、この整地は江戸時代以降に行われた可能性が高い。下部の礫層（A-B断面第10層、C-D断面第11層）は基盤層を覆うように施されており、上面の標高は30.8mを測る。その厚さは流路を埋めた南西側で42cmと厚く、平坦な基盤が続く北東側では6cmと薄い。この層から出土した遺物には、須恵器52・53・55、土師器65・79・83、備前陶器98のほか多量の瓦がある。これらの遺物から、下部の整地は室町時代以降になされたものと思われる。

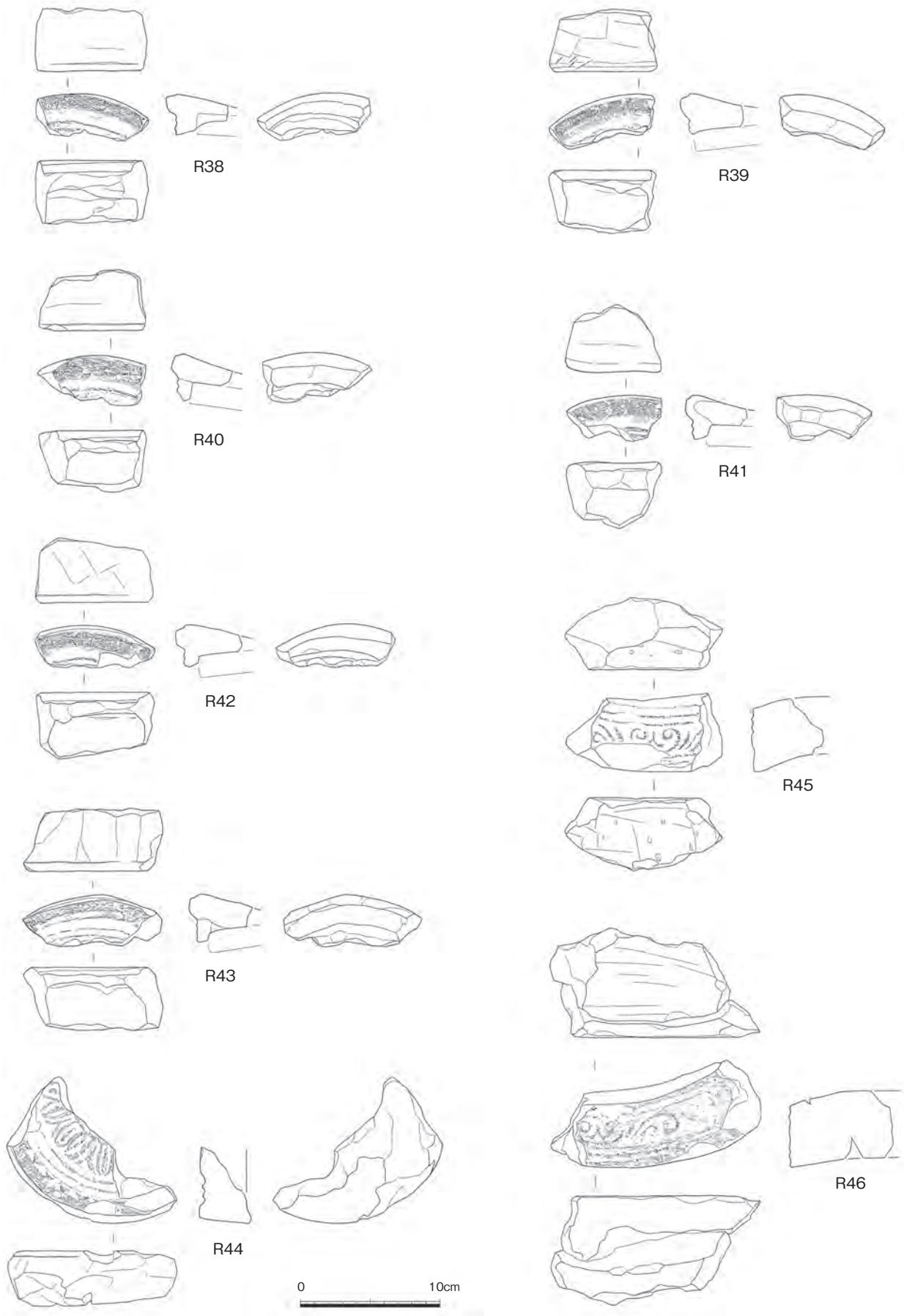
標高30.8mを測る基盤層面では、北から南へ走る幅90cm、深さ50cmの自然流路が南西側で検出された。流路内には黒灰色をなす粘質土が堆積していたが、一部に基盤層由来の粘質土塊を含む層が認められ、その状況から流路を埋める整地層と判断された。また、長さ10～30cmの角礫が流路を横断するように検出されており、これも流路を埋める際に施したものと考えられる。しかし、整地層の範囲は必ずしも明らかではなく、道路の可能性が指摘された幅2.5～3mの帯状をなす基盤層の高まりも、流路を越えた東側では不明瞭となっている。なお、整地層と考えられる粘質土層には遺物が含まれておらず、古代以前に遡る可能性がある。



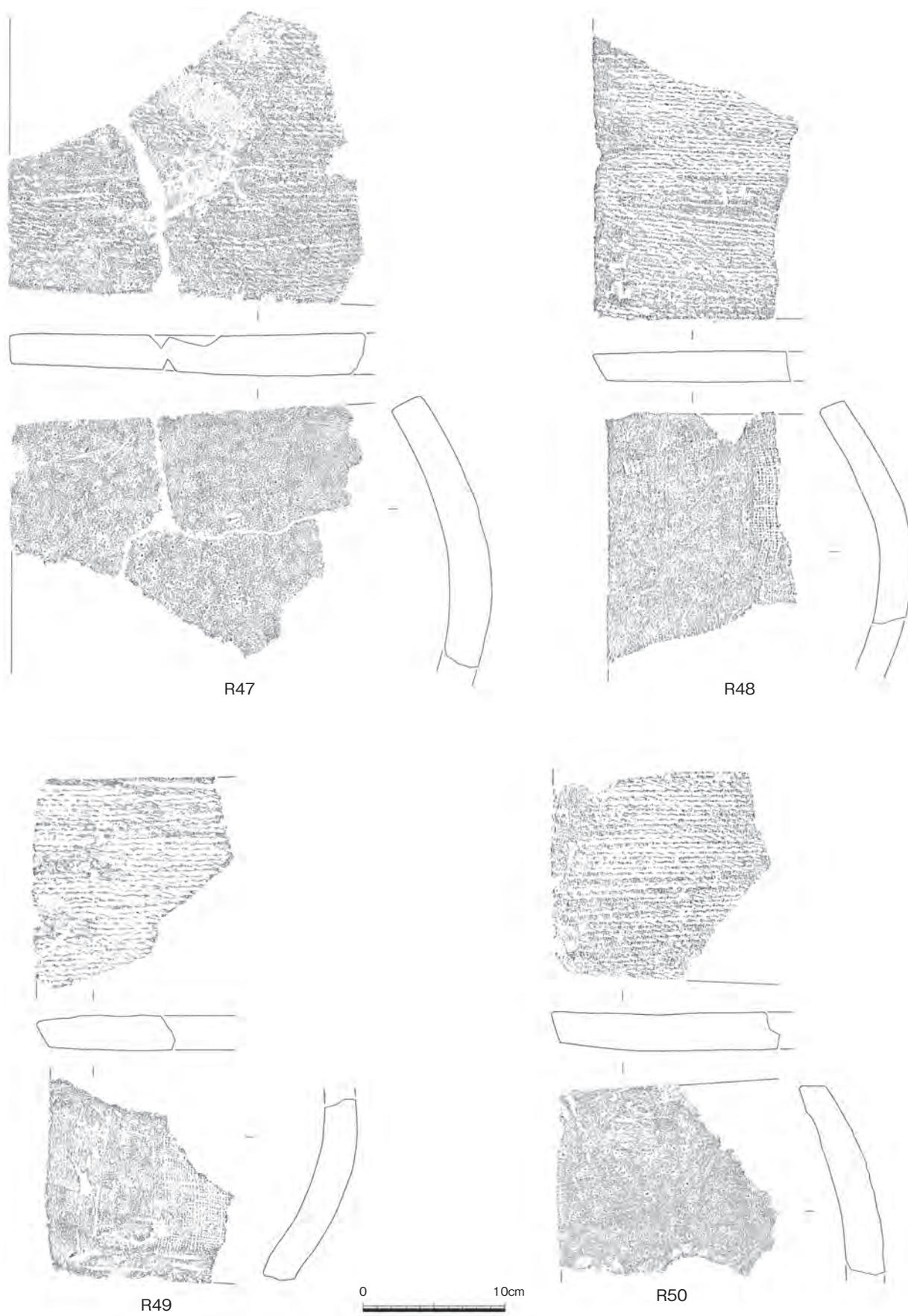
第24図 馬屋森向遺跡出土遺物3 (1/4)



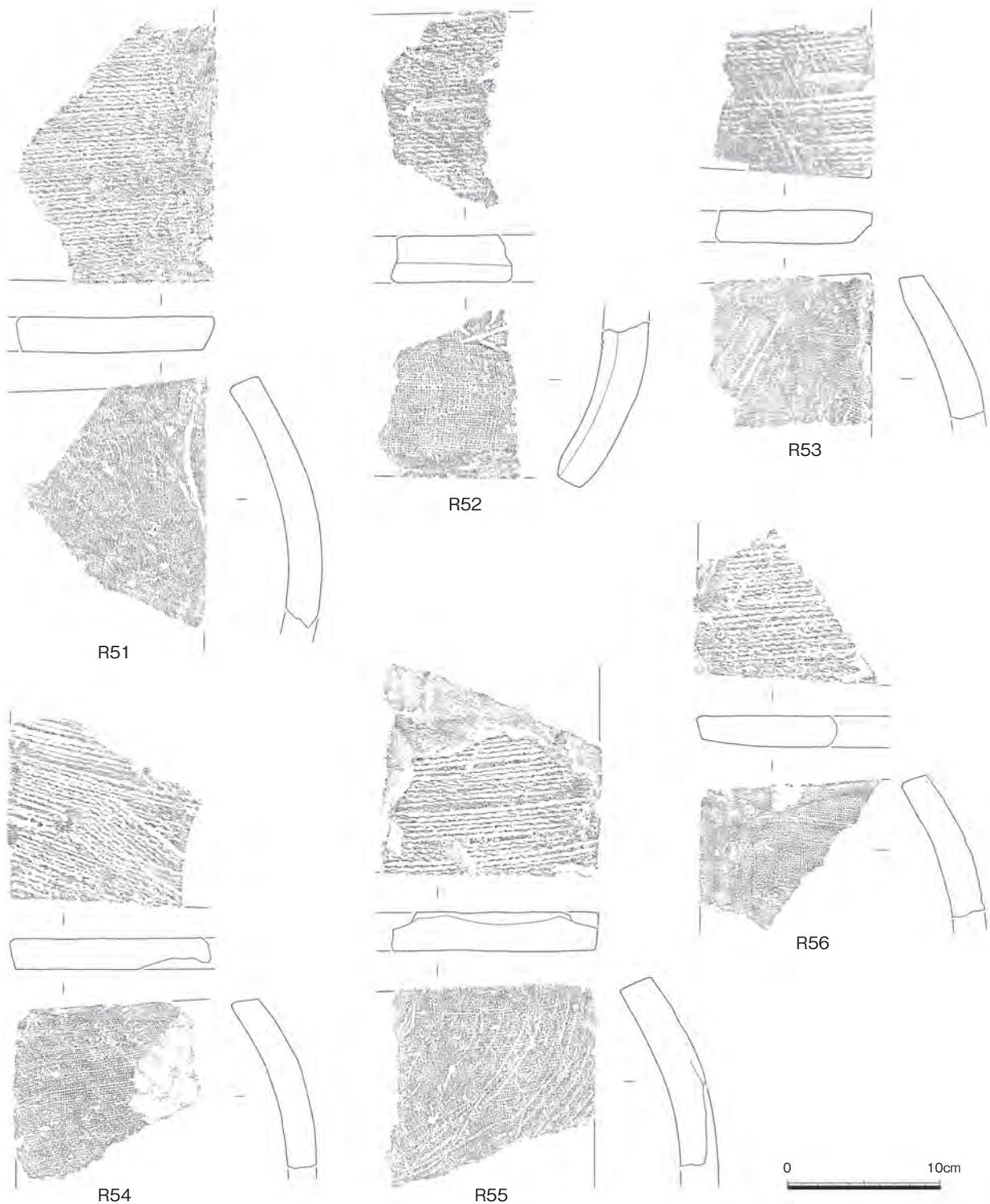
第25図 馬屋森向遺跡出土遺物4 (1/4)



第26図 馬屋森向遺跡出土遺物5 (1/4)



第27図 馬屋森向遺跡出土遺物6 (1/4)



第28図 馬屋森向遺跡出土遺物7 (1/4)

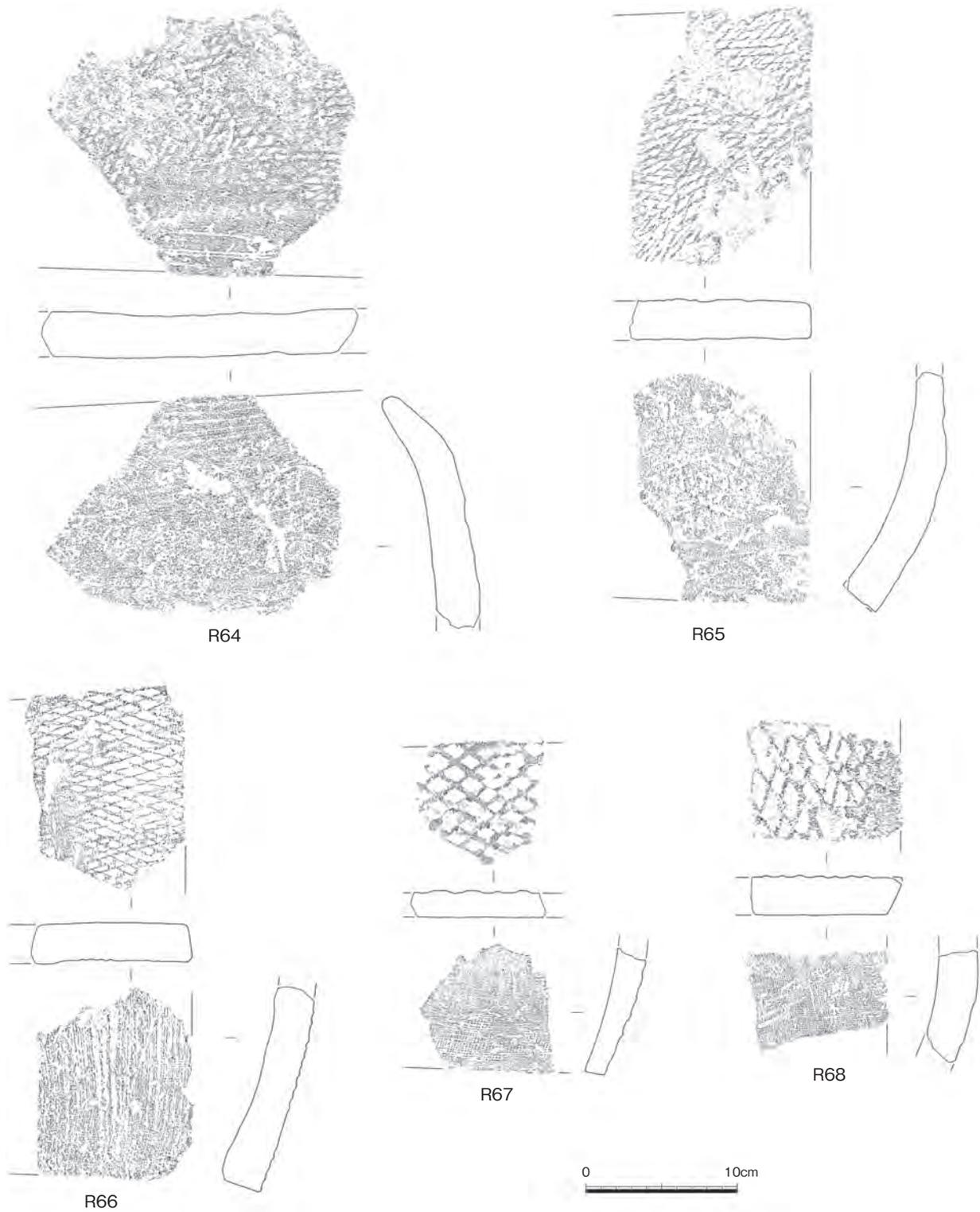
出土遺物 (第22～34図、図版6～8)

遺物は上部・下部の礫層のほか、その間に堆積する粘質土層 (A-B断面第7～9層、C-D断面第10層) から多く出土している。須恵器には、蓋、杯、盤、壺がある。50～53は蓋で、53には輪状のつまみを貼り付ける。杯には底部に断面矩形の高台を貼り付ける54～57と、平底の65・66がある。58は口縁部を欠いているが盤になるものと思われる。壺には長頸壺59・60と短頸壺62、丸い底部の外



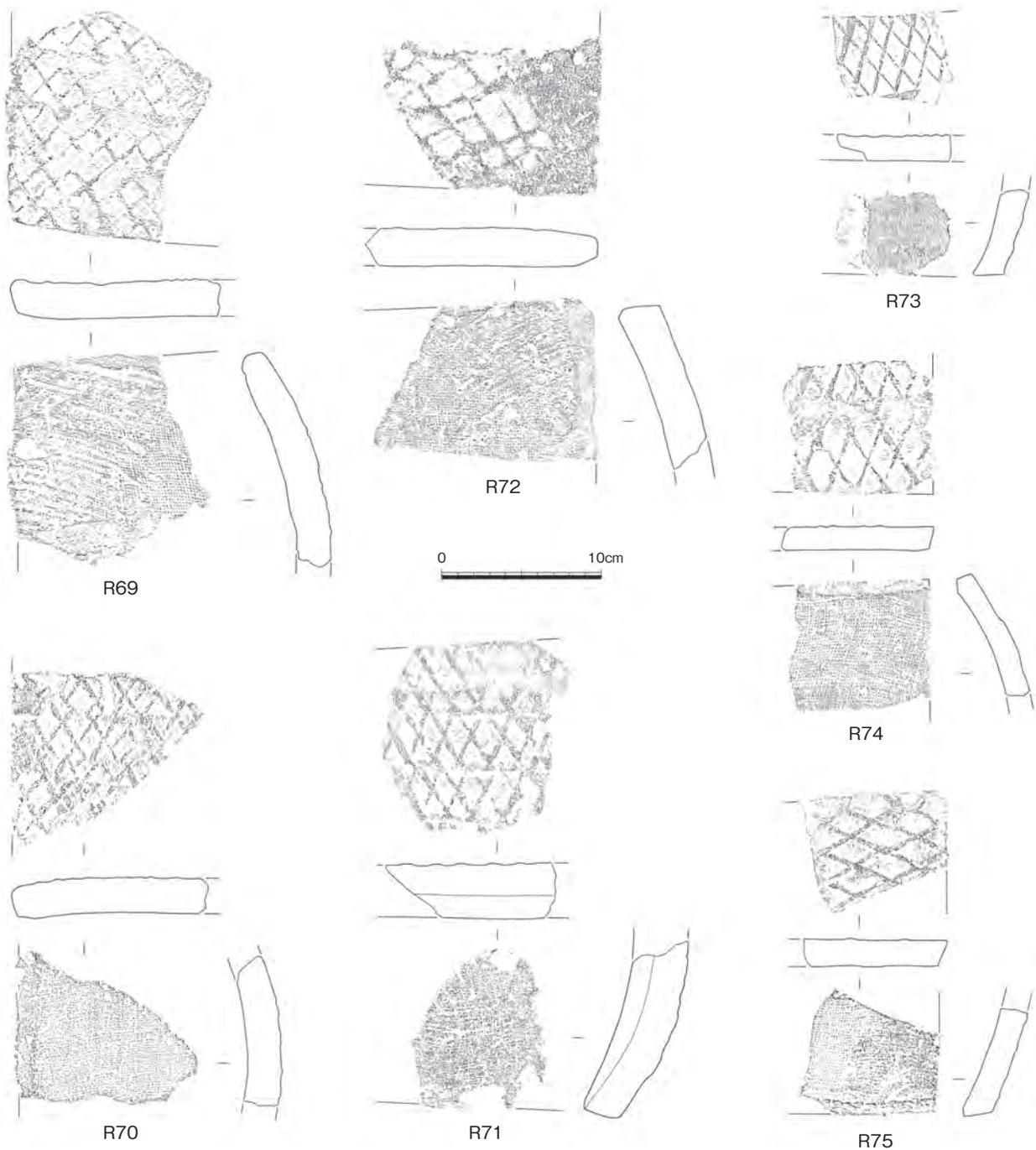
第29図 馬屋森向遺跡出土遺物 8 (1/4)

をヘラ削りする63がある。このうち62は、灰白色の胎土や外面に掛かる緑灰色の自然釉などから牛窓窯跡群の製品と考えられる。土師器には杯・碗のほか、皿、鍋、竈がある。底部に高い高台を貼り付ける73～81や底部を平高台状に仕上げる85～89は11～12世紀の杯・碗である。灰白色を呈する碗82～84は13世紀に位置づけられる。小皿90～92のうち、90は底部を糸切りする。鍋93は、浅い体部から屈折して開く口縁部をもつ。64は土師器の竈形土器片で、掛口の直下に貼り付けられた庇を欠いているが、8～9世紀に属するものと思われる。94・95は内傾する口縁下に鋸状の突帯をめぐらす瓦質の羽釜で、95には棒状の脚を貼り付けた痕が残る。備前陶器には碗、壺、搗鉢、甕がある。



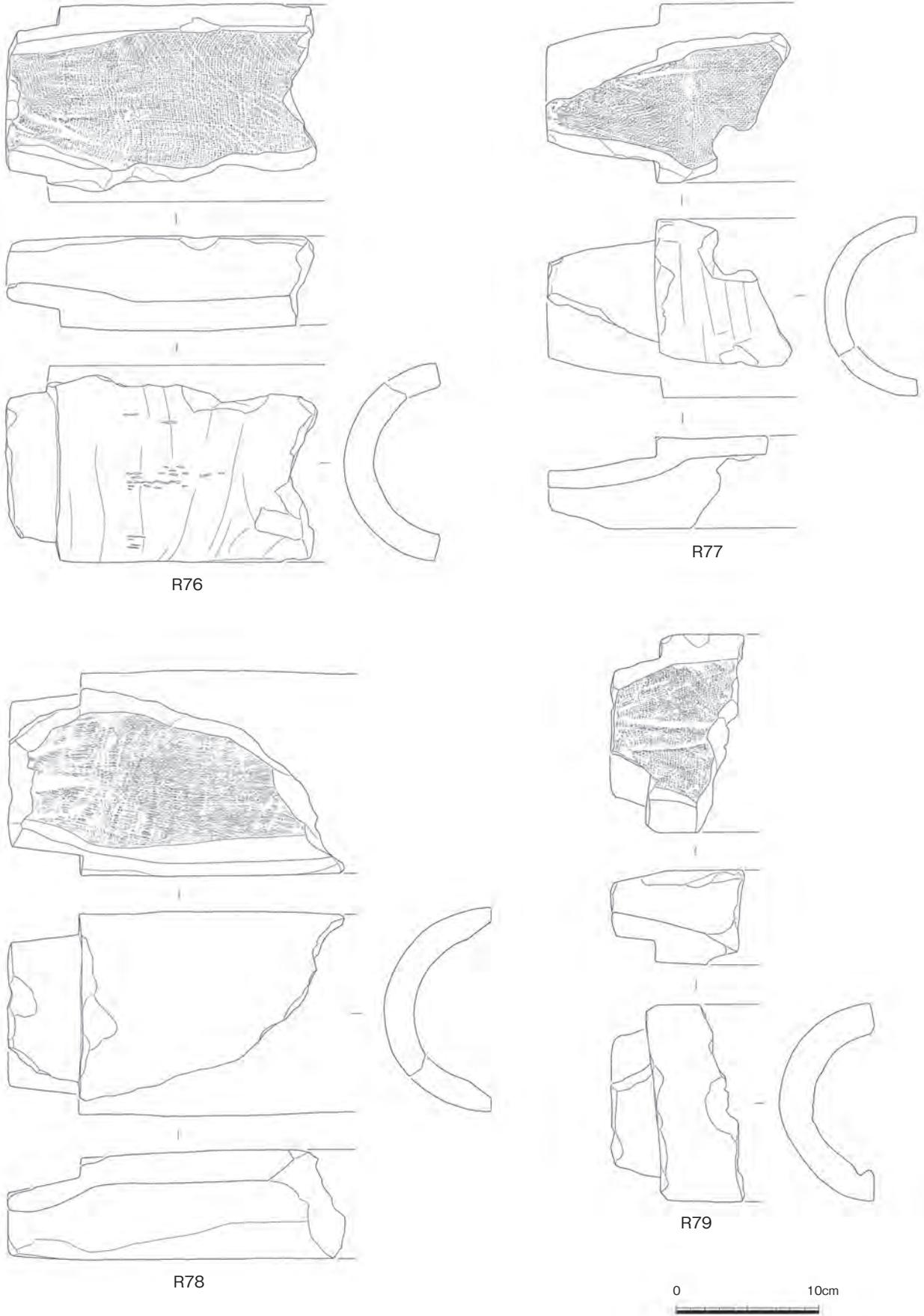
第30図 馬屋森向遺跡出土遺物9 (1/4)

碗68・69は口縁部を失っているが、糸切りする底部の稜は不明瞭で、概ね13世紀に属するものと思われる。96は直立する口縁部の端を折り返して小さな玉縁をつくる15世紀後半の壺である。播鉢97・98は口縁端部を上方に拡張し内面に播目を施しており、15世紀に位置づけられる。100は密な播目を施した後に口縁部をヨコナデして仕上げる19世紀の播鉢である。102は口縁部を幅広い玉縁につくる16世紀後半の甕である。肥前陶器の碗103は底部を糸切りし、見込みに胎土目の痕を残す。104は灰釉を

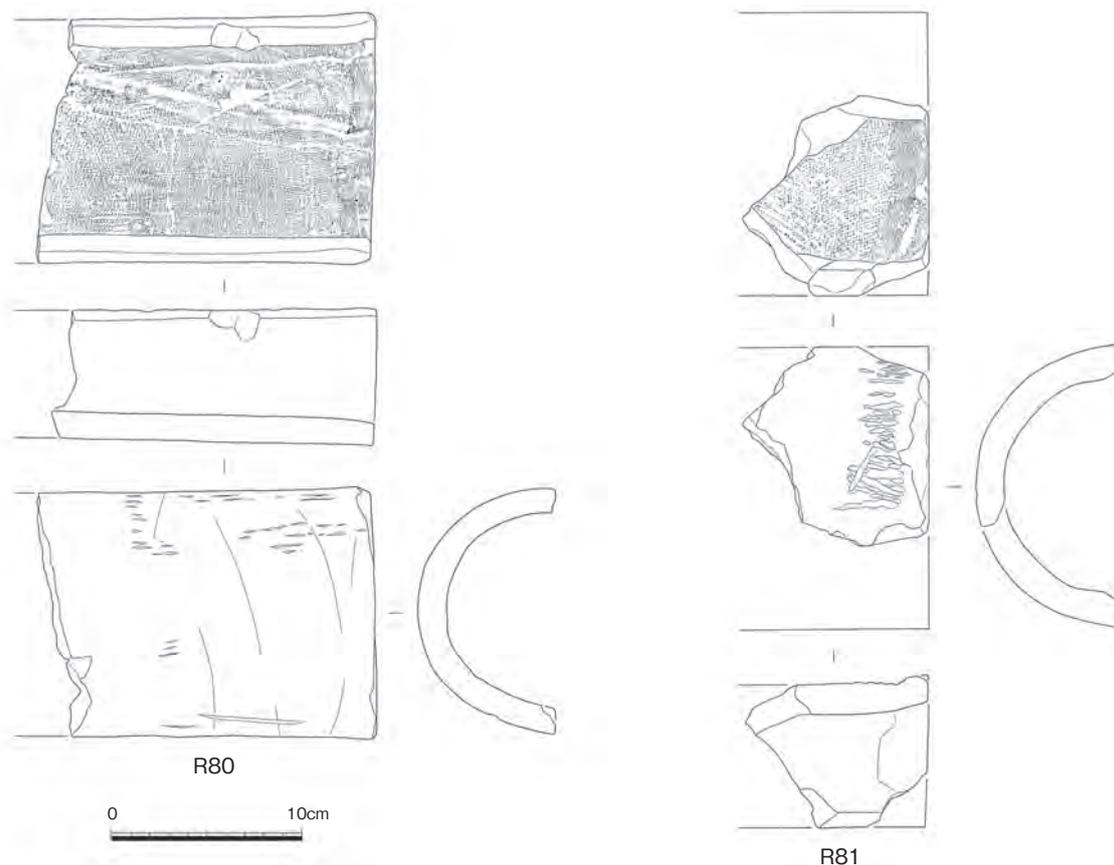


第31図 馬屋森向遺跡出土遺物10 (1/4)

掛けた瀬戸美濃陶器の椀で、高台は露胎に仕上げている。青磁には口縁部が外反する105・106と、斜め上方にのびる口縁部下に唐草文をめぐらす107がある。109は埴輪片で、外面をヨコハケで調整した後、断面が低い台形をなす突帯を貼り付ける。S 1は長さ4.1cm、幅3.6cmの方形をした滑石製品で、厚さは1.5cmある。上下に円孔を貫通させ、表には四ツ目菱文を3つ並べて浮き彫りする。S 2は流紋岩製の砥石である。長さ11.8cm、幅2.9cm、厚さ1.1cmを測る短冊形をしていて、重量は59.7gある。下端を除く5面に線状痕が認められる。M 2～5は北宋銭で、M 2が太平通宝（初鑄976年）、M 3・4が皇宗通宝（初鑄1039年～）、M 5が紹聖元宝（初鑄1094年）である。瓦には、軒丸瓦R 25～44、軒平瓦R 45・46のほか、平瓦R 47～75、丸瓦R 76～81がある。軒丸瓦は瓦当部30点と丸瓦の接合部15



第32図 馬屋森向遺跡出土遺物11 (1/4)

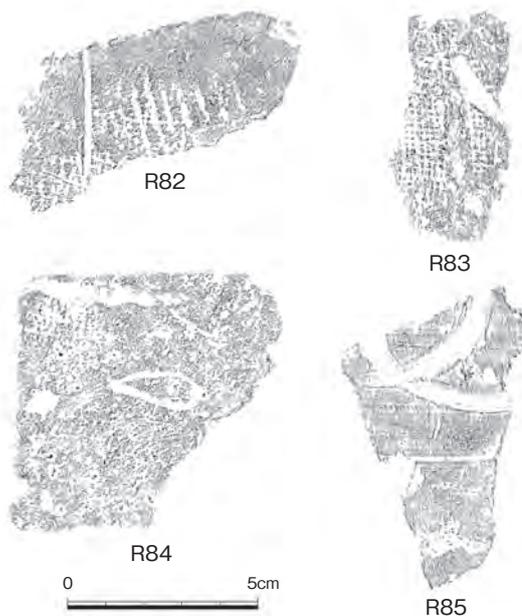


第33図 馬屋森向遺跡出土遺物12 (1/4)

点があるが、ここでは瓦当部20点を図示した。R25～33は、単弁8葉の間に楔形の間弁を配した内区を二重の圏線で囲み素文の外縁をめぐらせた、備前国分寺1式である。瓦当の径は18cmに復元され、外縁の側面には深さ0.5cmの范型痕跡が認められる。R34～43は外区に2重の圏線をめぐらすもので、内区の文様は明らかではないが、胎土や焼成の特徴は備前国分寺1式と共通する。これらはいずれも丸瓦の接合式で、丸瓦の先端に刻みを施すものはない。

R44は、8葉の複弁を飾る内区を二重の圏線で囲み外縁の斜面に面違い鋸歯文をめぐらす平城宮6225型式系の軒丸瓦で、その径は17cmに復元される。灰色を呈する胎土は精良で、備前国分寺1式とは明らかに異なる。軒平瓦は5点あるが、瓦当部はR45・46のみである。いずれも平城宮6663C型式系の文様を飾る軒平瓦で、中心飾りの花頭文を人字形に置き換えた備前国分寺6式にあたる。断面は浅い曲線を描き、上下をヘラ削りで整えている。平瓦には凸面に縦位の縄叩きを施したR47～62、格子叩きを施したR64～75、平行叩きを施したR63がある。いずれも破片で、全形を知り得るものはない。R82～85は凹面に文字や記号をヘラ描きした平瓦である。R82は「|」、R83は「八?」、R84・85は「○?」を記す。

(亀山)



第34図 馬屋森向遺跡出土遺物13 (1/2)

## 第3章 総括

### 第1節 調査の成果

#### 馬屋長田遺跡

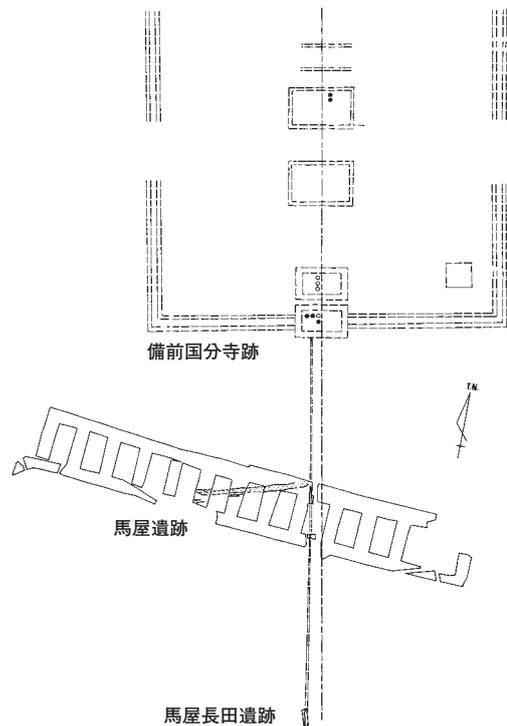
この遺跡で検出された溝1・2は、北へ約900m離れた位置で確認された馬屋遺跡（字鍛冶屋後）の溝2・3から続くものと推定されている（第35図）<sup>1</sup>。これは、備前国分寺跡から仁王堂池（備前国分尼寺跡推定地）へと延びる現道に並走することから、両寺を結ぶ古道の西側溝と考えられ、溝2の出土遺物から8世紀後半までさかのぼり得ることが明らかとなった。馬屋遺跡の調査において、対となる東側の側溝は確認されていないものの、備前国分寺跡中軸線からの距離を手がかりに約10mの道幅が復元されている。その当否はともかくとして、上下二層にわたって検出されたこの溝が、現在まで維持されている道路に関わるものであることは十分に考えられる。ただし、路面にあたる箇所は現道の下となっているため、その構造等については明らかでない。

試掘調査における遺物の出土量を検討すると（表2）、馬屋長田遺跡に当たるトレンチ6・6Eでは総重量0.62～0.79kgと少ないのに対し、東側のトレンチ4・5では1.58～2.99kg、西側のトレンチ7では2.01kgと多くなっている。今回の調査では遺構を確認できなかったものの、備前国分寺と国分尼寺を南北につなぐ古道の東西に何らかの施設が存在していた可能性は十分に考えられる。

ところで、珂磨駅から西進して日古木丘陵を下った古代山陽道は、砂川を渡って東高月丘陵の裾で西に折れ、馬屋に至るものと推定されている。東軽部から南方にかけて砂川の両岸に広がる条里地割の方位N-40°-Wは、河本付近を境にN-20°-Eへと変わり穂崎まで続いている。この違いは土地の傾斜方向に影響されたものと考えられ、少なくとも穂崎付近の条里地割（高月条里）は古代山陽道と斜交しているようである。

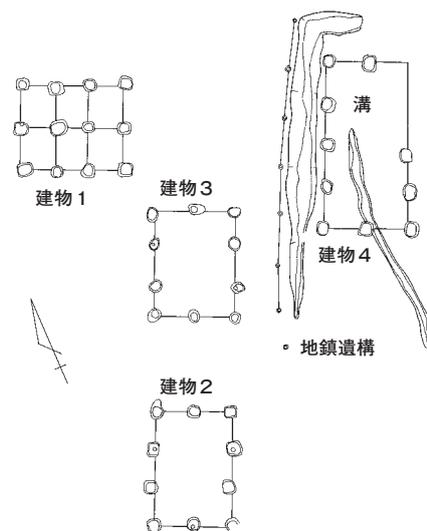
#### 馬屋出水遺跡

備前国分尼寺跡推定地から西へ約130m離れた地点で、8世紀後半の掘立柱建物3棟を検出した。掘立柱建物2は掘立柱建物3の建替えと考えられ、掘立柱建物1についても掘立柱建物2と近接することから、同時に存在した可能性は低い。出土遺物は主に須恵器の供膳具と土師器の煮炊き具からなり、丹塗り土師器や陶硯、墨書土器などは認められない。ここから270mほど北東にある馬屋遺跡（字笠



第35図 馬屋遺跡と馬屋長田遺跡の古道（1/4,000）

井)では、丘陵裾部の緩斜面を造成して配置された建物群が検出されている(第36図)。4×2間・3×2間の側柱建物3棟と3×2間の総柱建物1棟で、建物規模は馬屋出水遺跡のものときほど違いはない。横山定は、備前国分寺跡から離れた位置にあってN-24°-Eを測る建物の棟方向が備前国分寺の主軸方位N-10°-Eと異なることから高月駅家との関連を考慮し、館と推定している。これに対し近江俊秀は、下野国新田駅家の駅戸集落と推定されている栃木県森後遺跡との比較から、駅馬を繋ぐ厩舎(建物4)やその餌を収蔵する倉(建物1)、敷き藁や馬具を納めた建物(建物2・3)と理解する<sup>2</sup>。いずれにしても、備前国分寺・国分尼寺や高月駅家の周辺に、これらに関連する施設やそれを支えた人々の住まいが展開していたことは容易に推測される。



第36図 馬屋遺跡の建物群  
(1/400)

### 馬屋森向遺跡

今回の調査地点で上下二層にわたって認められた粘質土混じりの礫層は、中・近世に行われた土地造成の痕跡と考えられる。礫層の上面では柱穴等は検出されておらず、耕地の拡大が目的であったのかもしれない。また、基盤層で確認した整地層は古道に関わるものと報告されていたが<sup>3</sup>、狭い範囲の調査ということもあって現状では判断が難しい。今後の調査を待って検討すべきであろう。

さて、多量の遺物を包含する粘質土混じりの礫層は斜面の上方から運ばれたようで、遺跡の中心は馬屋の集落が広がる県道の北側にあるものと思われる。この礫層から出土した瓦について見ると、上部と下部の間で出土量こそ異なるものの、その種類に大きな違いは認められない。軒丸瓦は、型式が明らかな11点のうち10点が備前国分寺の創建瓦とされる1式である。わずかに1点出土した平城宮6225型式系の軒丸瓦は、中房を失っているため正確を期しがたいが、約17cmに復元される瓦当径、尖った弁端、弧状に開く間弁などの特徴から岡山市賞田廃寺の6A類に類似する<sup>4</sup>。一方、型式の判明する軒平瓦は2点で、いずれも備前国分寺跡の6式である。こうした軒瓦型式の少なさは、軒丸瓦8型式、軒平瓦17型式を数える馬屋遺跡とは大いに異なるが、備前国分寺跡の補修瓦とされる格子叩きの平瓦も一定量見つまっていることを考えると、今回の出土資料が高月駅家推定地における軒瓦の組み合わせを正しく反映しているとは断定できない。

ところで、縄叩きが施された平瓦の中には、粘土を貼り重ねて成形したものが散見される(R52・55・58)。備前国分寺跡の創建期平瓦を検討した宇垣は、水平な作業台の上で粘土を重ね伸ばしたうえ糸を使って切り離し、凸型台に載せて整形したと想定する<sup>5</sup>。しかし、こうした痕跡が見られる平瓦は極く少なく、手間のかかるこのような製作手法が広く行われていたとは考え難い。R55では貼り重ねた粘土の下に大きな凹みが観察され、R5のように凹みをそのまま残すものも認められるが、こうした凹みは瓦の素地を切り出す粘土塊を手足を使って整形した際の痕跡とは考えられないだろうか。つまり、通常は使用されない整形痕の残る粘土塊上部をも平瓦の素材として活かすため、粘土の貼り足しが行われたと理解したい。宇垣は文字瓦の分析から創建期瓦の生産に多数の工人が関与したものと想定しているが、こうした製作手法の瓦は国分寺創建における瓦生産の窮迫を示すものかもしれない。(亀山)

## 第2節 岡山県の山陽道諸駅

岡山県南部を東西に走る山陽道には備前国4駅、備中国4駅が設置されており、その所在地の比定も行われている<sup>6</sup>。ここでは、先学の研究成果をもとに従来の知見を簡単に整理しておきたい。

### 立地

駅家推定地の立地を見ると、川沿いに開けた平野に位置する藤野・津高・河辺駅家、背後に丘陵を負う珂磨・高月・津峴・小田駅家、狭隘な川底平野に位置する坂長駅家に分けられる。また、珂磨・津高・津峴・河辺駅家はいずれも大河川の西岸に位置する点が注意される<sup>7</sup>。駅家間の距離は15～16kmを測るが、津峴駅家の前後で7km・10kmと短くなっている。

こうした駅家推定地の中には、藤野駅家と和気郡家・藤野廃寺、高月駅家と備前国分寺・国分尼寺、津高駅家と荒神廃寺、津峴駅家と都宇郡家・惣爪廃寺のように、郡家や古代寺院と近接するものがある<sup>8</sup>。さらに、高月駅家と牟佐大塚古墳、津峴駅家と王墓山古墳など、周辺に分布する後期～終末期古墳との関連も指摘されている<sup>9</sup>。

### 出土遺物

山陽道の駅家は瓦葺、粉壁に整えられていたことが知られ、瓦は駅家跡を特定する重要な手がかりとなっている。備前国・備中国の駅家は平城宮Ⅱ期後半の6225・6663型式の軒瓦を採用しているが、備前国の軒丸瓦は従前からの丸瓦接合式であるのに対し、備中国の軒丸瓦には最新の横置型一本づくりが採用されていることから、それぞれ異なる経路により導入されたと考えられている<sup>10</sup>。

ところで、津峴駅家では平城宮Ⅱ期前半の6313・6685型式の軒瓦が出土しており、その整備は『続日本紀』に「造山陽道諸国駅家」の記事が見える天平元（729）年まで遡る可能性がある。津峴駅家が他に先んじて瓦葺きに整備された背景には、備中国府と繋がる高梁川と山陽道が交差する位置にあって国府津（吉備津）にも近く、吉備の迎賓館としての役割を担っていたためと考えられる。駅間距離が津峴駅家前後で短いのも、あるいはこうした事情によるのかもしれない。（亀山）

### 註

- 1 伊藤 晃・横山 定「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会 1995
- 2 近江俊秀「古代日本の情報戦略」朝日新聞出版 2016、172～175頁
- 3 椿 真治「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20 岡山県教育委員会 1988
- 4 扇崎 由「史跡賞田廃寺跡」岡山市教育委員会 2005  
備前国府に至る矢津経由の支路により、高月駅家と賞田廃寺は近距離で結ばれていた可能性がある。
- 5 宇垣匡雅「備前国分寺跡」『赤磐市文化財調査報告第3集』赤磐市教育委員会 2009、154頁
- 6 近年の論文では、足利健亮「吉備地方の古代山陽道駅路の復元」『日本古代地理研究』大明堂 1985、中村太一「備前国における古代山陽道駅路の再検討」『古代交通研究3』1994、高橋美久二「山陽道の駅と駅路」『古代交通の考古地理』大明堂 1995などがある。
- 7 「討議録」『駅家と在地社会』奈良文化財研究所 2004、145～147頁
- 8 草原孝典は高月駅家が赤坂郡家に、津高駅家が津高郡家に併置されたと推定する。  
草原孝典「平城宮式瓦の展開」『新道遺跡』岡山市教育委員会 2002、93～94頁
- 9 菱田哲郎「大型横穴式石室と交通」『横穴式石室の研究』同成社 2020
- 10 梶原義実「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開」『国分寺瓦の研究』名古屋大学出版会 2010、97頁

## 遺物観察表

### 土器・陶磁器

掲載 番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	備考
					口径	底径	器高				
1	トレンチ4	排土	須恵器	杯		7.6	(1.3)	灰白色(N5/0)	0.5mmの砂粒	高台部1/7	
2	トレンチ2W	灰色粘質土層	備前陶器	碗		5.6	(1.7)	灰白色(N7/0)	0.5~1.5mmの砂粒	底部1/3	底部糸切
3	トレンチ6	耕土層	備前陶器	碗		5.6	(1.9)	灰白色(N7/0)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/3	底部糸切
4	トレンチ1	床土層	須恵器	皿		4.0	(0.8)	灰白色(N8/0)	0.5mm以下の砂粒	底部1/1	底部糸切
5	トレンチ4	黄色粘質土層	土師器	碗	12.4		(2.6)	灰白色(10YR8/2)	0.5~1mmの砂粒	口縁部1/8	早鳥式
6	トレンチ4	排土	土師器	碗		5.2	(1.3)	灰白色(2.5Y8/2)	0.5mmの砂粒	高台部1/4	早鳥式
7	トレンチ15	黄色粘質土層	土師器	碗			(1.1)	浅黄褐色(10YR8/3)	0.5mm以下の砂粒	高台部1/3	早鳥式
8	トレンチ3W	黄色粘質土層	土師器	皿	7.4	5.2	1.3	橙色(5YR6/6)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/8	底部ヘラ切
9	トレンチ15	灰褐色粘質土層	瓦質土器	釜			(3.4)	灰色(5Y6/1)	0.5~1mmの砂粒	口縁部片	
10	トレンチ27	黒色砂質土層	瓦質土器	釜			(5.1)	暗灰色(N3/0)	0.5mmの砂粒	口縁部片	
11	トレンチ4	灰黄色粘質土層	瓦質土器	鍋			(13.9)	灰色(N4/0)	0.5mmの砂粒	脚部片	
12	トレンチ15	灰色粘質土層	備前陶器	壺	10.6		(5.4)	灰赤色(2.5YR5/2)	0.5~1mmの砂粒	口縁部1/5	
13	トレンチ25	褐色粘質土層	備前陶器	壺			(2.3)	赤灰色(2.5YR4/1)	1~5mmの砂礫	口縁部片	
14	トレンチ10E	褐灰色礫層	備前陶器	搦鉢			(4.8)	にぶい橙色(5YR6/4)	1mmの砂粒	口縁部片	
15	トレンチ4	灰黄色粘質土層	備前陶器	搦鉢			(5.4)	赤褐色(10R5/4)	1mmの砂粒	口縁部片	
16	トレンチ27	黒色砂質土層	備前陶器	搦鉢			(5.2)	赤灰色(2.5YR4/1)	1~3mmの砂礫	口縁部片	
17	トレンチ4	排土	備前陶器	搦鉢			(5.0)	灰赤色(10R5/2)	0.5~2mmの砂礫	底部片	
18	トレンチ4	灰黄色粘質土層	東播系陶器	搦鉢			(3.2)	灰白色(N7/0)	0.5~1mmの砂粒	口縁部片	
19	トレンチ15	灰褐色粘質土層	東播系陶器	搦鉢			(3.3)	灰白色(N7/0)	0.5~1mmの砂粒	口縁部片	
20	トレンチ27	黒色砂質土層	肥前陶器	碗	13.2		(4.2)	灰白色(2.5Y7/1)	精良	口縁部1/9	陶胎染付
21	トレンチ5	1~3層	肥前陶器	碗		4.2	(1.5)	灰緑色(1.5G5/3)	精良	高台部1/3	内野山窯
22	トレンチ15	黄色粘質土層	京系陶器	碗		3.2	(1.4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	精良	高台部1/3	
23	馬屋長田遺跡	溝2	須恵器	杯		8.6	(2.2)	灰白色(N7/0)	精良	高台部1/5	
24	馬屋出水遺跡	ビット85b	須恵器	蓋	22.2		(3.1)	灰色(N5/0)	1~2mmの砂礫	口縁部1/6	輪状つまみ
25	トレンチ12	溝	須恵器	蓋	14.8		(2.1)	灰白色(5Y7/0)	1.5mm以下の砂粒	1/8	
26	馬屋出水遺跡	ビット80	須恵器	蓋	14.4		(1.5)	灰色(N5/0)	1~2mmの砂礫	天井部1/6	
27	馬屋出水遺跡	溝	須恵器	蓋			(1.5)	灰色(5Y6/1)	0.5mmの砂粒	つまみ1/1	
28	馬屋出水遺跡	ビット89b	須恵器	杯	11.2	8.2	3.0	灰白色(2.5Y8/1)	0.5mmの砂粒	口縁部1/7	
29	馬屋出水遺跡	ビット81d	須恵器	杯	12.6	8.0	(4.8)	灰色(5Y6/1)	0.5mmの砂粒	底部1/4	
30	馬屋出水遺跡	溝	須恵器	杯	11.6	7.5	4.1	黄灰色(2.5Y6/1)	0.5mmの砂粒	口縁部3/10	
31	トレンチ12	溝	須恵器	杯	12.4	8.6	4.1	灰白色(5Y7/1)	2mm以下の砂礫	1/8	底部ヘラ切
32	トレンチ12	溝	須恵器	杯		8.8	(2.6)	褐灰色(10YR5/1)	1.5mm以下の砂粒	高台部1/2	
33	馬屋出水遺跡	暗褐色粘質土層	須恵器	杯		10.8	(1.0)	灰白色(N7/0)	0.5mm以下の砂粒	高台部1/8	
34	馬屋出水遺跡	暗灰色粘質土層	須恵器	杯		7.4	(1.4)	灰色(2.5GY5/1)	0.5~1mmの砂粒	高台部4/9	
35	馬屋出水遺跡	ビット83b	須恵器	杯	15.6	9.4	6.1	灰白色(N7/0)	0.5~2mmの砂礫	高台部1/2	
36	馬屋出水遺跡	黒褐色粘質土層	土師器	杯	15.2		(4.0)	橙色(5YR7/6)	0.5~1mmの砂粒	口縁部1/7	
37	馬屋出水遺跡	暗褐色粘質土層	土師器	杯	12.0		2.8	浅黄褐色(7.5YR8/4)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/5	
38	馬屋出水遺跡	暗褐色粘質土層	土師器	皿	13.2		(1.7)	浅黄褐色(10YR8/3)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/10	
39	馬屋出水遺跡	ビット22	土師器	碗	8.1	3.8	3.6	灰黄褐色(10YR6/2)	1~2mmの砂礫	完形	
40	馬屋出水遺跡	ビット22	土師器	甕	29.8		(6.5)	灰白色(10YR8/2)	0.5~1.5mmの砂粒	口縁部1/4	
41	馬屋出水遺跡	溝	須恵器	平瓶			(4.0)	赤灰色(7.5R5/1)	0.5mmの砂粒	頸部1/2	
42	馬屋出水遺跡	地山上	須恵器	平瓶		9.6	(12.2)	灰色(N5/0)	1~2mmの砂礫	口縁部欠	
43	馬屋出水遺跡	ビット86	須恵器	甕			(6.7)	黄灰色(2.5Y6/1)	0.5~1mmの砂粒	口縁部片	
44	馬屋出水遺跡	4層	備前陶器	甕			(6.3)	灰白色(5Y7/1)	1~5mmの砂礫	口縁部片	
45	馬屋出水遺跡	黒褐色粘質土層	東播系陶器	搦鉢	25.4		(3.3)	灰色(N6/0)	0.5~1mmの砂粒	口縁部1/8	
46	馬屋出水遺跡	ビット51	土師器	碗	10.8		(2.5)	灰白色(2.5Y8/2)	1mmの砂粒	口縁部1/6	早鳥式
47	馬屋出水遺跡	ビット21	土師器	碗		4.2	(1.2)	灰白色(2.5Y8/2)	0.5mm以下の砂粒	高台部2/5	早鳥式
48	馬屋出水遺跡	黒褐色粘質土層	土師器	碗	9.0		3.0	灰白色(2.5Y8/1)	1~1.5mmの砂粒	体部1/3	
49	馬屋出水遺跡	砂礫層	瓦質土器	鍋			(5.8)	黄灰色(2.5Y4/1)	0.5mm以下の砂粒	口縁部片	
50	馬屋森向遺跡	ビット25	須恵器	蓋	16.0		(1.8)	灰色(N6/0)	1mm以下の砂粒	1/6	
51	馬屋森向遺跡	ビット23	須恵器	蓋	18.3		(2.5)	灰色(N6/0)	4mm以下の砂礫	1/4	
52	馬屋森向遺跡	下部礫層	須恵器	蓋	18.4		(2.6)	灰色(N5/0)	1.5mm以下の砂粒	1/4	
53	馬屋森向遺跡	盛土上面	須恵器	蓋			(3.0)	灰色(N6/0)	1mm以下の砂粒	2/5	輪状つまみ

掲載 番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	備考
					口径	底径	器高				
54	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	須恵器	杯		11.5	(2.1)	にぶい赤褐色(5YR5/3)	1~2mmの砂礫	底部1/2	
55	馬屋森向遺跡	下部礫層	須恵器	杯	15.0	11.6	3.7	灰色(N5/0)	1mm以下の砂粒	1/6	
56	馬屋森向遺跡	側溝	須恵器	杯		7.6	(3.2)	灰色(N6/0)	1mm以下の砂粒	高台部1/4	
57	馬屋森向遺跡	側溝	須恵器	杯		6.6	(1.9)	橙色(5YR6/6)	1mm以下の砂粒	高台部1/2	
58	トレンチ24E	灰黒色礫層	須恵器	皿			(1.3)	灰色(N6/0)	0.5mmの砂粒	高台部1/9	
59	馬屋森向遺跡	下部礫層	須恵器	壺			(6.1)	灰白色(2.5Y7/1)	2mm以下の砂礫	口頸部1/3	
60	馬屋森向遺跡	土坑1	須恵器	壺		12.8	(3.8)	灰白色(N7/0)	2mm前後の砂礫	高台部片	
61	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	須恵器	壺		16.6	(3.9)	灰色(N6/0)	1mm前後の砂粒	高台部1/5	
62	馬屋森向遺跡	暗灰色土層~	須恵器	壺			(6.0)	灰色(5Y6/1)	精良	口縁部1/12	
63	馬屋森向遺跡	下部礫層	須恵器	壺			(7.2)	灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒	底部片	
64	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	土師器	竈			(12.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	1~3mmの砂礫	掛口部片	
65	馬屋森向遺跡	側溝	須恵器	杯	11.6	8.4	3.5	灰白色(N7/0)	1mm前後の砂粒	底部1/1	
66	馬屋森向遺跡	下部礫層	須恵器	杯		7.0	(2.8)	灰色(N6/0)	2mm以下の砂礫	底部1/1	
67	馬屋森向遺跡	ピット25	須恵器	杯	12.2	8.0	(3.6)	灰白色(5Y7/1)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/4	
68	馬屋森向遺跡	上部礫層	備前陶器	椀		6.0	(2.0)	灰白色(N7/0)	1.5mm以下の砂粒	底部1/3	底部糸切
69	トレンチ24W	灰黒色粘質土層	備前陶器	椀		6.6	(1.8)	灰白色(N7/0)	0.5mmの砂粒	底部1/4	底部糸切
70	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	土師器	杯	14.0	7.6	4.2	にぶい橙色(10YR7/3)	1~3mmの砂礫	底部1/1	底部糸切
71	トレンチ24W	溝	土師器	杯		8.4	(2.5)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.5~1.5mmの砂粒	底部1/6	
72	トレンチ24W	褐色粘質土層	土師器	杯		7.1	(2.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	底部1/5	
73	馬屋森向遺跡	下部礫層上面	土師器	杯・椀		6.6	(2.5)	灰白色(10YR8/2)	1mm前後の砂粒	高台1/3	
74	トレンチ24W	排土	土師器	杯・椀		7.5	(2.3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1.5mm以下の砂粒	高台部1/3	
75	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	土師器	杯・椀		8.0	(2.1)	褐灰色(10YR6/1)	1~2mmの砂礫	高台部1/1	
77	トレンチ24W	褐色粘質土層	土師器	杯・椀		7.6	(2.4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1~2mmの砂礫	高台部1/6	
78	トレンチ24	暗灰色土層	土師器	杯・椀		8.3	(2.3)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	1.5mm以下の砂粒	高台部1/1	
79	馬屋森向遺跡	下部礫層	土師器	杯・椀		7.2	(2.5)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	3~5mmの礫	高台部1/3	
80	馬屋森向遺跡	暗灰色土層~	土師器	杯・椀		6.6	(2.1)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	高台部1/3	
81	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	土師器	杯・椀		8.5	(2.9)	灰白色(10YR8/2)	1mm前後の砂粒	高台部1/4	
82	馬屋森向遺跡	上部礫層	土師器	椀		5.4	(1.4)	灰白色(7.5YR8/2)	2mm以下の砂礫	高台部1/1	早鳥式
83	トレンチ24W	溝	土師器	椀		5.8	(2.0)	灰白色(10YR8/2)	1.5mm以下の砂粒	高台部1/3	早鳥式
84	トレンチ24W	褐色粘質土層	土師器	椀		6.2	(2.5)	灰白色(2.5Y8/1)	0.5mmの砂粒	高台部1/3	早鳥式
85	トレンチ24W	排土	土師器	杯		8.4	(2.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	1~1.5mmの砂粒	高台部1/2	
86	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	土師器	杯		6.2	(2.3)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	1.5mm以下の砂粒	底部1/1	底部糸切
87	トレンチ24W	褐色粘質土層	土師器	杯		5.6	(1.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	1mmの砂粒	底部3/4	
88	トレンチ24W	—	土師器	杯		5.3	(1.9)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mmの砂粒	底部1/1	
89	馬屋森向遺跡	下部礫層	土師器	杯		6.2	(1.6)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	底部1/1	底部糸切
90	馬屋森向遺跡	下部礫層	土師器	皿	8.0	5.3	1.6	浅黄橙色(2.5Y7/2)	3.5mm以下の砂礫	口縁1/3	底部糸切
91	馬屋森向遺跡	上部礫層	土師器	皿	9.4	6.0	1.3	にぶい黄橙色(10YR7/3)	3mm以下の砂礫	1/3	底部ヘラ切
92	トレンチ24W	排土	土師器	皿	10.4	6.8	(2.4)	灰黄色(2.5Y7/2)	0.5mmの砂粒	口縁部1/3	
93	トレンチ24W	黒色土層	土師器	鍋	30.6		(6.8)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	
94	馬屋森向遺跡	上部礫層	瓦質土器	羽釜	25.6		(6.0)	褐灰色(10YR4/1)	1mm前後の砂粒	口縁部片	
95	トレンチ24W	褐色粘質土層	瓦質土器	釜			(5.0)	灰色(N5/0)	0.5mmの砂粒	口縁部片	足付
96	馬屋森向遺跡	灰黒色粘質土層	備前陶器	壺	11.0		(4.7)	にぶい赤褐色(2.5YR6/3)	1~4mmの砂礫	口縁部1/5	
97	馬屋森向遺跡	上部礫層	備前陶器	搦鉢			(7.4)	にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	3mm以下の砂礫	口縁部片	
98	馬屋森向遺跡	下部礫層	備前陶器	搦鉢			(5.7)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1.5mm以下の砂粒	口縁部片	
99	トレンチ24E	灰黒色土層	備前陶器	搦鉢			(6.8)	褐灰色(7.5YR5/1)	3mm以下の砂礫	口縁部片	
100	トレンチ24E	排土	備前陶器	搦鉢			(4.7)	橙色(2.5YR6/6)	1~1.5mmの砂粒	口縁部片	
101	トレンチ24W	灰黒色粘質土層	備前陶器	搦鉢			(5.9)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2~5mmの砂礫	底部片	
102	トレンチ24W	灰黒色粘質土層	備前陶器	甕			(6.8)	灰赤色(2.5YR4/2)	2~5mmの砂礫	口縁部片	
103	トレンチ24W	灰色礫層	肥前陶器	椀		4.0	(2.0)	灰褐色(5YR6/2)	0.5mmの砂粒	高台部1/2	胎土目
104	馬屋森向遺跡	上部礫層	陶器	椀		5.0	(2.7)	灰白色(10YR8/2)	精良	高台部1/1	瀬戸美濃
105	トレンチ24W	排土	青磁	碗	14.6		(3.2)	オリーブ灰色(5GY6/1)	精良	口縁部1/9	
106	トレンチ24W	黄色土層~	青磁	碗	16.4		(2.6)	灰みの黄緑色(5GY5/3)	精良	1/12	
107	馬屋森向遺跡	上部礫層	青磁	碗	12.0		(3.6)	明オリーブ灰色(5GY7/1)	精良	口縁部1/6	
108	トレンチ24W	灰黒色粘質土層	白磁	皿	10.2		(2.6)	灰白色(N8/0)	精良	口縁部1/7	
109	馬屋森向遺跡	暗灰色土層	埴輪	円筒			(4.8)	橙色(7.5YR7/6)	2mm以下の砂礫	小片	

## 瓦

掲載 番号	地区名	遺構名	器種	部位				計測値 (cm)			調整	備考
				瓦当	側辺	端辺	玉縁	長さ	幅	厚さ		
R1	トレンチ5	1～3層	軒丸瓦	○				(1.7)	(3.1)		左巻き三巴文・珠文12	
R2	トレンチ6	灰色礫層	軒丸瓦	1式				(3.8)	(6.4)		凸面ナデ、接合式	
R3	トレンチ16	灰色礫層	平瓦		○	狭		(23.0)	(18.7)	(2.4)	凸面縄目、凹面布目	
R4	トレンチ17	黒灰色粘質土層	平瓦		○	狭		(21.2)	(18.7)	(2.1)	凸面縄目、凹面布目	
R5	トレンチ16	灰色礫層	平瓦		○	広		(13.6)	(20.0)	2.1	凸面縄目、凹面布目	凸面に凹み
R6	トレンチ16	灰色礫層	平瓦		○	狭		(16.8)	(13.5)	1.9	凸面縄目、凹面布目	
R7	トレンチ16	灰色礫層	平瓦		○	狭		(15.9)	(14.6)	1.9	凸面縄目、凹面布目	凹面にヘラ描き
R8	トレンチ15	灰色粘質土層	平瓦		○	狭		(10.7)	(14.2)	(2.1)	凸面縄目、凹面布目	
R9	トレンチ16	灰色礫層	平瓦		○	広		(21.8)	(10.5)	(1.8)	凸面縄目、凹面布目	
R10	トレンチ3W	黄色粘質土層	平瓦		○			(9.3)	(9.2)	(2.2)	凸面格子目C、凹面布目	粘土貼り足し
R11	トレンチ19N	5層	平瓦					(7.2)	(7.2)	(1.6)	凸面格子目D、凹面布目	
R12	尼寺北	工事立会	平瓦			○		(13.1)	(7.5)	(2.2)	凸面格子目F、凹面布目	
R13	トレンチ15	黒灰色粘質土層	平瓦		○			(18.6)	(10.8)	(2.3)	凸面格子目F、凹面布目	
R14	トレンチ15	黒灰色粘質土層	丸瓦		○		○	(19.6)	(11.2)	(1.4)	凸面縄目+ナデ、凹面布目	
R15	トレンチ16	灰色礫層	丸瓦		○		○	(12.0)	(16.0)	2.6	凸面ナデ、凹面布目	
R16	トレンチ5	黒灰色粘質土層	丸瓦		○	○		(18.3)	12.9	1.9	凸面縄目+ナデ、凹面布目	薄手
R17	トレンチ16	灰色礫層	丸瓦		○	○		(16.3)	13.9	1.6	凸面縄目+ナデ、凹面布目	
R18	馬屋長田遺跡	4～5層	平瓦		○	広		(19.6)	(15.0)	2.3	凸面縄目、凹面布目	
R19	馬屋長田遺跡	4～5層	平瓦		○	狭		(11.0)	(7.9)	1.4	凸面縄目、凹面布目	
R20	馬屋長田遺跡	溝1	平瓦			○		(9.2)	(9.1)	(2.4)	凸面縄目、凹面布目	
R21	馬屋長田遺跡	4～5層	丸瓦		○			(11.7)	(6.3)	(2.0)	凸面ナデ、凹面布目	
R22	馬屋出水遺跡	ビット81	平瓦		○	狭		(12.9)	(10.4)	(2.3)	凸面縄目、凹面布目	
R23	馬屋出水遺跡	ビット52	平瓦					(14.2)	(9.9)	(2.2)	凸面縄目、凹面布目	
R24	馬屋出水遺跡	ビット81b	丸瓦		○	○		(8.9)	(6.1)	(2.5)	凸面ナデ、凹面布目	
R25	馬屋森向遺跡	褐色粘質土層	軒丸瓦	1式				(17.5)	(15.9)		凸面ナデ、凹面布目	
R26	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(6.8)	(16.3)		側面ナデ、裏面ナデ・ハケメ	范型痕跡
R27	馬屋森向遺跡	暗灰色粘質土層	軒丸瓦	1式				(5.6)	(11.6)		側面ナデ、裏面ナデ	
R28	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(11.9)	(8.1)		側面ナデ、裏面ナデ	范型痕跡
R29	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(3.8)	(11.3)		側面ナデ、裏面ナデ	范型痕跡
R30	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(3.9)	(9.1)		側面ナデ、裏面ナデ	范型痕跡
R31	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(4.0)	(11.0)		裏面ナデ	
R32	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(4.1)	(9.2)		側面ナデ、裏面ナデ	
R33	馬屋森向遺跡	上部礫層	軒丸瓦	○				(5.5)	(9.8)		裏面ナデ	
R34	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	1式				(5.9)	(6.6)		側面ナデ、裏面ナデ	范型痕跡
R35	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(4.1)	(4.5)		側面ナデ、裏面ナデ	
R36	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(3.3)	(4.0)		側面ナデ、裏面ナデ	
R37	馬屋森向遺跡	—	軒丸瓦	○				(3.8)	(5.2)		側面ナデ、裏面ナデ	
R38	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(4.4)	(8.1)		側面ナデ	范型痕跡
R39	馬屋森向遺跡	上部礫層	軒丸瓦	○				(4.1)	(7.6)		側面ナデ	范型痕跡
R40	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(4.4)	(7.7)		側面ナデ	范型痕跡
R41	馬屋森向遺跡	暗褐色粘質土層	軒丸瓦	○				(4.8)	(6.9)		側面ナデ	
R42	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(4.8)	(8.6)		側面ナデ	范型痕跡
R43	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(4.3)	(10.1)		側面ナデ	范型痕跡
R44	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒丸瓦	○				(4.0)	(12.9)		側面ナデ、裏面ナデ	平城宮6225系
R45	馬屋森向遺跡	褐色粘質土層	軒平瓦	6式				(5.2)	(11.2)	4.6	凸面ケズリ、凹面ケズリ	
R46	馬屋森向遺跡	下部礫層	軒平瓦	6式				(7.8)	(15.4)	5.3	凸面ケズリ、凹面ケズリ	
R47	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	狭		(25.7)	(19.6)	2.8	凸面縄目、凹面布目	
R48	馬屋森向遺跡	暗灰色砂礫層	平瓦		○	狭		(13.9)	(16.1)	2.2	凸面縄目、凹面布目	
R49	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	狭		(14.6)	(12.8)	2.7	凸面縄目、凹面布目	
R50	馬屋森向遺跡	上部礫層	平瓦		○	狭		(16.1)	(13.8)	2.7	凸面縄目、凹面布目	
R51	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	広		(17.2)	(13.3)	2.4	凸面縄目、凹面布目	
R52	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○			(8.0)	(11.2)	3.2	凸面縄目、凹面布目	凹面にヘラ描き
R53	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	広		(9.9)	(9.7)	2.2	凸面縄目、凹面布目	端面に布目

掲載番号	地区名	遺構名	器種	部位				計測値 (cm)			調整	備考
				瓦当	側辺	端辺	玉縁	長さ	幅	厚さ		
R54	馬屋森向遺跡	側溝	平瓦		○	狭		(12.6)	(11.4)	2.1	凸面縄目、凹面布目	須恵質
R55	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	広		(13.5)	(12.5)	2.6	凸面縄目、凹面布目	粘土貼り足し
R56	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	狭		(11.7)	(9.3)	2.1	凸面縄目、凹面布目	須恵質
R57	馬屋森向遺跡	側溝	平瓦		○			(10.3)	(6.7)	1.7	凸面縄目、凹面布目	
R58	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	広		(10.4)	(10.5)	2.1	凸面縄目、凹面布目	
R59	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	狭		(12.8)	(14.3)	2.0	凸面縄目、凹面布目	須恵質
R60	馬屋森向遺跡	褐色粘質土層	平瓦		○	狭		(16.0)	(18.0)	2.2	凸面縄目、凹面ナデ	
R61	馬屋森向遺跡	側溝	平瓦		○	狭		(13.7)	(16.2)	2.5	凸面縄目、凹面布目	
R62	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○			(4.3)	(6.6)	2.9	凸面格子目E、凹面布目	側面に布目
R63	馬屋森向遺跡	側溝	平瓦		○			(6.9)	(4.2)	1.7	凸面条線、凹面布目	
R64	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○			(20.9)	(17.0)	3.1	凸面格子目A、凹面布目	
R65	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	広		(12.3)	(16.2)	2.8	凸面格子目A、凹面布目	
R66	トレンチ24W	褐色粘質土層	平瓦		○	広		(11.6)	(14.2)	(2.9)	凸面格子目A、凹面布目	須恵質
R67	馬屋森向遺跡	側溝	平瓦		○			(9.3)	(8.6)	2.2	凸面格子目C、凹面布目	
R68	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦			○		(10.3)	(8.3)	2.6	凸面格子目I、凹面布目	
R69	トレンチ24W	溝	平瓦		○	狭		(13.4)	(14.6)	(2.4)	凸面格子目D、凹面布目	
R70	馬屋森向遺跡	暗灰色粘質土層	平瓦			○		(10.7)	(9.4)	2.3	凸面格子目D、凹面布目	
R71	馬屋森向遺跡	暗灰色粘質土層	平瓦		○			(10.3)	(11.0)	3.5	凸面格子目D、凹面布目	粘土貼り足し
R72	馬屋森向遺跡	上部礫層	平瓦		○	広		(14.6)	(10.4)	2.7	凸面格子目F、凹面布目	
R73	馬屋森向遺跡	灰色砂礫層	平瓦		○			(7.6)	(6.1)	1.9	凸面格子目D、凹面布目	須恵質
R74	馬屋森向遺跡	褐色粘質土層	平瓦		○	広		(9.4)	(8.2)	1.5	凸面格子目F、凹面布目	須恵質
R75	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○	広		(9.3)	(9.0)	1.8	凸面格子目F、凹面布目	須恵質
R76	馬屋森向遺跡	下部礫層	丸瓦		○		○	(22.0)	(13.3)	3.0	凸面縄目+ナデ、凹面布目	
R77	馬屋森向遺跡	暗灰色粘質土層	丸瓦		○		○	(16.9)	(10.0)	1.4	凸面ナデ、凹面布目	須恵質
R78	馬屋森向遺跡	下部礫層	丸瓦		○		○	(23.7)	(13.8)	2.2	凸面ナデ、凹面布目	
R79	馬屋森向遺跡	褐色粘質土層	丸瓦		○		○	(9.4)	14.0	3.1	凸面ナデ、凹面布目	
R80	馬屋森向遺跡	下部礫層	丸瓦		○	○		(17.7)	13.4	1.5	凸面縄目+ナデ、凹面布目	
R81	馬屋森向遺跡	側溝	丸瓦		○	○		(9.8)	(12.1)	1.7	凸面縄目+ナデ、凹面布目	
R82	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦					(6.5)	(7.7)	2.6	凸面縄目、凹面布目	凹面にヘラ描き
R83	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○			(11.3)	(9.8)	2.2	凸面縄目、凹面布目	凸面にヘラ描き
R84	馬屋森向遺跡	上部礫層	平瓦					(8.6)	(5.7)	2.6	凸面縄目、凹面ナデ	凹面にヘラ描き
R85	馬屋森向遺跡	下部礫層	平瓦		○			(7.6)	(7.6)	2.2	凸面縄目、凹面布目	凹面にヘラ描き
R86	馬屋森向遺跡	暗灰色粘質土層	平瓦					(6.5)	(4.6)	2.6	凸面縄目、凹面布目	凹面にヘラ描き

瓦当の型式及び格子叩き目の分類は、赤磐市教育委員会「備前国分寺跡2」2011による

## 石製品・土製品・金属製品

掲載番号	地区名	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	時期	備考
				長さ	幅	厚さ				
S1	トレンチ24W	灰黒色粘質土層	—	4.1	3.6	1.5	46.0	滑石	—	
S2	馬屋森向遺跡	灰色粘質砂	砥石	11.8	2.9	1.1	69.7	流紋岩	—	
C1	トレンチ25E	上部礫層	土錘	(3.9)	0.9	0.9	(2.6)	土	中世	
C2	馬屋森向遺跡	ピット82b	土錘	(3.8)	1.1	1.0	(4.6)	土	古代	
M1	トレンチ4	灰黄色土層	銅銭	2.3	2.3	0.1	2.6	銅	鎌倉時代	熙寧元宝
M2	馬屋森向遺跡	上部礫層	銅銭	2.4	2.4	0.1	(2.1)	銅	鎌倉時代	太平通宝
M3	馬屋森向遺跡	上部礫層	銅銭	2.4	2.4	0.1	1.9	銅	鎌倉時代	皇宗通宝
M4	馬屋森向遺跡	上部礫層	銅銭	2.4	2.4	0.1	2.8	銅	鎌倉時代	皇宗通宝
M5	トレンチ24	—	銅銭	2.0	2.0	0.1	2.3	銅	鎌倉時代	紹聖元宝

## 報告書抄録

ふりがな	まやながたいせき まやいづみいせき まやもりむこういせき							
書名	馬屋長田遺跡 馬屋出水遺跡 馬屋森向遺跡							
副書名	県道岡山吉井線改良工事に伴う発掘調査							
巻次	2							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	254							
編著者名	亀山行雄、宇垣匡雅、椿 真治							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL <a href="https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/">https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/</a>							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2021年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まやながたいせき 馬屋長田遺跡	おかやまけん 岡山県 あかいわし 赤磐市 まや 馬屋	33322	33322227	34° 44’ 10”	133° 59’ 59”	19890508 ～ 19890715	22㎡	記録保存 調査
まやいづみいせき 馬屋出水遺跡	おかやまけん 岡山県 あかいわし 赤磐市 まや 馬屋	33322	33322226	34° 44’ 6”	133° 59’ 53”	19890508 ～ 19890715	220㎡	記録保存 調査
まやもりむこういせき 馬屋森向遺跡	おかやまけん 岡山県 あかいわし 赤磐市 まや 馬屋	33322	33322211	34° 43’ 56”	133° 59’ 36”	19890508 ～ 19890715	280㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
まやながたいせき 馬屋長田遺跡	古道	奈良・鎌倉時代		溝		須恵器、土師器、陶器、瓦		
まやいづみいせき 馬屋出水遺跡	集落、官衙	奈良・鎌倉時代		掘立柱建物、溝		須恵器、土師器、陶器、瓦質土器、瓦		
まやもりむこういせき 馬屋森向遺跡		奈良～江戸時代		整地層		須恵器、土師器、陶磁器、砥石、銅銭、瓦		
要約	<p>馬屋長田遺跡は、備前国分寺跡の中軸線を南に延長した位置にあり、南北に走る溝は古道の側溝と思われる。</p> <p>馬屋出水遺跡では、奈良時代の掘立柱建物3棟を検出した。備前国分寺・国分尼寺や高月駅家周辺に営まれた集落もしくは関連施設と推定される。</p> <p>馬屋森向遺跡では、古代～近世の整地層から多量の遺物が出土した。それらは、北に接する古代山陽道の高月駅家推定地から運ばれたものと思われる。</p>							



1 試掘トレンチ4 (西から)  
2 試掘トレンチ5 (北から)  
3 試掘トレンチ12 (北西から)

4 試掘トレンチ16 (北西から)  
5 試掘トレンチ21 (西から)  
6 試掘トレンチ26 (北西から)

図版 2



1 馬屋長田遺跡溝2 (北から)



2 馬屋長田遺跡南壁土層断面 (北から)



1 馬屋出水遺跡遺構全景（南西から）



2 馬屋森向遺跡下部礫層全景（南西から）

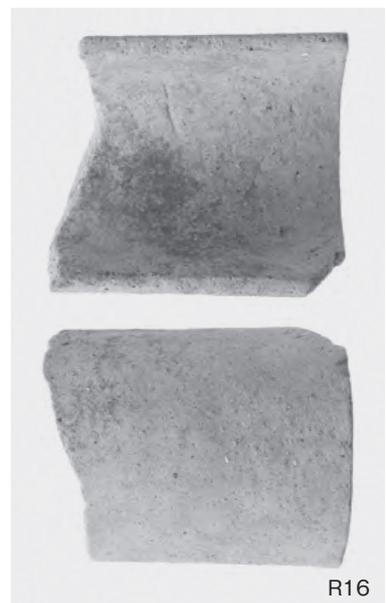
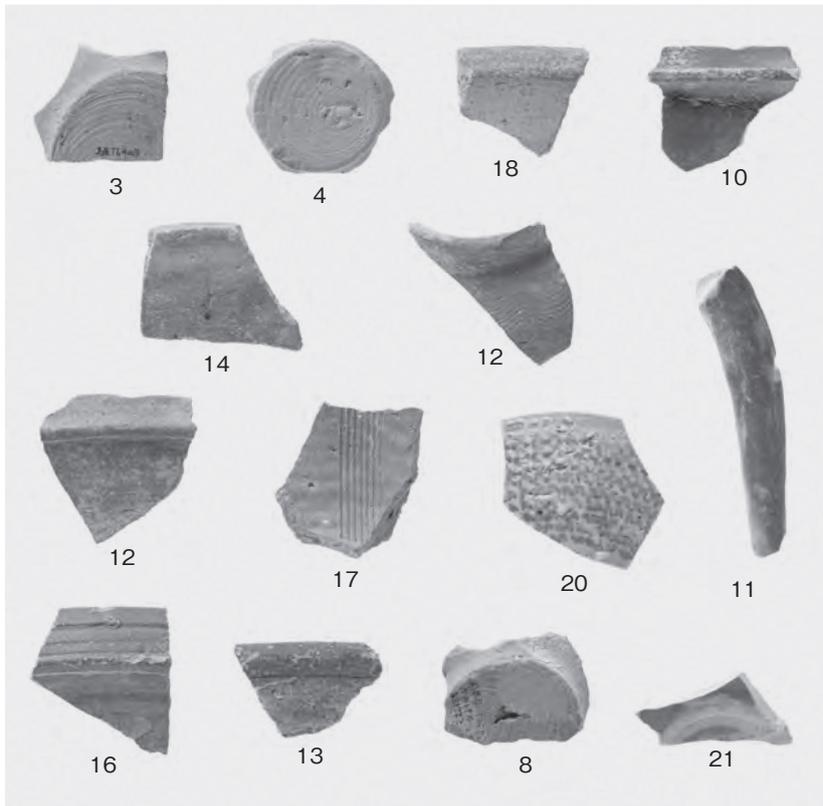
図版 4



1 馬屋森向遺跡基盤層全景（南西から）

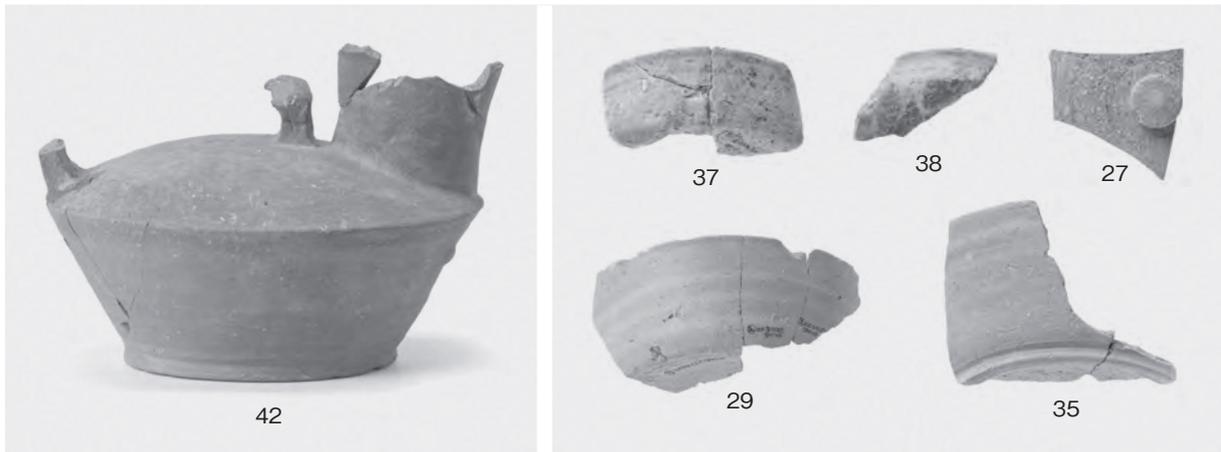


2 馬屋森向遺跡南西壁土層断面（北東から）

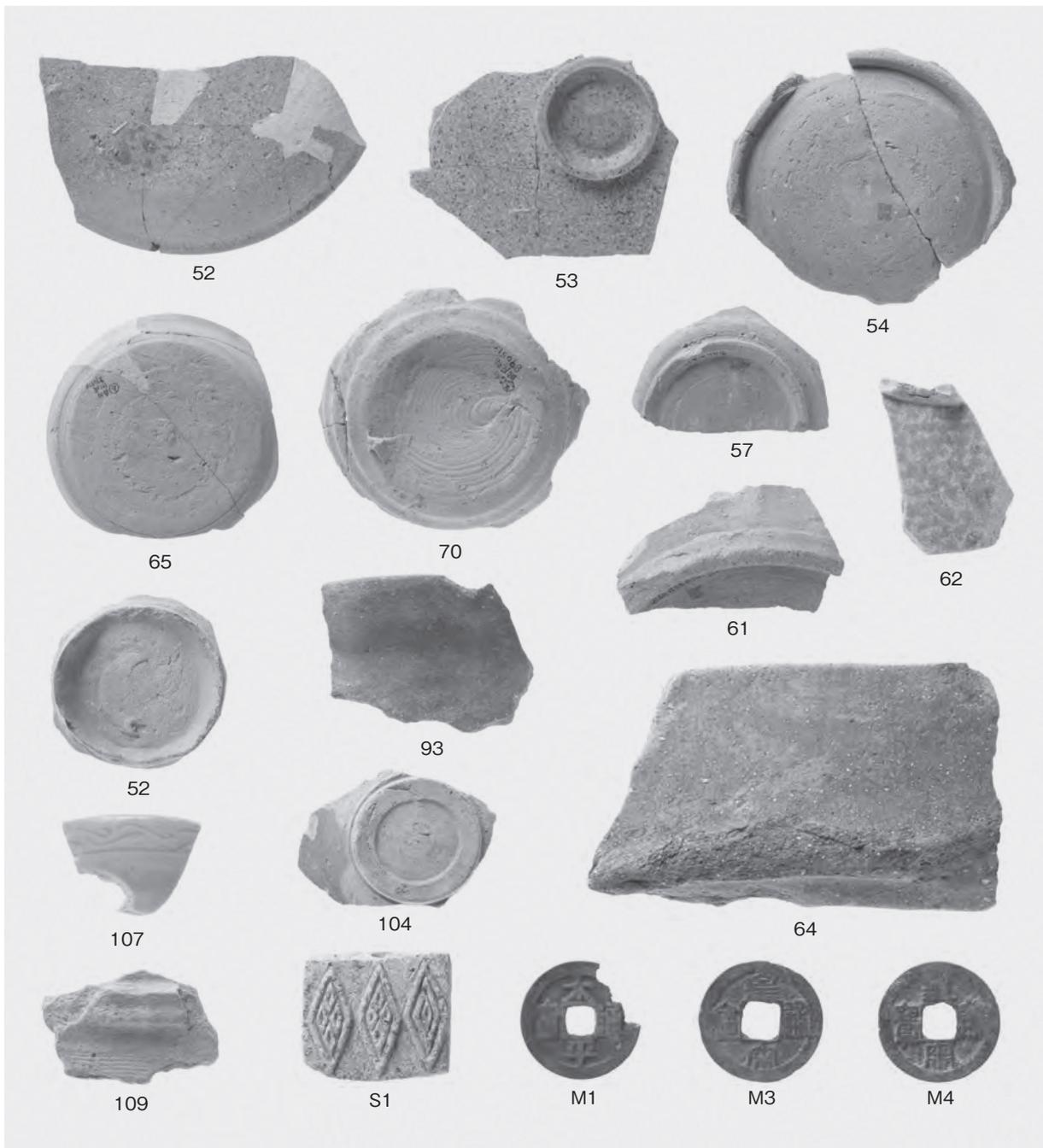


1 試掘調査出土遺物

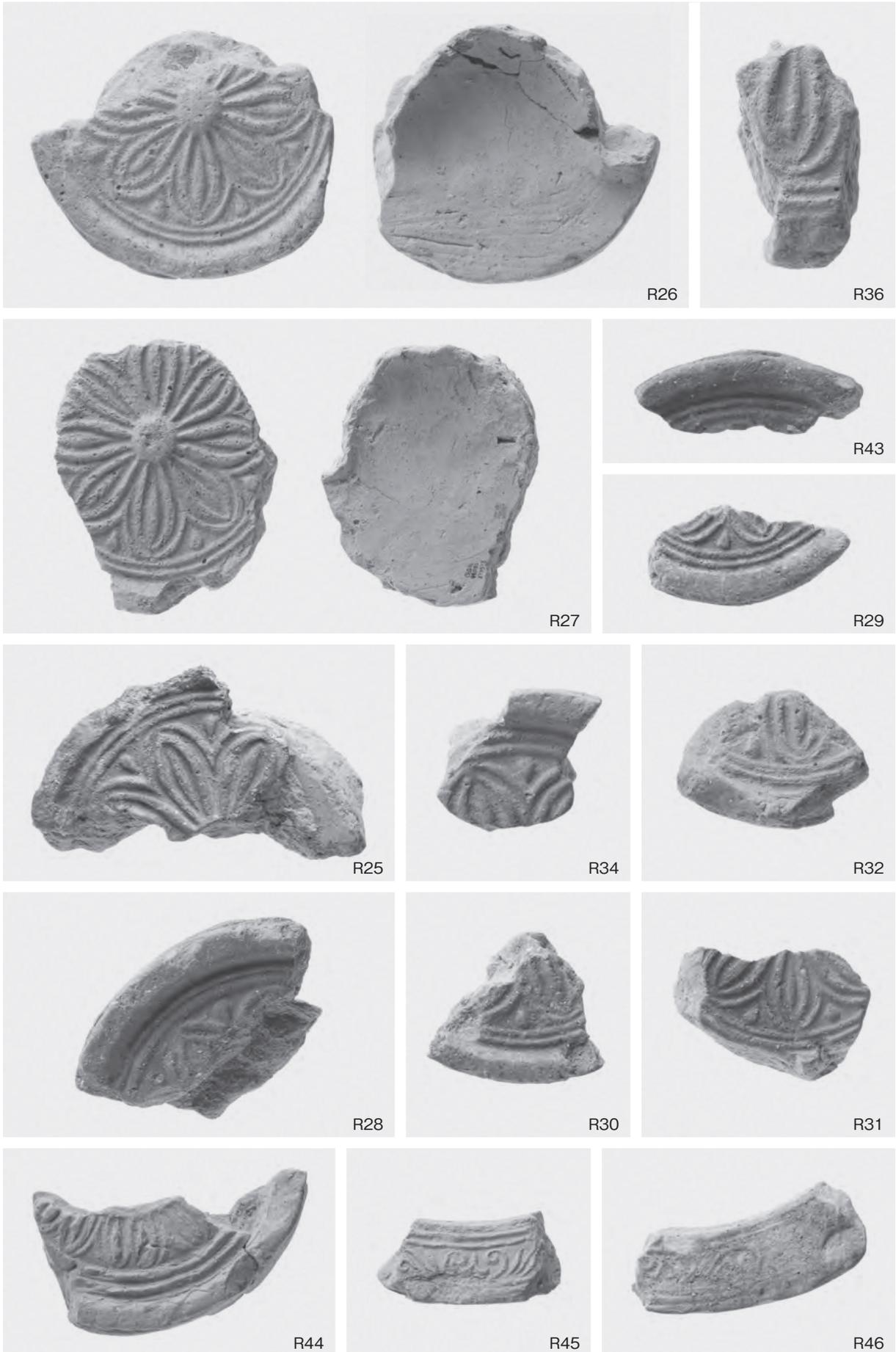
図版 6



1 馬屋出水遺跡出土遺物

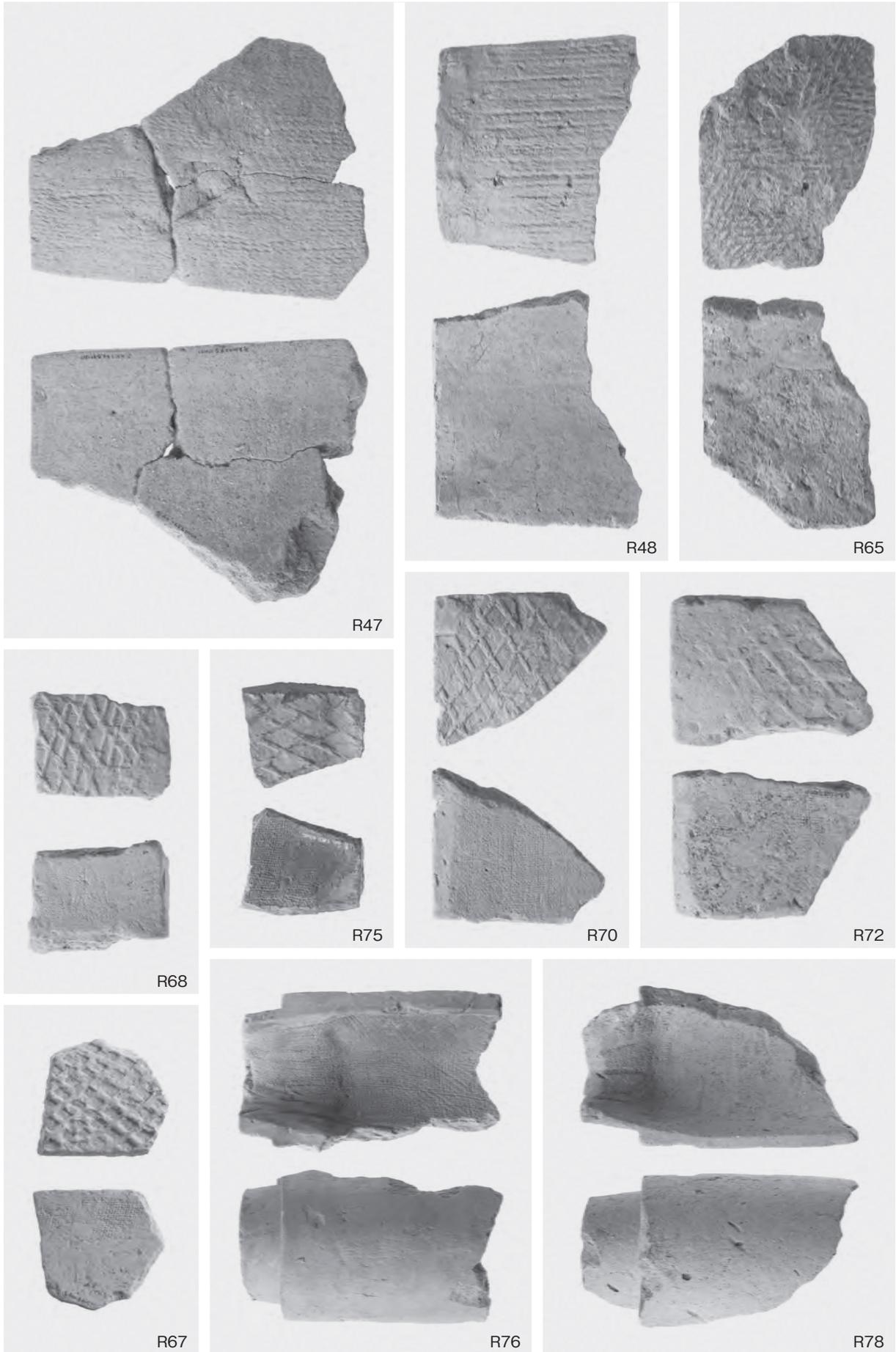


2 馬屋森向遺跡出土遺物 1



1 馬屋森向遺跡出土遺物 2

图版 8



1 馬屋森向遺跡出土遺物 3

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 254

馬屋長田遺跡

馬屋出水遺跡

馬屋森向遺跡

県道岡山吉井線改良工事に伴う発掘調査2

令和3年3月19日 印刷

令和3年3月19日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社  
岡山県総社市駅南一丁目1-5

